



鳥取県米子市

米子城跡 8 遺跡

1996. 3

財団法人 米子市教育文化事業団

序

鳥取県西部に位置する米子市は北に日本海、南に大山を控える自然環境に恵まれた地域であります。また、古代からの遺跡の宝庫で、歴史的、文化的遺産にも恵まれています。特に近年では市街地の開発に伴う発掘調査によって江戸時代の米子城城下町の様子が徐々に明らかになってきました。

この度報告致します米子城跡8遺跡は米子商工会議所建替工事に伴って発掘調査を実施したもので、江戸時代の遺構、遺物を検出しました。調査の成果はさることながら、なかでも特に多量の陶磁器、木製品、木簡が出土しており、当時の生活を考えるうえで大変貴重な資料となるものと思われます。

これらの資料が今後の調査研究及び教育のために広く活用され、さらに、広く一般の方々に埋蔵文化財に対する理解、関心を高めていただくうえで役に立てば幸いに思います。

最後になりましたが、調査に際しましては多大なご理解とご協力をいただきました地元の方々をはじめ、ご指導、ご支援を賜りました調査従事者並びに関係各位に対して厚くお礼を申し上げます。

平成8年3月

財団法人 米子市教育文化事業団

理事長 森田 隆朝

例　　言

- 1 本書は鳥取県米子市加茂町2丁目16-1番地において実施した米子駅境線加茂町沿道土地区画整理事業 米子商工会議所建替工事に伴う米子城跡8遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は米子市公園街路課の委託を受けて(財)米子市教育文化事業団が実施した。
- 3 調査は(財)米子市教育文化事業団調査員 高橋浩樹、米子市教育委員会教育文化課課長補佐 小原貴樹が担当し、福嶋昌子がこれを補佐した。
- 4 遺構の実測及び写真撮影は高橋、小原が行い、浄書は高橋が行った。
- 5 遺物の実測は高橋、小原、篠田明子、森井あづさ、仲田いづみが行い、浄書は篠田、森井が行った。
- 6 遺物の写真撮影は高橋が行った。
- 7 本書に用いた方位は第1図が磁北である以外はすべて座標北(G. N)を示し、標高は標準海拔高度である。座標値は国土座標第V系を用いた。
- 8 第1図は国土地理院発行の1:2,500の米子・境港都市計画計画図(米子市)27を複製、縮小し、加筆したものである。
- 9 本書は高橋、小原が執筆し、高橋が編集した。
- 10 出土遺物、実測図、写真等は米子市教育委員会で保管している。
- 11 現地調査及び整理作業には下記の方々の参加を得た。記して感謝致します。(50音順敬称略)

(現地調査)

井上美津子、上田健志、上田幸雄、鍾築千恵子、杵村博、倉敷精、桑本貴子、小林美恵子、陶山富子、高田茂、田中恵子、種大輔、寺西保、徳中繁野、徳中静枝、虎尾一明、西本友一、野口希八郎、野口稔、福一誠二、福原康次、松本幸江、松本幸延、森輝子、吉田繁

(整理作業)

梅林明子、加藤正子、国橋恒美、佐藤妙子、高塚洋子、坪井真優美、仲田いづみ、前田慶子、前田ひとみ、前田光江、政木桂子、森井あづさ、矢野早苗

目 次

1 調査の契機	1
2 位置と環境	1
3 調査の概要	4
4 検出遺構	4
5 出土遺物	12
1 磁 器	12
2 陶 器	16
3 撥 鉢	20
4 かわらけ・灯明皿	21
5 焙 烟	21
6 瓦質土器	22
7 その他の土器	22
8 瓦	22
9 木 製 品	24
10 漆 器	29
11 土 鍤	29
12 石 製 品	30
13 銅 製 品	31
14 鉄 製 品	33
15 動物遺存体	33
6 ま と め	91

挿図目次

第1図 調査地及び周辺遺跡分布図 (1/5,000)	2
第2図 屋敷の変遷模式図	3
第3図 土層図 (1/40)	5
第4図 遺構配置図 (1/200)	7～8
第5図 S D - 0 4 墓実測図 (1/30)	9
第6図 石列実測図 (1/50)	9
第7図 S K - 0 1 実測図 (1/30)	10
第8図 S K - 0 2 実測図 (1/20)	11
第9図 第8層出土磁器実測図 (1/3)	35
第10図 第8層出土磁器実測図 (1/3)	36
第11図 第8層出土磁器実測図 (1/3)	37
第12図 第5層出土磁器実測図 (1/3)	38
第13図 S D - 0 4 出土磁器実測図 (1/3)	39
第14図 S D - 0 4 出土磁器実測図 (1/3)	40
第15図 S D - 0 4 出土磁器実測図 (1/3)	41
第16図 第4層出土磁器実測図 (1/3)	42
第17図 第4層出土磁器実測図 (1/3)	43
第18図 第4層出土磁器実測図 (1/3)	44
第19図 第8層出土唐津実測図 (1/3)	45
第20図 第8層出土唐津実測図 (1/3)	46
第21図 第8層出土唐津・備前・織部・志野・萩実測図 (1/3)	47
第22図 第8層出土陶器実測図 (1/3)	48
第23図 第5層出土陶器実測図 (1/3)	48
第24図 S D - 0 4 出土陶器実測図 (1/3)	49
第25図 S D - 0 4 出土陶器実測図 (1/3)	50
第26図 S D - 0 4 出土陶器実測図 (1/3)	51
第27図 第4層出土陶器実測図 (1/3)	52
第28図 第4層出土陶器実測図 (1/3)	53
第29図 第4層出土陶器実測図 (1/3)	54
第30図 第4層出土陶器実測図 (1/3)	55
第31図 挿鉢実測図 (1/3)	56
第32図 挿鉢実測図 (1/3)	57
第33図 挿鉢実測図 (1/3)	58
第34図 かわらけ・灯明皿・焰烙実測図 (1/3)	59

第35図	焙烙実測図（1／3）	60
第36図	焙烙実測図（1／3）	61
第37図	瓦質土器・その他の土器実測図（1／3）	62
第38図	軒丸瓦実測図（1／4）	63
第39図	軒平瓦実測図（1／4）	64
第40図	軒棧瓦・棧瓦実測図（1／4）	65
第41図	丸瓦実測図（1／4）	66
第42図	丸瓦・鳥食実測図（1／4）	67
第43図	木簡実測図（1／2）	68
第44図	木筒実測図（1／2）	69
第45図	木筒・木札実測図（1／2、1／3）	70
第46図	下駄実測図（1／4）	71
第47図	下駄実測図（1／4）	72
第48図	下駄実測図（1／4）	73
第49図	栓・鍋蓋・曲物実測図（1／3）	74
第50図	曲物・柄杓実測図（1／3）	75
第51図	庖丁・籠・楊枝・杵・折敷・盆実測図（1／3）	76
第52図	切匙・箸実測図（1／3、1／2）	77
第53図	木刀・鍔実測図（1／3）	78
第54図	把手・ものさし・櫛実測図（1／2）	79
第55図	ほうき・三味線・撥・羽子板実測図（1／3）	80
第56図	竹とんぼ・独楽・人形実測図（1／2）	81
第57図	漆器実測図（1／3）	82
第58図	漆器実測図（1／3）	83
第59図	漆器実測図（1／3）	84
第60図	土錘実測図（1／2）	85
第61図	石製品実測図（1／2）	86
第62図	古銭拓影図（1／1）	87
第63図	煙管実測図（1／2）	88
第64図	銅製品実測図（1／2）	89
第65図	鉄製品実測図（1／2）	90

表 目 次

表 1 木簡・木札文及び計測表	92
-----------------	----

図版目次

- 図版 1 全 景
SD-04
SD-04 しがらみ
- 図版 2 SD-04 壁
SD-04 壁
石 列
- 図版 3 SK-01 遺物出土状況
SK-02 遺物出土状況
SK-02 完掘
- 図版 4 第8層出土伊万里碗
第8層出土伊万里皿
第8層出土伊万里小杯・紅皿・仏飯器・瓶
- 図版 5 第5層出土伊万里
SD-04 出土伊万里碗
SD-04 出土伊万里蓋・鉢・段重・皿
- 図版 6 SD-04 出土伊万里小杯・そば猪口・仏飯器・瓶
第4層出土伊万里碗・鉢
第4層出土伊万里皿
- 図版 7 第4層出土伊万里小杯・仏飯器・そば猪口・水滴・蓋
第8層出土唐津皿
第8層出土唐津皿
- 図版 8 第8層出土唐津碗
第8層出土唐津・織部・志野・備前
第5層出土陶器
- 図版 9 SD-04 出土唐津皿・陶器蓋
SD-04 出土陶器碗・油徳利・仏花瓶・徳利・壺
SD-04 出土陶器甕・壺
- 図版10 第4層出土陶器碗
第4層出土陶器皿・鉢
第4層出土陶器甕・壺・土瓶・火入
- 図版11 插 鉢（備前）
插 鉢（唐津系）
插 鉢

- 図版12 かわらけ・灯明皿（表）
かわらけ・灯明皿（裏）
焙 烙
- 図版13 羽釜・火入・火鉢・焼塩壺
軒丸瓦
- 軒平瓦（A類）
軒平瓦（B-1類）
軒平瓦（B-2類）
軒平瓦（C類）
- 図版15 軒棟瓦
軒棟瓦
軒棟瓦
- 図版16 烏衾（表）
烏衾（裏）
硯・砥石・石錘・碁石
- 図版17 古錢
煙管（雁首）
煙管（吸口）
- 図版18 木筒
- 図版19 木筒
- 図版20 木筒・木札

1 調査の契機

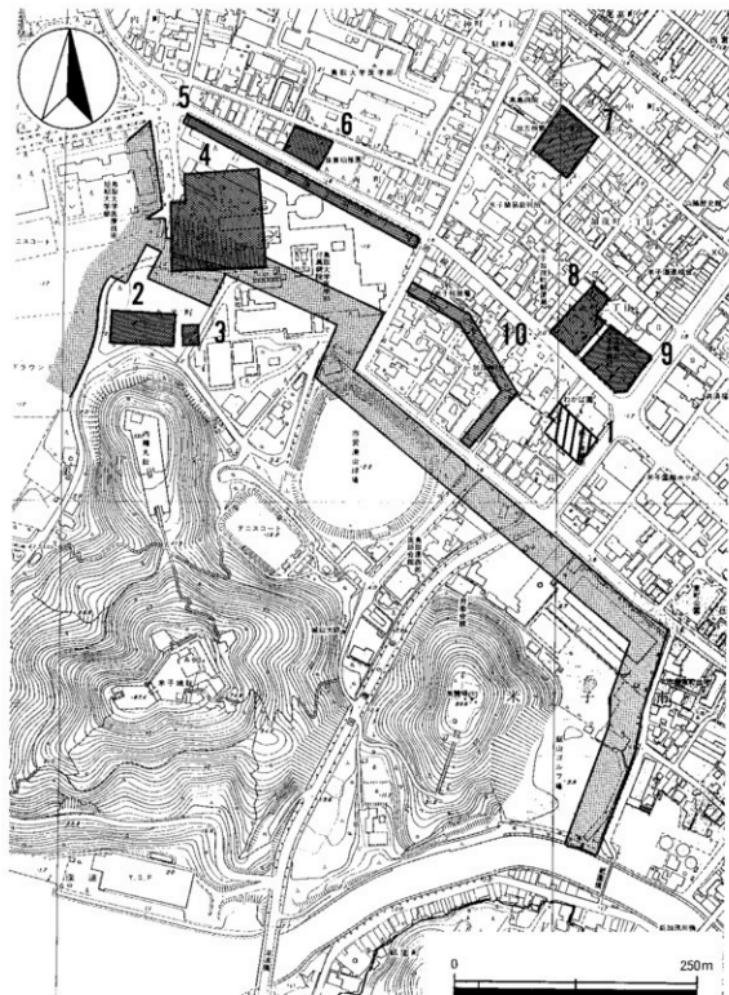
米子城跡 8 遺跡は米子市が実施する米子駅境線加茂町沿道土地区画整理事業米子商工会議所建替工事に伴う建替用地の埋蔵文化財の発掘調査である。調査地は米子市加茂町 2 丁目16-1番地に所在し、当地は米子城跡外郭内に位置し、絵図等によって武家屋敷の存在が考えられ、さらに近接する場所（米子城跡 1～7 遺跡、久米第 1 遺跡）での発掘調査において江戸時代及びそれ以前の遺構、遺物を確認しており、事前の本調査が必要であることから、事業を実施する米子市公園街路課と米子市教育委員会との協議の結果、本調査の実施を決定した。発掘調査は米子市公園街路課から委託を受け財団法人米子市教育文化事業団が実施した。調査は平成 7 年 1 月 5 日から 4 月 30 日までの期間で行った。調査面積は 560m²である。

2 位置と環境

米子城跡は JR 米子駅の北西にひろがる北東一南北 1.0km、北西一南北 1.2km の城跡及び城下町で標高 90m の湊山（城山）を中心にその山麓の北側と東側に内堀をめぐらせ、その外側には北郊を流れる加茂川の一部を利用した外堀をめぐらせている。

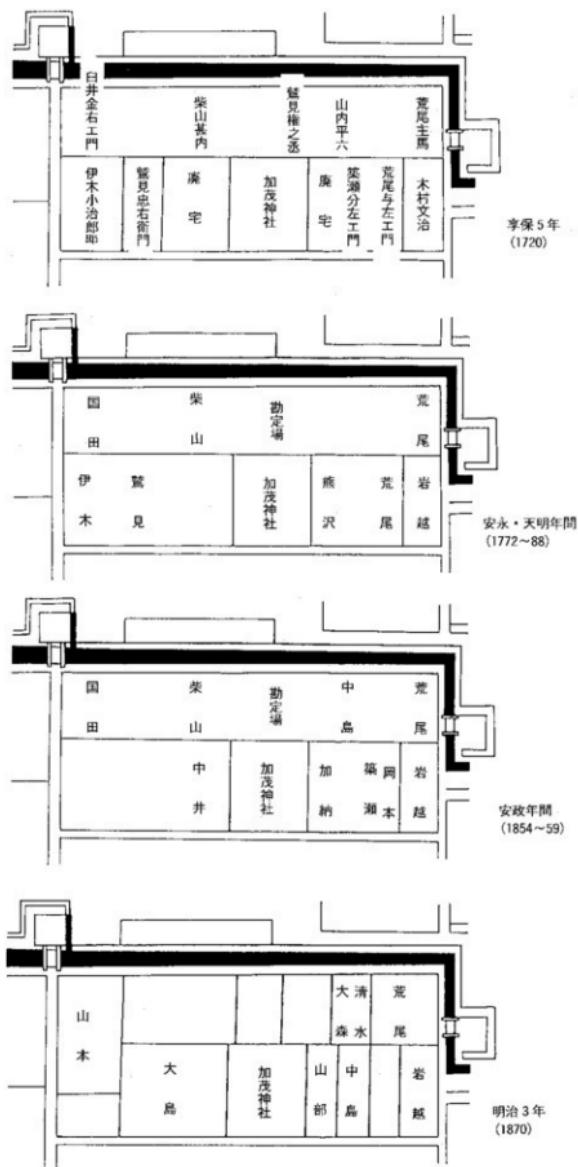
調査地周辺はかつては内堀に面した側は堀端町と呼ばれ、その北西側は宮ノ町と呼ばれていた。堀端町は東西 350 間に及ぶ武家地で、城の正門にも近く追手の最も重要な地域とされ容易に他藩領人の出入りが許されなかった。また、当町に屋敷を持つ武家の多くは米子組士で、鳥取藩西部の要職に任じられた。「米子御城下夫々間数」では東側が堀端片原侍町、西側が堀端町となっている。宮ノ町はほぼ東西に通る道筋に沿う 125 間の武家地で、地名は地内に加茂神社、八幡宮が鎮座することに由来する。「伯耆国米子平図」（宝永 6 年 1709 年）と「湊山金城米子新府」（享保 5 年 1720 年）では三社町、「伯州米子之図」では宮城町、「米子御城下夫々間数」では御社町と記されている。

今回の調査地は城の正門から北東にのびるいわば城下町のメインストリートに面した位置にあり、宝永 6 年（1709 年）、享保 5 年（1720 年）の絵図では武家屋敷が確認でき、調査地の南西側は臼井金右エ門、北東側は伊木小治郎の屋敷となっている。しかし、安永・天明年間（1772～88 年）の絵図では臼井金右エ門の屋敷は国田の屋敷となり、「米子城市図」（安政年間 1854～59 年）では伊木小治郎の屋敷は空家となっている。また、「米子城下之図」（明治 3 年 1870 年）では国田の屋敷と旧伊木小治郎の屋敷の約半分が山本の屋敷となり、旧伊木小治郎の屋敷の残り約半分は空家となっている。



- | | |
|-------------|--------------|
| 1 米子城跡 8 遺跡 | 6 米子城跡 2 遺跡 |
| 2 久米第1遺跡 | 7 米子城跡 4 遺跡 |
| 3 米子城跡 5 遺跡 | 8 米子城跡 9 遺跡 |
| 4 米子城跡 1 遺跡 | 9 米子城跡 3 遺跡 |
| 5 米子城跡 6 遺跡 | 10 米子城跡 7 遺跡 |

第1図 調査地及び周辺遺跡分布図（1／5,000）



第2図 屋敷の変遷模式図

3 調査の概要

今回の調査では水路1、溝3条、土坑8基、ピット4基、石列1基を検出した。

基本層序は上層より近現代整地土（第1層）、近代整地土（第2層）、近代水田耕作土（第3層）、18世紀中頃～幕末の整地土（第4層）、17世紀中頃～18世紀前半の整地土（第5層）となっており、第5、6層以下は自然堆積層で、調査区の南西側は第8層堆積後に形成された流路あるいは湿地の堆積土（第7層）、北東側は調査区全域に形成された湿地の上層の堆積土（第8層）、調査区全域に形成された湿地の下層の堆積土（第9層）となっている。

第2層は黄褐色粘質土でバラスを含み、昭和10年に改訂された「鳥取県米子市字限地図」では調査地は宅地となっており、この宅地に伴う整地土であると思われる。第3層は暗灰褐色粘質土からなる水田耕作土で、明治24年の旧図では調査地は水田となっており、この水田に伴うものであると思われる。第4層は暗灰色砂質土からなる18世紀中頃～幕末の整地土で、屋敷境界として意識されたSD-04の埋没後、その上に整地を行っていることと時期的なものから山本の屋敷整備に伴う整地であると思われる。第5層は17世紀中頃～18世紀前半の整地土で、伊木小治郎の屋敷整備に伴う整地であると思われる。第6層は伊木小治郎の屋敷地を拡張するために行なった整地層であると考えられる。第7層は流路（？）の堆積層で、主に砂、砂質土からなる。第7層堆積後には第7層の南西側にSD-04が形成される。第8層は武家屋敷形成前の湿地堆積層で、北東から南西へ傾斜して堆積しており、砂と腐植土の間層が見られる。これらの間層によって細分できる。第8層からは17世紀の陶磁器、木製品が多量に出土した。第9層も武家屋敷形成前の湿地堆積層である。9層以下では河川堆積による粗砂とシルトの互層で、遺物の量は少ないが近世の遺物が出土した。

今回の調査では第4、5、6層が江戸時代の遺構面となっており、第5、6層上面で検出した遺構は調査区の南東側に集中し、第4層上面で検出した遺構は調査区の北西側に集中する。

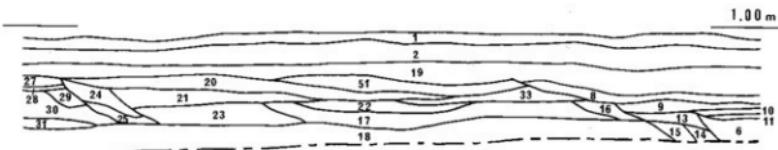
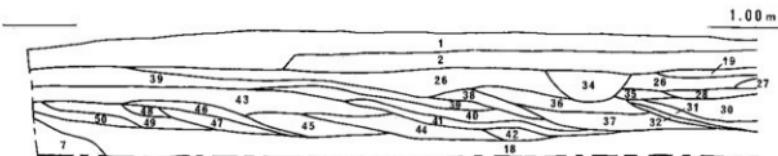
4 検出遺構

今回の調査では第4層上面と第5、6層上面で遺構を検出した。第4層上面では土坑2基、石列1基、第5、6層上面では水路、溝3条、土坑6基、ピット4基を検出した。

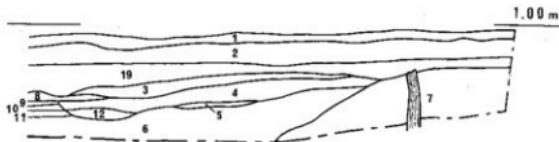
SD-04

SD-04は断面観察によって3時期に分けられる。ここでは古い順にSD-04-I、SD-04-II、SD-04-IIIと呼称したい。SD-04-Iは幅4.2m、深さ0.6mをはかり、土層図のSD-04A、B層に相当する。SD-04-Iの北東岸には0.4～1.5m間隔で木、竹の杭を打ち、これに横竹をわたしたしがらみがある。SD-04-Iからは17世紀後半～18世紀初頭の陶磁器が出土している。SD-04-IIはSD-04-Iの埋没後掘削されたもので、幅2.8m、深さ0.4mをはかり、土層図のSD-04C層に相当する。SD-04-IIIはSD-04-IIの埋没後、幅を

A



A'



- 1 黄褐色粘質土(第2層、パラスを含む)
 2 緑灰褐色粘質土(第3層、近代水田耕作土)
 3 増褐灰色砂(SD-04D、上層面に木を含む)
 4 増灰褐色粘質土(SD-04C)
 5 灰色砂(SD-04C)
 6 淡茶灰色粘土(SD-04A)
 7 褐灰色粗砂(第10層)
 8 增茶灰色粘土土(SD-04D、木を含む)
 9 淡茶灰色粗砂(SD-04B、上層面に腐植土)
 10 增灰色粗砂(SD-04B)
 11 茶褐色粘質シルト(SD-04B、腐植土)
 12 淡灰茶色粘質土、淡茶灰色細砂混合層(SD-04C)
 13 灰色微細粒砂(SD-04A、有機物を含む)
 14 淡茶色粘土(SD-04A)
 15 茶灰色粗砂(SD-04A)
 16 淡茶灰褐色砂質土(第7-4層)
 17 明褐灰色砂(第7-5層)
 18 淡茶色粘土(第9層)
 19 增灰色砂質土(第4層、18世紀中頃~幕末の整地土)
 20 淡茶色粘土、淡茶色砂、灰色シルト混合層(第6-2層)
 21 灰色微細粒砂(第7-2層)
 22 淡茶灰色粗砂(第7-3層、有機物を含む)
 23 茶色粘質土、灰色細砂混合層(第7-6層)
 24 灰色粘質土(第7-2層、黄褐色粘土ブロックを含む)
 25 淡灰茶褐色粘質土(第8A層、腐植土)
 26 雜灰色微細粒砂(第5-1層、17世紀中頃~18世紀前半の整地土)
 27 灰色粘質土(第5-2層、炭化物、ブロック状の砂を含む、17世紀中頃~18世紀前半の整地土)
- 28 灰褐色粘質シルト(第5-3層、17世紀中頃~18世紀前半の整地土)
 29 淡褐色粘質土(第8B-1層、直徑1cmの根が混じる)
 30 淡灰褐色粘質土(第8B-2層)
 31 茶褐色粘質土(第8B-3層、腐植土)
 32 緑黒褐色粘質土(第8B-4層、腐植土)
 33 増灰色砂(第7-1層)
 34 淡灰褐色砂質土
 35 灰色細砂(第5-4層)
 36 灰褐色粘質土(第8C-1層、有機物、粘土ブロックを含む)
 37 増褐色粘質シルト(第8C-2層、有機物がラミナ状に堆積)
 38 灰色細砂(第8D-1層)
 39 増灰色砂(第8D-2層、粘土が混じる)
 40 淡灰褐色シルト、茶褐色シルト混合層(第8E-1層、有機物を含む)
 41 増茶褐色粘質土(第8E-2層、腐植土)
 42 反褐色粘質土(第8F-2層、砂が若干混じる)
 43 茶灰色粘質土、增灰褐色砂混合層(第8F-1層、有機物を含む)
 44 淡茶色粘土(第8F-3層、有機物を含む、砂が若干混じる)
 45 増褐色粘質土(第8F-4層、下層面に腐植物が沈澱)
 46 淡茶色粘質土(第8F-5層、腐植土、有機物を含む)
 47 淡茶色粘質土、灰色砂混合層(第8G-1層、腐植土)
 48 増褐色粘質シルト(第8G-2層、木を含む)
 49 増茶色粘質土、增茶灰褐色砂混合層(第8G-3層、腐植土)
 50 淡茶褐色粘質土(第8G-4層、腐植土)
 51 反茶色粘質土(第8-1層)

0 2 m

第3図 土層図 (1/40)

拡張して掘削されたもので、幅4.8m、深さ0.3mをはかり、土層図のSD-04D層に相当する。SD-04-IIIの北東岸には20~50cm間隔で杭が打たれており、SD-04-I同様にしがらみが設けられていたものと思われる。また、堰も築かれている。SD-04-IIIからは18世紀~幕末の陶磁器が出土している。

SD-04の南西岸にも1.5m間隔で杭が打たれており、しがらみが設けられていたものと思われるが、土層断面図ではSD-04-I~SD-04-IIIの南西岸の肩が一致していることからいずれに伴うものかは不明である。しかし、SD-04-II、SD-04-IIIの北東岸の杭よりも太く、間隔も異なることからいずれに伴うものかは不明であるが、どちらかの岸のしがらみが後に改修されたものと思われる。

このSD-04は宝永6年と享保7年の絵図の臼井金右エ門と伊木小治郎の屋敷の境界に位置し、出土遺物から絵図がつくられる以前にはすでにSD-04-Iが存在していたものと思われるが、絵図にはこのSD-04-Iに相当する水路は描かれていない。

堰（第5図）

堰はSD-04内の調査区中央部につくられている。この堰はSD-04-IIIに伴うもので、堰の中央は杭を4本打ち、これに長さ0.9~1.5mの横木をわたしている。堰の東北側は杭が3本打たれているが横木ではなく、20~30cm大の石が並べられている。堰の南側は杭も石列も認められない。堰の前面には10~15cm大の石が置かれ、瓦も混じっている。横木のわたし方と堰の前面にヘドロ、流木等が堆積していることからSD-04は南東から北西へ流れていったものと思われる。この堰の性格はSD-04の水量調節または屋敷に水を引き入れるためのものであったと思われる。堰の上流の北東岸には国田の屋敷に水を引き入れるような幅0.7m、深さ0.2mの溝がある。

石列（第6図）

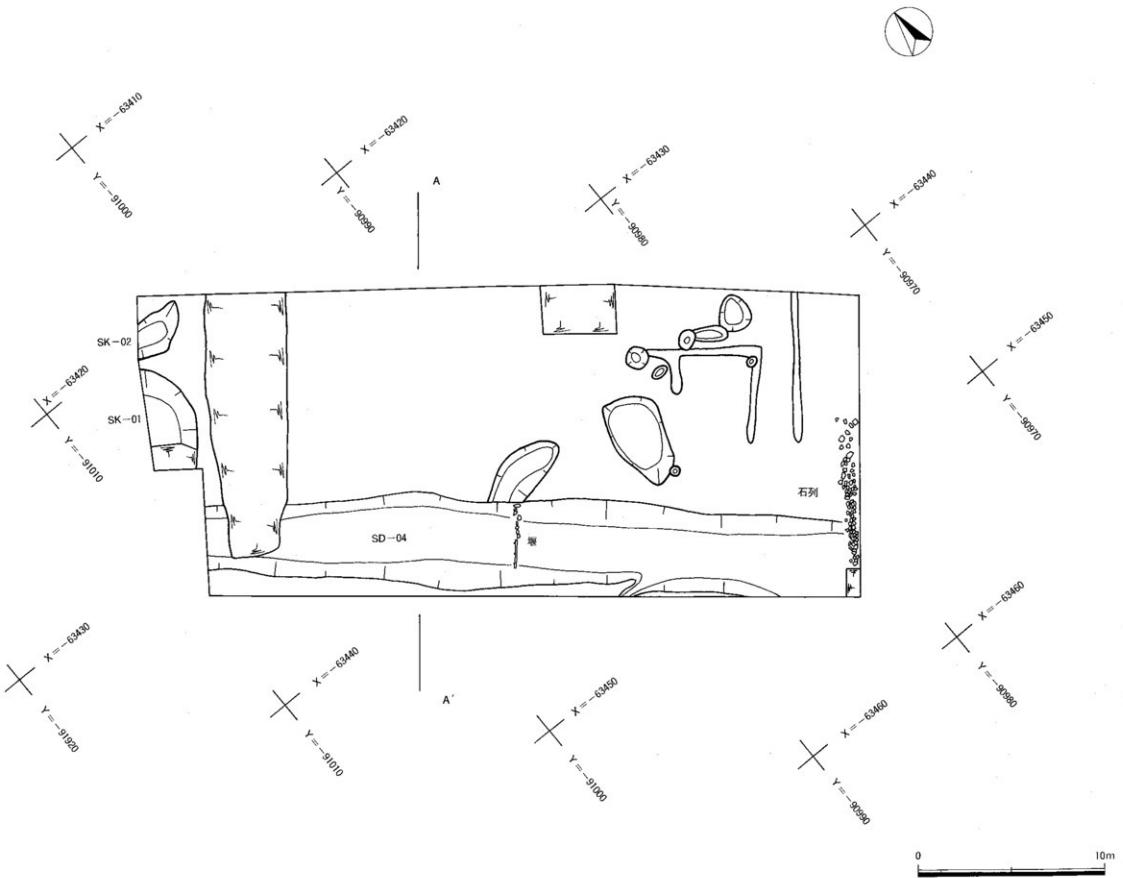
石列は調査区の南東隅で長さ8m、幅0.5~1.0mにわたって検出した。この位置は屋敷と屋敷の南東側の道路の境界に位置するものと思われ、この石列は屋敷の堀の土台の根固めの石であると思われる。石列はSD-04を埋立て、整地した上につくられていることから山本の屋敷に伴うもので、幕末~明治のものであると思われる。

SK-01（第7図）

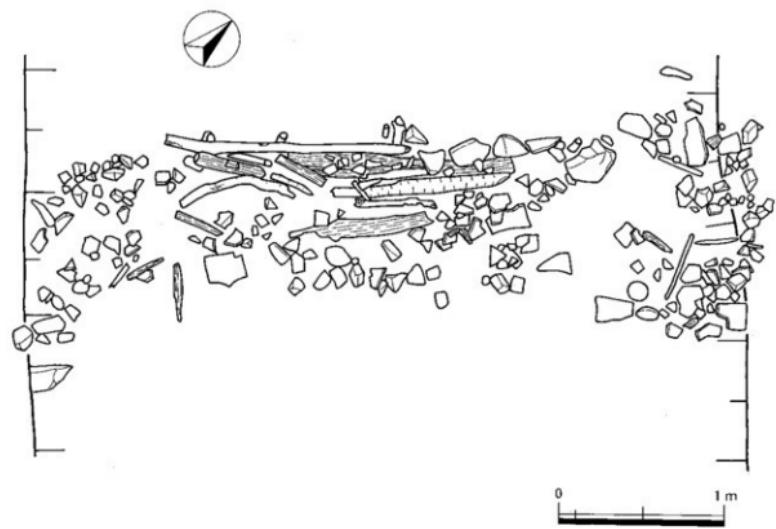
SK-01は大部分が調査区外にかかるために現状で長軸5.2m、短軸2.7m、深さ0.4mをはかる。SK-01からは陶磁器、瓦が多量に出土しており、廃棄坑としての性格が考えられる。時期は幕末である。

SK-02（第8図）

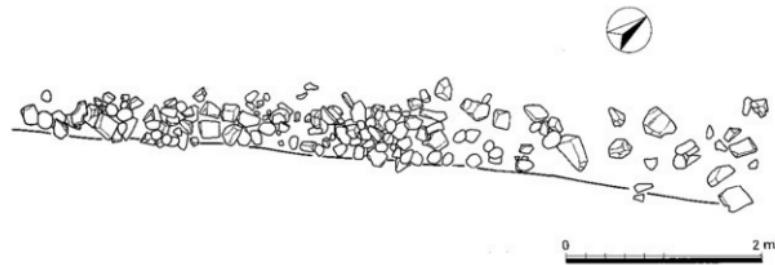
SK-02は一部が調査区外にかかるために現状で長軸3.7m、短軸2.0m、深さ0.2mをはかり、平面形態は不整形である。SK-02からは陶磁器、瓦が多量に出土しており、SK-01と同様、廃棄坑としての性格が考えられる。時期は幕末である。



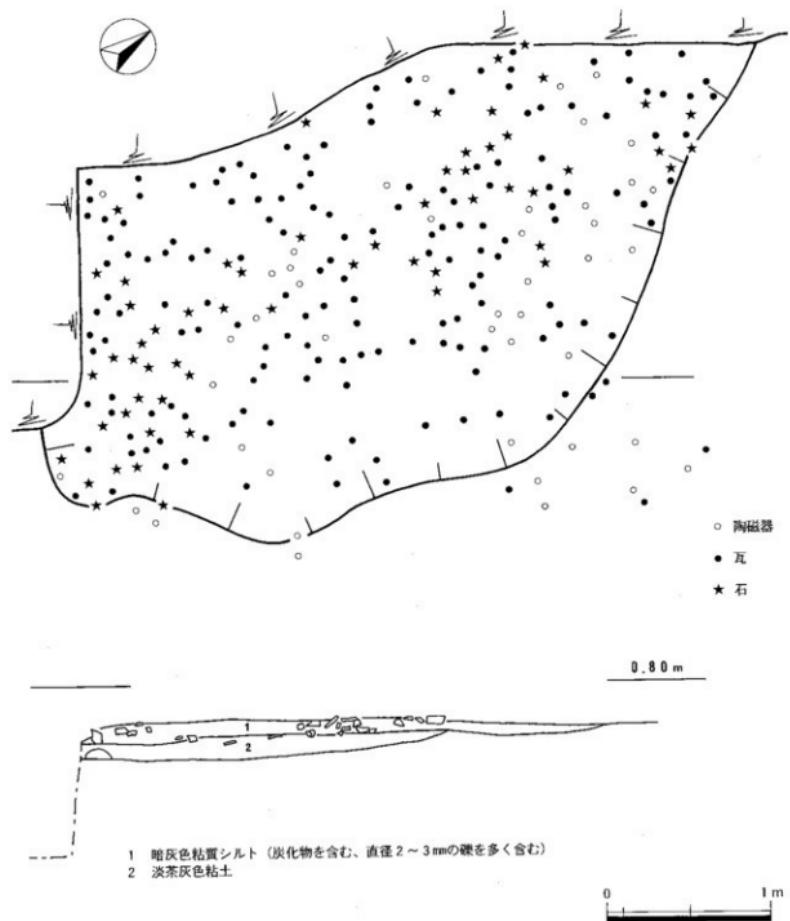
第4図 遺構配置図 (1/200)



第5図 SD-04 墓実測図 (1/30)



第6図 石列実測図 (1/50)



第7図 SK-01実測図 (1/30)



第8図 SK-02 実測図 (1/20)

5 出土遺物

1 磁器 (第9~18図)

陶磁器は多量に出土しており、層位、遺構毎に比較的まとまって出土している。ここでは出土量が多く一括遺物として扱うことができる第8層、第5層、SD-04、第4層出土の陶磁器を取上げたい。層位及び新旧関係は古い順に第8層→第5層→SD-04→第4層である。第8層は17世紀初頭～17世紀後半、第5層は17世紀中頃～18世紀前半、SD-04は17世紀後半～幕末、第4層は18世紀中頃～幕末の遺物が出土している。

A 第8層出土磁器 (第9~11図)

第8層は湿地堆積層で、17世紀初頭～17世紀後半を中心とする磁器が出土している。

碗 (1~23)

1は口縁がくびれ、外反する。外面はヘラ彫りの堅筋文によって区画され、区画内には縦に3つの「福」字がある。2は口縁がくびれ、外反する。くすんだ釉がかかり、高台脇に段がある。3は口縁がくびれ、外反する。外面に花を描く。4は外面に菊を描く。5は口縁端部が外反し、外面に菊唐草を描く。6は外面に菊唐草を描き、高台には砂が付着する。7は筒型碗で、外面に菊唐草を描く。8は青白い釉がかかり、内外面に貫入がある。外面に蝶を描く。高台には砂が付着する。9は外面に樹木等の風景を描く。10は内面に焼成時の灰がかかり、外面に唐草を描く。11は外面に木、草、笹を描く。高台には砂が付着する。12は内面に焼成時の灰がかかり、高台には砂が付着する。13は外面に区画を設け、区画内に風景（？）を描く。14は青白い釉がかかり、外面に区画を設け、区画間には渦巻きを描き、区画内には笹を描く。15は外面に区画を設け、区画内に梅樹を描く。高台内には「太明」の銘がある。16は外面に一重網目文を描く。17は外面に遠山、樹木、建物等の風景を描く。18は高台内無釉で、高台内側を面取りする。19は外面下部と高台内外面に鉄釉を施す。20は外面に遠山等の風景を描く。高台には砂が付着する。21は外面に風景を描く。22は外面に風景を描く。高台内無釉である。23は外面に遠山、樹木、雲等の風景を描く。漆継を行っている。

皿 (24~35)

24は白磁で、内面には焼成時の灰がかかる。高台と高台内に砂が付着する。時期は17世紀中頃である。25は型押し成形で、内外面に堅筋文がある。高台は三日月状を呈する。26は中国製で、高台には砂が付着する。見込みに鬼（異人）を描く。時期は17世紀初頭である。27は中国製で、口縁は外反し、高台には砂が付着する。高台内に渦福文を描く。28は口縁が輪花状を呈し、口紅装飾を施す。内面には焼成時の灰がかかる。29は型押し成形で、内面に唐草の陽刻がある。内面には焼成時の灰がかかる。30は内面に焼成時の灰がかかり、高台には砂が付着する。31は内面に焼成時の灰がかかり、高台は三日月状を呈する。見込みに荒磯文風の文様を描く。32は青白い釉がかかり、内面には焼成時の灰がかかる。高台には砂が付着する。33は古染付の写しで、青白い釉がかかる。内面には焼成時の灰がかかり、高台には砂が付着する。見込みに

風景を描く。34は大皿で、青白い釉がかかり、内外面に貫入がある。見込みに樹木、建物、岩等の風景を描く。35は大皿で、口縁は外反し、高台は三日月状を呈する。見込みと内面に松竹梅を描く。

紅皿 (36)

36は見込み中央が盛り上がり、見込みに3つの点を描く。

そば猪口 (37)

37は白磁のそば猪口である。

小坏 (38~42)

38は口縁が内湾し、外面に草を描く。39~42は口縁が外反する。39はシボリ整形を行い、高台は蛇ノ目高台で、高台内無釉である。40は白磁である。41は輪花状を呈する口縁と内面の文様によって捻り花を表現している。42は外面に唐草を描き、高台には砂が付着する。

仏飯器 (43)

43は脚部下半部と底部が無釉である。

瓶 (44)

44は外面に貫入があり、高台には砂が付着する。外面に風景を描く。

B 第5層出土磁器 (第12図)

第5層は整地層で、17世紀中頃～18世紀前半を中心とする磁器が出土している。

碗 (45、46)

45は外面に菊花を描く。高台には砂が付着する。46は外青磁で内面に四方禪文、見込みに五弁花文を描く。

皿 (47~51)

47は高台置付の幅が広く三日月状を呈し、高台には砂が付着する。時期は17世紀中頃である。48は高台径が大きく、内面に唐草、見込みに「寿」字を描く。中国製か（？）49は青白い釉がかかり、高台には砂が付着する。時期は17世紀中頃である。50は47と同じモチーフで、くすんだ釉がかかる。内面には焼成時の灰がかかり、高台には砂が付着する。時期は17世紀後半である。51は器壁が厚く、内面に草を描く。見込み蛇ノ目釉剥ぎである。時期は18世紀前半である。

鉢 (52)

52は口縁をつまみ出し、口紅装飾を施す。外面に唐草、内面に花を描く。

小坏 (53~58)

53は外面に遠山、樹木等の風景を描く。54は器壁が薄く、青白い釉がかかる。外面と見込みに草を描く。胴部はシボリ整形を行い、高台は蛇ノ目高台で、高台内は無釉である。時期は17世紀である。55は口縁がやや内湾し、外面に四方禪文を描く。56は口縁が外反し、内外面に貫入がある。57、58は口縁が外反し、白磁である。

C SD-04 出土磁器 (第13~15図)

SD-04からは17世紀後半~幕末を中心とする磁器が出土している。

碗 (59~71)

59は器壁が薄く、外面は4つの区画に分けられ、区画内に各々異なる花を描く。内面に椿を描き、高台内には「大明成化年製」の銘がある。漆緋が行われている。時期は17世紀である。60は中国の写しで、内外面に貫入がある。外面に草花と動物（？）を描き、高台内には「大明年製」の銘がある。時期は17世紀後半である。61は青白い釉がかかり、内面には焼成時の灰がかかる。高台には砂が付着する。外面は網目文で区画をし、区画内に草を描く。時期は17世紀である。62は小ぶりの碗で、外面に松を描く。63は器壁が薄く、外面は三方に丸文を配し、丸文内に松、丸文間に七宝、胸部と高台の境に鋸歯文を描く。64はくすんだ釉がかかり、三方の丸文内にコニャク判による桐を表現する。65~67は外面に松竹梅を描き、67は口紅装飾を施す。いずれも18世紀である。68は外面に松、建物、雲等の風景を描く。69はくすんだ釉がかかり、外面に四方擗文を描く。70は意東焼で、外面に人物、草木、遠山、雲等の風景、見込みに鷺を描く。71は広東碗で、外面に矢羽根、見込みにくずした「壽」字を描く。

皿 (72、73)

72は内外面に貫入があり、内面には区画が設けられ、区画間は矢羽根状の文様、区画内は唐草、見込みに五弁花文を描く、高台内には「大明成化年製」の銘がある。73は景徳鎮系で、青白い釉がかかり釉裏紅である。見込みに笛と木を描く。時期は16世紀末~17世紀初頭である。

鉢 (74~76)

74は赤、黄、緑の色絵で、口紅装飾を施す。時期は18世紀である。75は外面に花を描き、内面は区画内に宝（？）を描く。漆緋が行われている。76は外面に如意頭文（？）を表現した連續唐草、見込みに唐草を描く。

段重 (77、78)

78は外面に鶴と鳥を描く。

そば猪口 (79~81)

79は底部が外へ開き、口縁は外反する。80は口縁が外傾し、外面に松竹梅を描く。内外面には貫入がある。81は口縁が外傾する。

小杯 (82~84)

82は口縁が外反する。83、84は口縁が内湾し、83は外面に笛を描く。

蓋 (85~90)

85は口縁にかえりがあり、頂部には棒状のつまみがつくものと思われる。外面に円圈文を描く。86~90は口縁にかえりがなく、頂部には環状のつまみがある。87は外面に亀甲文、内面に四方擗文、見込みに花を描く。88は外面と見込みに退化した蛸唐草文、つまみ付近に櫛歯文を描く。89は外面に花唐草、内面に四方擗文、見込みに花を描く。90は外面に4つの区画を設け、区画内に丸文と井桁文、つまみ付近に雲氣文、内面に四方擗文、見込みに丸文を描く。

紅皿 (91)

91は器壁が厚く、あまり深さがない。

仏飯器 (92、93)

92は外面に菊花散らし文を描く。時期は18世紀後半～19世紀初頭である。93は脚部の一部と底部が無釉である。

瓶 (94～96)

94は細頸の瓶である。95は口縁が外反し、外面に菊花を描く。時期は17世紀である。96は胴部が球形で外面に葉を描く。

D 第4層出土磁器 (第16～18図)

第4層は整地層で、18世紀中頃～幕末を中心とする磁器が出土している。

碗 (97～106)

97は口縁がくびれて外反し、ヘラ彫りによる豊筋文で区画をし、区画内に「福壽」字を描く。98は外面に一重網目文を描き、外面には貫入がある。99はやや浅目の碗で、外面に二重網目文、内面に一重網目文を描く。100は外面に草を描く。101は高台径が小さく、低い。外面に花、見込みに退化した五弁花文を描く。時期は19世紀である。102は外面に線描によって区画を設け、文様を描く。103は外面に草、内面に四方襷文を描く。内外面には貫入がある。焼継が行われている。時期は19世紀である。104は外青磁で、内面には焼成時の灰がかかる。内面は四方襷文を描き、見込みはコンニャク判による五弁花文がある。時期は18世紀後半である。105は広東碗で、外面に花、見込みに昆虫（？）を描く。内外面に小さい貫入がある。106は広東碗で、外面に花唐草を描く。

鉢 (107～109)

107は口縁が輪花状を呈し、内外面に唐草を描く。108は口縁が輪花状を呈し、外面に唐草、内面に梅、樹木、建物等の風景、見込みに龍（？）を描く。109は内面に唐草を描く。

皿 (110～119)

110は変形皿で、内面に蛸唐草の影響を受けたような唐草を列点で表す。内面には貫入がある。111、112は見込み蛇ノ目釉剥ぎで、釉剥ぎ部分には砂が残る。113は見込みにコンニャク判による五弁花文があり、高台内に渦福文を描く。114は口縁が輪花状を呈し、外面に連続唐草を描き、内面は線描による区画を設け、区画内に松、花を描く。見込みにはコンニャク判による五弁花文がある。115は見込み蛇ノ目釉剥ぎで、釉剥ぎ部分には砂が残る。外面に草、内面に扇、花を描く。116は高台径が大きく、高台内にはハリ支えがある。外面に宝、内面に松、梅を描く。時期は19世紀前半である。117は16世紀の染付の写しで、口縁が輪花状を呈し、外面に雲、見込みに橋、岩、草等の風景を描く。118は高台が蛇ノ目凹形高台で、外面に連続唐草、内面に梵字文様、見込みに草、木、雲等の風景を描く。119は口縁端部が幅広で面をなし、高台は蛇ノ目凹形高台で、外面に連続唐草を描く。

小坏 (120～128)

120～124は口縁が内湾し、125～128は口縁が外反する。120、121は白磁で、120は高台径が小さい。121は内外面に貫入がある。122、123は内面に焼成時の灰がかかり、外面に筆を描く。124は外面に線描による区画を設け、区画内に台形を重ねた文様を描く。見込みには昆虫文を描く。126、127は白磁で、127は内面に焼成時の灰がかかる。128は内面に焼成時の灰がかかり、外面に草を描く。高台内は釉がかいらぎ状になっている。

仏龕器 (129)

129は外面に龍を描く。

そば猪口 (130)

130は外面に梵字文様を描く。

蓋 (131～137)

131～135は口縁にはかえりがつかず、頂部には環状のつまみがつく。131は青白い釉がかかり、つまみ内には「宣化年製」の銘がある。132、133は外青磁で、内面に四方擗文、見込みに五弁花纹、つまみ内に満福文を描く。134は外面に蛸唐草の影響を受けたような文様、つまみ付近に櫛歯文、内面に四方擗文、見込みに源氏香文を描く。135は意東焼で、外面に遠山、樹木、建物等の風景、内面に四方擗文、見込みに松を描く。内外面に貫入がある。136、137は口縁にかえりがつき、頂部には棒状のつまみがつく。136は外面に6つの丸文を描き、つまみは中心から少しずれた位置にある。137は外面に菊花散らし文を描く。

水滴 (138)

138は型押し成形によってつくられ、内面はナデ調整を行っているが、底部内面は未調整で布目痕が残る。水滴上部には獅子を型どる。

2 陶 器 (第19～30図)

A 第8層出土陶器 (第19～22図)

唐津 (第19～21図)

皿 (139～148、157～159)

139は口縁が内湾し、見込みには目積はない。140は口縁が内湾し、見込みには胎土目がある。暗緑色の灰釉がかかる。141は口縁が内湾し、見込みに4つの胎土目がある。暗緑色の灰釉がかかる。142は口縁が外反した後、端部がやや内湾する。内面には段があり、見込みに4つの砂目がある。143は口縁が外反した後、端部がやや内湾する。内面には段があり、見込みに4つの砂目がある。灰釉がかかる。144は絵唐津で、口縁端部が外反する。内面には段がつき、見込みに3つの砂目がある。高台は三日月状を呈する。145は口縁端部が外反し、見込みに3つの砂目がある。高台は三日月状を呈する。146は満縁皿で、灯明皿として使用された。見込みに3つの砂目があり、高台は三日月状を呈する。灰釉がかかる。147は口縁に溝が巡るあまり深くない。見込みに3つの砂目がある。148は満縁皿で、見込み中央に1つの砂目があり、見込み中央部には円形の無釉の部分がある。高台は三日月状を呈し、灰釉がかかる。157～159

は大皿で、157は口縁が外反し、内面は二彩手で、見込みには砂目がある。158は絵唐津で、総釉薬がかかる。口縁は逆L字状を呈する。159は絵唐津で、外面は透明釉がかかる。口縁は逆L字状を呈する。

碗 (149~156)

149は灰釉の総釉薬がかかる。高台には砂が付着する。150は総釉薬がかかる。内面には焼成時の灰がかかる。高台には砂が付着する。151は口縁端部がやや外反し、灰釉がかかる。152は高台が三日月状を呈する。153は山瀬窯のもので、薬灰釉がかかる。高台は三日月状を呈する。154は平底で、底部には回転糸切り痕がある。155は高台が三日月状を呈する。156は褐色の釉がかかる。

鉢 (160、163)

160は口縁が内湾し、外面に褐色の釉がかかる。内面に灰釉がかかる。163は刷毛目唐津で、口縁はT字状を呈する。

壺 (161)

161は平底の小型の壺で、薬灰釉がかかる。

壺 (162)

162は口縁がT字状を呈する。時期は17世紀中頃である。

備前 (第21図 164~166)

164は四耳壺で、口縁は直立気味に立上り、口縁端部が外反する。165は茶道具である。166は伊部手の茶入れで、口縁端部が内側に折れ曲がる。底部には回転糸切り痕がある。

織部、志野、萩系 (第21図 167~169)

167は織部の茶道具、168は志野の鉢、169は萩系の碗である。

産地不明の陶器 (第22図 170~174)

170、171は乳褐色の総釉薬がかかる。内外面には貰入がある。172は口縁端部が外反し、灰釉がかかる。173は小型の碗で、白濁した釉がかかる。かいらぎ状になっている。見込みには鉄絵がある。174は土瓶で、外面に褐色の釉がかかる。

B 第5層出土陶器 (第23図)

碗 (175、176)

175は褐色の釉がかかる。176は乳褐色の釉がかかる。

皿 (177、178)

177は透明釉がかかる。見込み蛇ノ目釉剥ぎである。178は鉄釉がかかる。高台内無釉である。口縁端部は外反し面をなす。内面と見込みはヘラ状工具で回転を利用して文様を描く。

鉢 (179)

179は焼締陶器で、底部に横方向のナデを施している。

壺 (180、181)

180は素焼きの無頸壺で、口縁端部は平坦で面をなす。181は信楽の茶壺で、口縁はやや外傾

し、口縁端部は肥厚する。

C S D - 0 4 出土陶器 (第24~26図)

碗 (182~188)

182はキハラ唐津で、高台には砂が付着する。内外面には貫入がある。183は唐津で、褐色の釉がかかる。184は九州系で、乳褐色の釉がかかる。185~188は産地が不明である。185は高台を面取している。186、187は高台疊付部が内傾する。188は高台疊付部が幅広で面をなす。白濁した釉がかかり、かいらぎ状になっている。

皿 (189~191)

189は刷毛目唐津で、見込み蛇ノ目釉剥ぎである。190は唐津で、外面は上半部のみ施釉し、内面は白化粧土の上に刷毛目を施し、さらにその上に鉄絵を施す。191は鉄絵の唐津で、見込み蛇ノ目釉剥ぎである。

鉢 (192~196)

193が在地系である他は産地は不明である。192は口縁は大きく外反し、端部を内側に折り曲げる。内面と口縁外面に鉄釉を施し、外面の口縁以下は無釉である。193は在地系のもので、口縁は内湾し、端部が肥厚する。194は口縁が内湾した後外反し、口縁端部を内外へつまみ出す。195は口縁端部が内側に折れ曲がる。内外面に貫入がある。196は口縁はゆるやかに外反し、口縁端部はT字状を呈する。外面は灰釉の上に鉄釉がかかる。時期は明治である。

盃 (197)

197は乳褐色の釉がかかり、内外面には貫入がある。高台は蛇ノ目高台である。

灯明皿 (198)

198は外傾する口縁の内側にやや内傾する立上がりがある。立上がりには注口の切り込みがある。

蓋 (199~202)

199は布志名の壺の蓋で、蓋の縁が逆L字状に屈曲する。上面には緑色の釉がかかるが、下面は無釉である。200~202は産地が不明である。200は蓋の縁が上方へ反り、擬宝珠つまみがつく。下面には回転糸切り痕がある。201は蓋の縁が水平にのび、上面に黒褐色の釉がかかる。下面には回転糸切り痕がある。202は下面にかえりをもち、上面はつまみが欠損しているが200~202のようなつまみがつくものと思われる。

油滴利 (203)

203は注口部は細く、やや外反して立上がる。口縁の下には受部があり、受部内には外面をつたった油が還流するための小孔がある。頸部には環状の把手がついていたものと思われる。外面には黒褐色の釉がかかる。

仏花瓶 (204)

204は口縁がラッパ状に開き、頸部には耳がつく。外面の頸部より上は褐色の釉がかかり、頸部以下は鉄釉がかかる。内面は口縁に褐色の釉がかかり、それ以外は鉄釉がかかる。

徳利 (205)

205は備前の徳利で、胴部の3か所をくぼませた、いわゆるヘソ徳利である。くぼみに大黒天像を貼付ける。

壺 (206, 207)

206は楽焼系で、口縁が輪花状を呈する。207は布志名の無頬壺で、外面上半には緑色の釉がかかり、内面には透明釉がかかる。

甕 (208~212)

208は口縁がコ字状を呈し、口縁端部がやや上方へ開く。内外面には黒褐色の釉がかかる。時期は幕末である。209は口縁がT字状を呈するが、口縁端部の内側が下方へ折れ曲がる。210は口縁がコ字状を呈する。外面は二彩手、内面は口縁は白化粧、口縁以下は透明釉がかかる。211は口縁が逆L字状を呈する。内面と外面の上部は褐色の釉がかかり、外面の上部以下は鉄釉がかかる。212は口縁端部が内外へ肥厚しT字状を呈する。内面には格子目叩きがある。時期は17世紀後半~18世紀である。

D 第4層出土陶器 (第27~30図)

碗 (213~237)

213は乳褐色の釉がかかり、底部は平底で、回転糸切り痕がある。214は高取で、乳白色の釉がかかる。215は九州系で、乳褐色の総釉薬がかかる。高台には砂が付着し、内外面には貫入がある。216は松浦系の黒唐津で、高台には砂が付着する。217は九州系である。218は九州系で、時期は17世紀後半~18世紀である。219~221は褐色の釉がかかる。222は薬灰釉がかかり、内面には焼成時の灰がかかる。223は上野系で、薬灰釉がかかる。内面には焼成時の灰がかかる。224は上野系で、薬灰釉がかかる。225は薬灰釉がかかり、内外面に貫入がある。226は薬灰釉がかかる。227~231は青磁釉がかかる。232は乳褐色の釉がかかる。

皿 (238~242)

238は唐津で、見込みに4つの胎土目がある。239は瀬戸か(?)総釉薬がかかる、見込み蛇ノ目釉剝ぎである。高台には3か所砂が付着する。時期は17世紀である。240は口縁が外反し、薬灰釉がかかる。241は九州系で、薬灰釉がかかる。口縁端部は外反した後大きく内湾する。見込み蛇ノ目釉剝ぎである。242は口縁端部が大きく外反した後やや内湾する。内面は白化粧の上に鉄絵を施し、外面は口縁に透明釉がかかるが、口縁以下は無釉である。

鉢 (243~249)

243は薬灰釉がかかり、見込み蛇ノ目釉剝ぎである。244は口縁が外反気味に開き、青磁釉がかかる。見込み蛇ノ目釉剝ぎである。245、246は口縁が内湾し、口縁端部を外へ折り曲げる。247は肥前系で、外面は透明釉がかかり、内面は青磁釉の上に白化粧土で刷毛目を施す。時期は17世紀後半~18世紀である。248は口縁が段をもって端部で大きく外反する。249は九州系で、口縁は逆し字状を呈する。時期は17世紀である。

壺 (250~252)

250、251は無頸壺で、250は内外面に鉄釉がかかる。252は外面に白化粧の上に青磁釉がかかる。

甕 (253~256)

253は九州系で、口縁はT字状を呈する。外面には格子目叩きがある。254は九州系で、口縁はT字状を呈する。内面には格子目叩きがある。255は口縁がく字状を呈する。256は備前で、口縁は逆L字状を呈するが、口縁端部内側をわずかにつまみ出す。

火入れ (257~259)

257~259は口縁端部を内側に折り曲げ、内面は無釉である。257は外面に灰釉がかかり、貫入がある。258は布志名である。259は外面に青磁釉がかかる。

徳利 (260)

260は鶴首の徳利で、外面に刷毛目を施す。時期は18世紀である。

土瓶 (261)

261は布志名で、時期は19世紀後半である。

3 撥 鉢 (第31~33図)

播鉢には備前、唐津系、産地不明のものがある。産地不明のものは口縁の形態によって6つに分類できる。

備前 (第31図 262~264)

口縁が幅広い帯状になって張り出し、口縁外面には262は1条、263、264は2条の条線を施す。内面には262は10本1単位、263は7本1単位、264は9本1単位の条線を施す。263、264はかなり使いこまれており、底部付近の条線は摩滅している。

唐津系 (第31図 265、266)

265は口縁端部が内側水平方向に突出し、上部に凹線がつく。口縁内外面に鉄釉がかかる。内面には9本1単位の条線を施す。266は口縁外面直下を外下方へつまみ出したもので、口縁内外面に鉄釉がかかる。内面には右上がりの10本1単位の条線を施した後に左上がりの10本1単位の条線を施す。かなり使いこまれており、底部はすりへっている。

産地不明の播鉢 (第32、33図)

A類 (267~269) 口縁端部を外側に折り曲げ、肥厚するものである。267は注口をもち、底部には穿孔がある。内面は底部付近に7本1単位の条線を放射状に施した後に底部と胴部の境から上へ10本1単位の条線を施す。また、底部内面には重ね焼きの際につけたと思われる直径6.6cmの円形の痕跡がある。268の内面は底部付近に8本1単位の条線を放射状に施した後に底部と胴部の境から上へ8本1単位の条線を施す。269の内面は底部付近に10本1単位の条線を放射状に施した後に底部と胴部の境から上へ10本1単位の条線を施す。

B類 (270、271) 口縁端部を外側に折り曲げ、外反させたものである。270の内面には8本1単位の条線を施す。外面下部と高台は無釉である。271の内面には23本1単位の条線を施す。

す。

C類 (272、273) 口縁端部を外側に折り曲げ、外反させたもので、口縁外面に弱いヨコナデを施すものである。272は素焼きで、内面には15本1単位の条線を施す。273は素焼きで、内面には13本1単位の条線を施す。

D類 (274、275) 口縁端部を外側に折り曲げ、口縁外面直下を外下方へつまみ出したものである。274は素焼きで、口縁端部外面を指おさえする。内面には10本1単位の条線を施す。275の内面には11本1単位の条線を施す。

E類 (276) 口縁端部が逆L字状を呈するものである。276は注口をもち、内面には10本1単位の条線を施す。

F類 (277) 口縁端部内面を内側につまみ出したものである。277の内面には15本1単位の条線を施す。

4 かわらけ・灯明皿 (第34図)

かわらけ・灯明皿には皿形のもの (278~289) と油溜めがつくもの (290~292) があり、皿形のものは成形、調整技法、口縁の形態によって5つに分類できる。

A類 (278~280) 手づくね成形後、底部をナデ、口縁内外面をヨコナデするもので、口縁は内湾気味に立上がる。法量によって細分が可能である。

B類 (281~283) 手づくね成形後、底部をナデ、口縁内外面をヨコナデするもので、口縁は大きく外反する。法量によって細分が可能である。

C類 (284) 手づくね成形後、底部をナデ、口縁内外面をヨコナデするもので、口縁は外反するがB類ほどは大きく開かない。法量によって細分が可能である。

D類 (285、286) 手づくね成形後、底部をナデ、口縁内外面をヨコナデするもので、外面底部と胴部との境にヘラ状圧痕がある。

E類 (287~289) 底部を回転糸切りによって切り離すもので、ロクロ成形のものが多い。口縁の形態、法量によって細分が可能であろう。

5 焙 烙 (第34~36図)

焙烙は調整技法によって5つに分類できる。

A類 (293~297) 口縁と底部の境に回転を利用した粘土の切り取り痕が残るもので、口縁は直立気味に立上がり、外面を櫛状工具で左上がりに搔き上げた後、口縁端部をヨコナデする。口縁端部が平坦で面をなすもの (293)、口縁端部が平坦に近いがやや丸味をおびたもの (294、295)、口縁端部が丸くおさまるもの (296、297) があり、細分が可能である。

B類 (298~303) 口縁と底部の境に回転を利用した粘土の切り取り痕が残るもので、外面には櫛状工具痕がない。口縁は直立気味に立上がり、口縁端部が平坦に近いがやや丸味をおびたもの (298、299、300)、口縁が内湾し、口縁端部が丸くおさまるもの (301、302、303)、口縁端部内側を肥厚させたもの (298、301、303) があり、細分が可能である。

C類 (304) 口縁と底部の境を回転を利用して粘土を切り取った後、ヘラミガキしたもので、口縁は内湾し、口縁端部は丸くおさまる。

D類 (305~307) 口縁と底部の境に回転を利用した粘土の切り取り痕がないもので、口縁は内湾し、口縁端部は丸くおさまる。305、306は口縁内側端部がやや肥厚し、306は口縁端部が外反する。

E類 (308~310) 口縁と底部の境に回転を利用した粘土の切り取り痕がないもので、口縁と底部の境に少し強めのヨコナデが入る。口縁は内湾し、口縁端部内側は肥厚気味である。

6 瓦質土器 (第37図)

311、312は羽釜で、胴部中央に鰐を巡らし、口縁付近に1対の把手を有する。313、314、315は火鉢で、313、314は外面に刻印がある。313は口縁が外へ大きく折れ曲がり、314は口縁が内湾する。315は長方形または正方形の箱形を呈し、四隅に足がつく。

7 その他の土器 (第37図)

316は焼塙壺の蓋で、型入れ成形でつくられており、裏面には布目痕がある。317は火入れで、口縁には煙管によるものと思われる敲打痕が認められる。口縁端部内側は肥厚し、端部上面には炭化物が付着する。外面は磨かれている。318は坩堝で、内面に金属の溶解痕が付着する。

8 瓦 (第38~42図)

瓦は軒丸瓦、軒平瓦、軒棧瓦、丸瓦、平瓦、棧瓦、鳥糞が出土した。平瓦は良好なものがなく、ここでは省略する。

軒丸瓦 (第38図)

軒丸瓦は瓦当文様によって3つに分類できる。

A類 (1, 2) 左巻きの三ツ巴文と珠文を組み合わせたもので、巴はその周囲を盛り上げて表現している。すなわち巴がへこんだ感じである。内区と外区の境には圓線がある。1は瓦当直径14.9cmで、珠文の数は12個である。2は瓦当直径14.9cmで、珠文の数は12個である。丸瓦部凹面には布目痕があり、布を強化するためと思われる刺糸がある。(丸瓦のC類)

B類 (4) 左巻きの三ツ巴文と珠文を組み合わせたもので、珠文の尻部は長く約2/3回転する。4は外縁は高く、瓦当直径は14.4cmをはかる。珠文は小さく、その数は推定20個である。

C類 (3, 5, 6) 左巻きの三ツ巴文と珠文を組み合わせたもので、珠文の尻部はB類よりも短く約半回転する。珠文はすべて大きい。3は瓦当直径15.2cmで、珠文の数は15個である。5は瓦当直径16.0cmで、珠文の数は推定18個である。丸瓦部凹面には布目痕が見られ、一部ナデ調整が行われている。6は瓦当直径16.2cmで、珠文の数は推定20個である。

軒平瓦 (第39図)

軒平瓦は瓦当文様によって4つに分類できる。

A類（7、8） 中心飾りは三葉の桐で、その外側には2反転の唐草を配する。8は瓦当部上端を面取りしている。

B-1類（9、10） 中心飾りは三葉の桐で、その外側には3反転する唐草を配する。中心飾りの葉脈は簡略され、両側の葉は外側に開いている。唐草は太く、その頭は大きい。

B-2類（11、12） 中心飾りは三葉の桐で、B-1類よりは突出している。中心飾りの外側には均等に3反転する唐草を配する。中心飾りの葉の葉脈は如実に表現され、両側の葉は内側に向き、葉脈の表現もB-1類とは異なる。唐草は細く、その頭は小さい。

C類（13~15） 中心飾りはつぼみ状のもので、その外側には2本のY字状の唐草を配し、さらにその外側には2本に分かれる唐草を配する。

軒棧瓦（第40図 16~19）

軒棧瓦は軒丸と軒平が分離しており、軒平の中心飾りは三葉の花冠と萼を組み合わせたもので、その左右にY字状の唐草を配する。その外側に上向きの唐草を、さらにその外側にY字状の唐草を配する。すべて上面はヘラナデ、下面はナデである。17は瓦当文様が平坦で、左側には刻印がある。

軒棧瓦の軒丸は2点出土した。18は左巻きの三ツ巴文と珠文を組み合わせたもので、瓦当直径は9.4cmをはかる。珠文の数は推定12個である。19は左巻きの三ツ巴文のみで、瓦当直径は7.6cmをはかる。

棧瓦（第40図 20~22）

棧瓦は方形の切り込みが右上隅にあるもの（20）、右下隅にあるもの（22）、左上隅にあるもの（21）の3つがある。

丸瓦（第41、42図）

丸瓦は凸面はすべてヘラナデ調整を行うが、凹面の成形、調整技法によって5つに分類できる。

A類（23~25） 凹面に布目痕が見られるもので、ほとんど無調整である。

B類（26、27） 凹面に布目痕が見られ、一部ナデ調整を行っている。26は玉縁をもち、凹面に弧状の工具痕と指頭圧痕が見られる。

C類（28、29） 凹面に布目痕が見られるがほとんど無調整で、布を強化したものと思われる刺糸の痕跡がある。刺糸の形態によって細分が可能であろう。29は凸面玉縁接続部に板状工具の押圧痕がある。また、凹面には山型の工具圧痕がある。

D類（30、32） 凹面に布目痕と叩き板調整痕が見られるもので、無調整のものと一部ナデ調整を行うものがある。32は凹面側縁を深く削り込んで段をなし、凸面玉縁上端には板状工具の押圧痕がある。また、側縁には沈線と板状工具の押圧痕がある。

E類（31、33） 凹面に布目痕と網目痕が見られ、一部ナデ調整を行っている。

鳥衾（第42図 34）

鳥体と伏間が一体となったもので、外面はヘラナデ調整を行う。瓦当部は左巻きの三ツ巴文と珠文を組み合わせたもので、瓦当直径は14.2cmをはかる。珠文の数は推定17個である。瓦当

上端には飾櫛をついたてたための方形の孔がある。また、下面には鬼瓦と接続させるための方形の孔がある。

9 木製品（第43～56図）

木筒・木札（第43～45図）

木筒と木札は22点出土し、荷札木筒（1～21）と免札（22）がある。木筒は上部の形態によって3つに分類でき、さらに下部の形態によって細分できる。なお、軒文、法量等は表1のとおりである。

A類（第43図 1～5） 上部の左右に切り込みを入れたもので、下部の形態によってさらに3つに分類できる。

A-1類（1、2） 下部が方形のもの。

A-2類（3） 下部はすぼまるが先端が尖らないもの。

A-3類（4、5） 下部がすぼまり、先端が尖るもの。

B類（第43、44図 6～14） 上部は左右に切り込みを入れない方形のもので、下部の形態によってさらに3つに分類できる。

B-1類（6、7） 下部が方形のもの。

B-2類（8～10） 下部はすぼまるが先端が尖らないもの。

B-3類（11、12） 下部がすぼまり、先端が尖るもの。

C類（第44図 15、16） 上部の角を斜めに切り落とし、下部はすぼまり、先端が尖るもの。

下駄（第46～48図）

下駄は104点出土した。下駄の分類には主にその構造に注目し、一本から台部と歯をつくりだしたものと一本下駄、台部と歯を別々につくり、組み合わせたものを構造下駄とした。

一本下駄（第46、47図）

一本下駄は42点出土しており、出土下駄中40.4%を占める。一本下駄は台部の形態が長方形のもの（I類）と隅丸方形または小判形のもの（II類）とに分け、さらに各々接地面の形態により2本の直線的な歯を有するものを連歯下駄（I-A、II-A類）、台部の裏面を箱状にくり、連歯よりも広い接地面をつくりだしたものを作り下駄（I-B、II-B類）とした。

I-A類（第46図 23～25） 台部の形態が長方形で、連歯下駄。27点出土し、出土下駄中26.0%を占める。I-A類はさらに前穴の位置により3つに分類した。

I-A-a類（23） 前穴が前歯に接する位置にあるもので、9点出土した。

I-A-b類（24） 前穴が前歯から3～5mm前方にあるもので、8点出土した。

I-A-c類（25） 前穴が前歯から1cm前方にあるもので、10点出土した。

I-B類（第46図 26） 台部の形態が長方形で、くり下駄。2点出土し、出土下駄中1.9%を占める。26は後歯が台部から独立している。

II-A類（第46、47図 27～32） 台部の形態が隅丸方形または小判形で、連歯下駄。10点出土し、出土下駄中9.6%を占める。II-A類は台部と歯の幅の関係により2つに分類し、さ

らに前穴の位置と後歯の形態により細分した。

II-A-*a*類 (27~29) 台部と歯の幅が同じもので、前穴の位置により3つに分類した。

II-A-*a-a*類 (27) 前穴が前歯に接する位置にあるもので、1点出土した。

II-A-*a-b*類 (28) 前穴が前歯から3~5mm前方にあるもので、1点出土した。

II-A-*a-c*類 (29) 前穴が前歯から1cm前方にあるもので、4点出土した。

II-A-*b*類 (30~32) 台部より歯の幅が広いもので、前穴の位置と後歯の形態により3つに分類した。

II-A-*b-a*類 (30) 前穴が前歯に接する位置にあるもので、1点出土した。

II-A-*b-b*類 (31) 前穴が前歯から1cm前方にあるもので、2点出土した。

II-A-*b-c*類 (32) 後歯が台尻からくりだし、断面が三角形状のもので、1点出土した。

II-B類 (第47図 33、34) 台部の形態が隅丸方形または小判形で、くり下駄。2点出土し、出土下駄中1.9%を占める。II-B類はさらに歯と台部の関係から2つに分類した。

II-B-a類 (33) 後歯は台部から独立しているが前歯が台部と連続しているもので、1点出土した。

II-B-b類 (34) 前歯と後歯が台部と連続しているもので、1点出土した。

構造下駄 (第48図)

構造下駄は60点出土し、出土下駄中57.7%を占める。構造下駄は一木下駄と同様に台部の形態により台部の形態が長方形のもの (I類) と隅丸方形または小判形のもの (II類) とに分けられ、さらにホゾに嵌め込まれた歯が台部を貫通し、表から見える露卯下駄 (I-A、II-A類) とホゾに嵌め込まれた歯が台部の途中で留まる陰卯下駄 (I-B、II-B類) に分類できる。

I-A類 (35、36) 台部の形態が長方形のもので、露卯下駄。21点出土し、出土下駄中20.2%を占める。I-A類はさらにホゾの形態によって2つに分類した。

I-A-a類 (35) 露卯下駄で、ホゾの形態が正方形のもの。20点出土した。

I-A-b類 (36) 露卯下駄で、ホゾの形態が長方形のもの。1点出土した。

I-B類 (37) 台部の形態が長方形のもので、陰卯下駄。2点出土し、出土下駄中1.9%を占める。

II-A類 (38、39) 台部の形態が隅丸方形または小判形のもので、露卯下駄。32点出土し、出土下駄中30.8%を占める。II-A類はさらにホゾの形態によって2つに分類した。

II-A-a類 (38) 露卯下駄で、ホゾの形態が正方形のもの。19点出土した。

II-A-b類 (39) 露卯下駄で、ホゾの形態が長方形のもの。13点出土した。

II-B類 (40) 台部の形態が隅丸方形または小判形のもので、陰卯下駄。5点出土し、出土下駄中4.8%を占める。

今回出土した下駄は17世紀を中心とする時期のもので、構造下駄が主体をなしつつ一木下駄が併用されている。一木下駄では台部の形態が長方形のものが多く、一木下駄中66.7%を占め

る。構造下駄では台部の形態が隅丸方形または小判形のものが多く、構造下駄中61.7%を占める。また、一本下駄では連歯下駄が多く、一本下駄中90.0%を占める。構造下駄では露卯下駄が多く、構造下駄中88.3%を占める。以上のことからこの時期には構造下駄の露卯下駄が主流で、一本下駄の連歯下駄が併用されていたものと思われる。

栓 (41~46)

栓は側面の形態が円筒形のもの (42)、截頭円錐形のもの (41, 43~45)、段を有するもの (46) がある。

鍋蓋 (47)

円形の蓋板に棒状のつまみを渡したもので、鍋などの蓋であると考えられる。つまみは欠損しているが5本の目釘で固定している。

曲物 (48~52)

曲物は遺存状態が悪く底板と側板が遊離したものが多い。48の側面には4か所に目釘があり、側板をはめこんで目釘で留めたものと思われる。49の側板は一枚板で1重に曲げている。側板と底板は4か所で桜皮によって綴じ合わせている。底板内面には付着物がある。50の側板は一枚板で、1重に曲げて1か所で桜皮を用いて綴じ合わせている。底板は側板にはめこんだだけである。51の側板は一枚板で、3重に曲げて2か所で桜皮を用いて綴じ合わせている。底板は側板にはめこんだだけであり、直径1.1cmの孔がある。52の側板は一枚板で1重に曲げている。側板中央には2.7~4.0cm間隔の孔があり、下段には底板をはめこむために用いたものと思われる孔がある。

柄杓 (53)

底板は欠損するが側板は一枚板で1重に曲げており、中央に長さ2.1cm、幅1.5cmの長方形の孔があり、この部分に断面長方形の柄をさしこみ、貫通させている。

庖丁 (54)

庖丁の柄で、断面椭円形の柄に金属製の刃がつく。

籠 (55, 56)

55は柄の両縁が平行であるが、56は柄が撥形に開き平坦部へとつづく。两者とも平坦部の前端が著しく摩滅しており、籠のような用途が考えられる。

楊枝 (57)

断面長方形の棒材の一端を尖らせたもので、頭部も尖らせ、加工している。

杵 (58)

断面円形の棒の中央を削り、握りとしている。

折敷、盆 (59, 60)

59は隅丸で、両面とも漆が塗られている。縁には側板をはめこむための溝があるが、側板を固定するための目釘ではなく、側板は底板にはめこむだけである。裏面には脚をつけるための溝があり、これを固定するための目釘穴がある。60は隅を斜めに切り落としたもので、両面とも漆が塗られている。縁には厚さ0.8~0.9cmの側板をはめた痕跡があり、これを固定するための

目釘穴がある。底板は2枚組み合わせて用いたものと思われ、側面にはこれらを固定するための目釘穴がある。

切匙 (61~69)

柄の突端部の片側に半円形の平坦な部分をもつ。用途についてはヘラ先で擂鉢で擦ったものを搔き取るのに使ったものと思われる。柄尻部の形態によって大きく2つに分けられる。

A類 (61~64) 柄尻部が方形のもので、柄部からヘラ部にかけての形態によって4つに分類できる。

A-1類 (61) 柄部からヘラ部にかけてなだらかに撥形を呈しながら広がるもので、さらに長さによって6つに細分できる。

A-2類 (62) 柄部とヘラ部の境界が大きく湾曲するもので、さらに長さによって6つに細分できる。

A-3類 (63) 柄部とヘラ部の幅がほぼ同じで、直線的なもので、さらに長さによって2つに細分できる。

A-4類 (64) ヘラ部が細長く、刀子状のもの。

B類 (65~69) 柄尻部が尖るもので、その形態によって4つに分類できる。

B-1類 (65) 柄尻部中央よりも背側で尖るもので、柄部からヘラ部にかけての形態が柄部からヘラ部にかけてなだらかに撥形を呈しながら広がるものと柄部とヘラ部の境界が大きく湾曲するものがある。

B-2類 (66、67) 柄尻部中央よりも背側で尖るもので、B-1類よりも鈍角なもの。柄部からヘラ部にかけての形態が柄部からヘラ部にかけてなだらかに撥形を呈しながら広がるものと柄部とヘラ部の境界が大きく湾曲するものがある。

B-3類 (68) 柄尻部中央よりも刃側で尖るもので、柄部からヘラ部にかけての形態が柄部からヘラ部にかけてなだらかに撥形を呈しながら広がるものと柄部とヘラ部の境界が大きく湾曲するものがある。

B-4類 (69) 刃側がゆるやかに傾くもの。

箸 (70~75)

箸は200点余り出土した。ほとんどが白木であるが漆塗りのものもある。加工は粗く、断面が不整の多角形を呈するものが多い。長さは最短12.6cm(4寸1分)、最長31.5cm(10寸4分)で、24.0~27.0cmのものが多く、特に24.0cm(7寸9分)、24.6cm(8寸1分)、25.6cm(8寸4分)、27.0cm(8寸9分)に集中しており、箸の製作に際してはある一定の長さを基準にしてつくったものと思われる。

木刀 (76~80)

木刀はすべて、ほとんど反りがない直刀である。78は刀身から茎にかけてなだらかに細くなり、刀身と茎の区別が明瞭ではない。刀身先端部は削って刃先をつくり出しているが、それ以下は刃先をつくらず断面は長方形を呈する。79は刃が薄く、刀身と茎の境は斜めになっている。茎は刀身よりも厚く、断面は四角形を呈する。80は厚手で、刀身の中央部に稜があり、断面は

五角形を呈する。刀身と茎の境は直角に近い段となっている。茎も断面が五角形を呈する。

鉤 (81、82)

平面形態が隅丸長方形で、中央には柄をさしむ台形の孔がある。

把手 (83、84)

行燈の把手と考えられるもので、83は左右の形態が非対称で、2か所に斜めに貫通する孔がある。

ものさし (85)

鯨尺で、3.7cm間隔で大目盛が刻んでおり、1寸を表している。5寸の大目盛には三角形を2つ組み合わせたものが刻んである。1寸の大目盛間に5分の中目盛が刻んである。

櫛 (86～91)

櫛は握り部分が最も厚く、歯先は細く尖る雨垂れを逆さにしたような断面を呈する。歯の付根部分の断面は歯の付根が稜をもち、V字形を呈するもの(86)、稜がなく、水平に一字形を呈するもの(89～91)、その中間形態とでもいうような稜がなく、丸みを帯び、U字形を呈するもの(87、88)がある。

ほうき (92、93)

ほうきはいずれも柄を欠損しているシユロほうきである。柄と毛の接合方法は不明であるが、毛の部分は平たく整形するために92は4列、93は5列の紐を交互に編んでいる。

三味線 (94)

三味線の棹で、棹の表面は平坦で、背部は丸く面取りをする。中木は表面は段がつき、背部は湾曲して棹からつづき、断面は長方形で、先端に向かって徐々に細くなり、先端を円筒形に削り出す。糸巻の右側の畔には2本、左側の畔には1本の糸巻を差し込むための孔がある。海老尾は反り、その先端は山形を呈し、さらに面取りされている。

撥 (95)

太鼓の撥で、断面が円形の棒状の頭部に円筒形の頭を削り出す。尻部も削っている。

羽子板 (96)

柄を欠損するが羽根の打面と柄の接続部は反っている。

竹とんぼ (97)

羽根は断面長方形であるが、羽根先を削って台形のところもある。羽根の短軸に対して孔を斜めにあけ、羽根が斜めに傾くようにしている。軸は先を削って羽根に差し込んでいる。

独楽 (98～101)

軸をもたない小型の独楽で、側面から見ると五角形を呈する。98、99、101は側面下部は削っているが上部は無調整である。100は側面全体を削っている。また、98の上面にはくぼみがある。

人形 (102～108)

102は犬で、左右の耳は欠損するが耳を接続するための目釘穴があり、後頭部には切り込みがある。底面には胴体と接続するための目釘穴がある。103は淨瑠璃人形の頭と思われ、顔は

やや前かがみで喉の下面にはカマを差し込むための孔がある。104は首には頭を差し込むための孔があり、底面にも孔がある。腕の部分は水平に切り落として面をもち、手をつけるための目釘穴等はない。105の側面は頭と胴体の境が明瞭ではなく直線的である。106は首を削り込んで頭と胴体を区別している。瓶の形態は107と同様で、墨で目を描いていたものと思われる。107は側面を水平に切り落として面をなし、側面の上下に手足をつけるための孔がある。頬には墨で目を描いている。108は首を削り込んで頭と胴体を区別している。下部には段があり、その側面には孔がある。

10 漆 器 (第57~59図)

蓋 (第57図)

蓋はすべて椀のかぶせ蓋で、口縁は内湾する。外面は黒色塗、内面は赤色塗で外面には文様がある。法量によって細分が可能であろう。

椀 (第58、59図)

椀はすべて外面は黒色塗、内面は赤色塗で、器形によって4つに分類でき、さらに口径によって細分できる。

A類 (11~25) 脊部が高台脇から口縁にかけて緩やかに内湾気味に立ち上がるもの。

A-1類 (11) 口径が10.0cm前後のもの。

A-2類 (12~16) 口径が11.8cm前後のもの。

A-3類 (17~19) 口径が13.0cm前後のもの。

A-4類 (20~25) 口径が14.0cm前後のもの。

B類 (26~31) 脊部下半に1段の稜をもつもの。

C類 (32~34) 高台脇から腰部にかけて2段の稜をもつもの。

杯 (35~37) 口径に比べて脊部が非常に浅く、高い高台がつく。35は高台内のロクロ挽き込みが浅く、36、37は深い。

11 土 錘 (第60図)

魚網の沈子と考えられる土錘は91点出土しており、すべて中心に孔を穿つ管状土錘である。形状から3タイプに大別され、最大径、長さから細分した。各タイプを2点ずつ18個を図示した。製作技法は芯棒に粘土を巻き付けて整形した後、芯棒を抜き取ったものと推察される。形状の差異が時間的、用途的なものかは不明であるが、形状の水抵抗を考慮するとA類は刺し網用、B、C類は定置網用と考えられる。

A類 (1~10) 縦断面形が鉤錘形で細身のもの。

A-1類 (1、2) 径8mm以下で細身。重さ2g前後で赤色で焼きの硬い緻密なもの。

A-2類 (3、4) 径8~9mmで細身。重さ4g前後で赤色、灰褐色で焼きの硬い緻密なもの。指整形の痕跡を残すものが多い。

A-3類 (5、6) 径10~12mmで長さの短いもの。重さ4g前後で赤色、灰褐色で焼き

の硬い緻密なもの。指整形の痕跡を残す。

A-4類 (7、8) 径10~12mmで細身。重さ4g前後で赤色、灰褐色で焼きの硬い緻密なもの。指整形の痕跡を残す。

A-5類 (9、10) 径13~15mm。重さ9g前後で黒褐色、灰褐色で焼きの硬い緻密なもの。指整形の痕跡を著しく残すものが多い。

B類 (11、12) 縦断面形が長方形のもの。円筒形に近く、両端がややすぼまる。白灰色、淡褐色で焼きの硬い緻密なもの。

C類 (13~18) 縦断面形が球形、橢円形に近く大型のもの。

C-1類 (13、14) 縦断面形が橢円形~紡錘形で径30mm前後、重さ40g前後のもの。黒褐色、淡褐色で焼きの硬い緻密なもの。指整形の痕跡を残す。

C-2類 (15、16) 縦断面形が球形に近く、径30mm前後、重さ40g前後のもの。黒灰色で、焼きが硬く緻密。孔端部に紐ずれが観察される。

C-3類 (17、18) 縦断面形が橢円形で径40mm前後、重さ80g前後のもの。赤褐色、淡褐色で焼きの硬い緻密なもの。指整形の痕跡を残す。

12 石 製 品 (第61図)

硯 (1~3)

硯はいずれも破片であるが小片も含めて4点出土した。そのうち3点を図示したが、いずれも長方形硯の部類と考えられる。1は1/3しか残存していないが、隅丸の角をもつ。陸と海は不明確である。縁への立上がりは直角ではなく湾曲している。硯背は平坦である。2は3/4が遺存し、硯面中央に斜めに深い墨道が走り、左脇にも浅い墨道が見られる。墨道のため陸と海の形状は失われている。中央の墨道は深いため海として墨溜に使われたと考えられる。縁はかなり直角状に立ち上がっている。硯背は平坦である。3は両端部が欠損しており、1/4程度の遺存。形状は長方形硯の部類と推定されよう。陸と海は不明確であり、縁も大半欠けているが、立上がりは湾曲している。硯背は平坦である。

砥石 (4~6)

形態、石質、使用痕跡から砥石と考えられるものは6点出土している。そのうち4点を図示した。いずれも破片で薄く使い減りがしている。石質から中砥、仕上げ砥と考えられるものである。4は小型の砥石で、両端が欠損していると考えられるが、風化が著しく不明確である。砥面は表面のみと推定される。石質から中砥と考えられる。5は下半分が欠損し、砥面は表面のみであるが、使い減りして非常に薄い。石質から仕上げ砥と考えられる。6は両端が欠損し、表裏2面に砥面がみられる。裏面には横方向に筋状の砥面使用痕跡が観察される。石質から仕上げ砥と考えられる。

石錐 (7)

石錐は1点のみ出土しており、偏平礫の打ち欠き石錐である。両端部を打ち欠き、紐かかりとしている。

基石 (8~13)

碁石は10点出土しており、いずれも石（黒）のみで白は検出されていない。円形で直径2cm前後、厚みは偏平で5mm前後のものである。重さは2.5~5gまで認められる。

13 銅 製 品 (第62~64図)

銅製品には銅錢、煙管の他、生活用具と建具、武具等種々雑多なものがある。

古銭 (第62図)

古銭は36枚出土した。その内訳は洪武通宝3枚、永楽通宝2枚、寛永通宝26枚、不明5枚である。1~3は洪武通宝、4~5は永楽通宝、6~30は寛永通宝である。

煙管 (第63図)

煙管は銅あるいは真鍮製で、34点出土した。その内訳は雁首20点、吸口14点である。

雁首 (1~12)

雁首は半球形の火皿に銅板を巻いた管を溶接したもので、3類7群に分類できる。

A類 (1~4) ラウ結合部の肩と脂返しとを段や沈線によって明瞭に区別するもので、火皿の深さは9.7~10.1mmと深く、火皿と首部の接合部には補強帯が巡らない。脂返しの湾曲は小さい。肩と脂返しの境の成形及び形態によって3つに細分できる。

A-1類 (1) 肩と脂返しは2本の管を組み合わせたもので、肩と脂返しの境に段がつく。1は火皿を欠損するが、脂返しはラウ結合部から見て右側に、肩は左側に銅板の縫目がある。

A-2類 (2) 肩と脂返しは同じ1本の管でつくられたもので、肩と脂返しの境に段がつくもの。

A-3類 (3、4) 肩と脂返しは同じ1本の管でつくられたもので、肩と脂返しの境には段ではなく、沈線によって脂返しと肩を区別している。

B類 (5~9) ラウ結合部の肩と脂返しとの区別がつかないもので、火皿の深さは8.2~8.9mmでA類よりもやや浅く、火皿と首部の接合部に補強帯が巡る。脂返しの湾曲は大きい。銅板の縫目の位置によって細分できる。

B-1類 (5~7) ラウ結合部から見て左側に銅板の縫目があるもの。

B-2類 (8、9) ラウ結合部から見て右側に銅板の縫目があるもの。

C類 (10~12) 火皿は小型化し、火皿と首部の接合部には補強帯が巡らない。脂返しの湾曲はほとんどなくなる。銅板の縫目の位置によって細分できる。

C-1類 (10、11) ラウ結合部から見て左側に銅板の縫目があるもの。

C-2類 (12) ラウ結合部から見て右側に銅板の縫目があるもの。

吸口 (13~21)

吸口は銅板を巻いたもので、3類7群に分類できる。

A類 (13~16) ラウ結合部の肩と吸口とを段や沈線によって明瞭に区別するもので、肩と吸口の境の成形及び形態によって3つに細分できる。

A-1類 (13) 肩と吸口は2本の管を組み合させたもので、肩と吸口の境に段がつく。13は肩に斜めの線刻があり、吸口も2本の管を組み合させている。

A-2類 (14、15) 肩と吸口は同じ1本の管でつくられたもので、肩と吸口の境に段がつく。

A-3類 (16) 肩と吸口は同じ1本の管でつくられたもので、肩と吸口の境には段ではなく、沈線によって肩と吸口を区別している。

B類 (18~21) ラウ結合部の肩と吸口との区別がつかないもので、ラウ結合部が直線的で途中から細くなる。吸口の形態によって3つに細分できる。

B-1類 (18) ラウ結合部が直線的で途中から細くなり、吸口まですぼまるもの。

B-2類 (19、20) ラウ結合部が直線的で途中から細くなり、吸口まですぼまるが吸口が少し膨らむもの。

B-3類 (21) ラウ結合部が直線的で途中から細くなり、吸口まですぼまるが吸口が大きく膨らむもの。

C類 (17) ラウ結合部の肩と吸口の境が膨らむもの。17はラウ結合部の肩と吸口の境に4本の沈線がある。

秤 (22)

22は鉢皿秤の鉢皿で、金メッキが施され、4方に鎖状の紐鎖をつけるための金具がつく。中央には「二条通玉ヤ町」、「天下一 御秤屋 豊後守」の刻印がある。

簪、毛抜き、耳搔き (23~25)

23は二股の細い棒状で頭部は欠損しているが、接合部があり、飾りがついていたと考えられる簪である。24は毛抜きで、変形しているが二股の板状で先端が湾曲し尖る。25は耳搔きで、猿をデザインデフォルメしたもので、右腕を棒状にして匙をつける。

灯明台 (26)

高台の付いた灯明皿状のもので、中央に突起があり、蠟燭用の灯明台と考えられる。

釣針状製品 (27)

釣針状のものであるが、先端にはかえりがない。頭部は環状に丸められ紐穴となっている。金色に輝いており真鍮製かと考えられる。

小柄 (28、29)

小柄はいずれも鞘部であるが2点出土した。両方とも内部に実が詰まっている。28は金色で、刻み線による装飾がなされており真鍮製かと考えられる。

匙、杓子 (30、31)

30は柄を接合した杓子で、柄の内部には木片が残存しており、柄は木芯に銅板を被覆したものと思われる。31は棒状の先端が少し湾曲したもので、薬匙と考えた。

おろし金 (32、33)

おろし金は2点あり、板に着装する小型のものである。32は目釘穴が4か所ある。刃部は小さい長方形の穴の打ち抜きで、その部分がかえりとなり、刃となる。穴は2個、3個、2個、

3個、2個の5列である。33は同形であるが1／2しか遺存していない。

柄 (34、35)

柄は本体が欠損しており用途不明であるが、薄板状で、大小あり、大きい35には端部に吊り穴があり真鍮製かと考えられる。

飾り金具 (36～39)

円板状のもの、小判形のもの、L字状のものなど薄い板のものは、柱や家具の飾り金具と考えた。また、小さいものは小物の飾りと考えられ、39には細かい波と魚をデザインした彫金がみられる。

14 鉄 製 品 (第65図)

鉄製品には鋳造、鍛造のものが見られ、種々雑多なものがある。

角釘 (1～6)

大小見られ鋳化しているが、断面が方形で角釘とわかる。頭部はつぶれており形式は不明であり、時代観は判別できなかった。

止め金具、鈎 (7～9)

止め金具は大小2点あり頭部が環状になっている。7は長目で、何かを牽引しておく止め金具と推定される。いずれも断面方形である。8は扉などの蝶番いの止め金と考えられる。9は両端が欠損しているが鈎状に湾曲しており、鈎と思われる。

把手金具 (10～12)

環状のもので、家具、建具等の把手と考えられる。10は取付け部が直線的となり、軸に直交した環状となっている。11も取付け部が直線的となり、梢円状となる。12は偏平な環状金具で、内側に直線的な部分がありここが取付け部と推定される。

鋼、羽蓋 (13)

13は破片であるが鈎状の湾曲した部分が残っている。

かみそり (14)

鋳化し腐食が著しいが、断面が片刃となっている。茎の部分もわずかに残っている。

錆物片 (15、16)

15、16は腐食がひどいものであり、製品名は不明であるが錆物である。

鋼原材料 (17)

蒲鉾状の鉄塊で、両端部は丸くおさまり、下部は平坦である。一単位の出荷製品と考えられるもので比重も重い。

15 動物遺存体

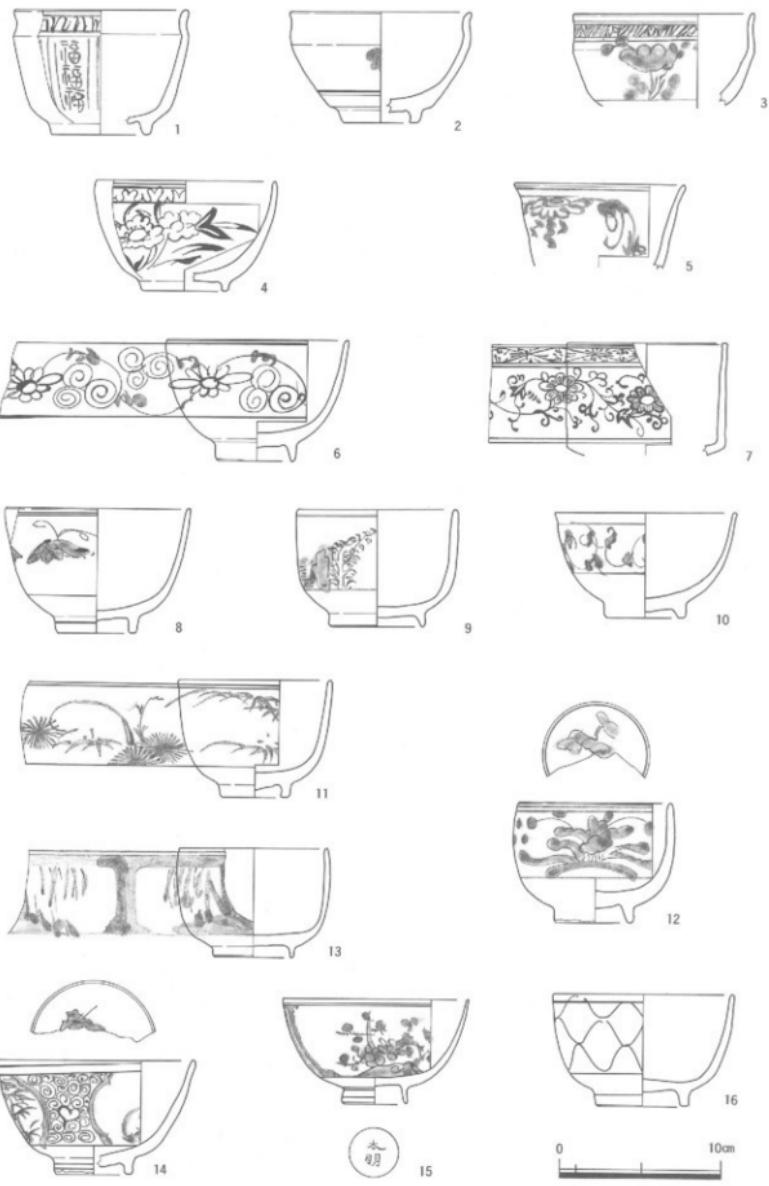
哺乳類 哺乳類にはシカ、ウシ(?)、イヌ、イルカ類、ヒト、ネコ、イノシシ、タヌキ、がある。

爬虫類 爬虫類にはスッポンがある。

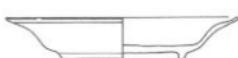
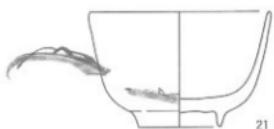
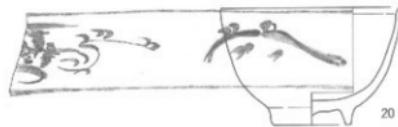
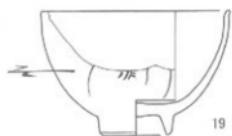
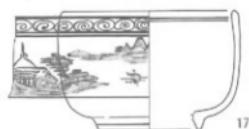
鳥類 鳥類は鳥名は不明であるが検出された。

魚類 魚類にはスズキ、タイ、フグがある。

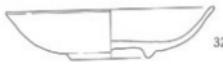
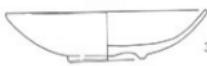
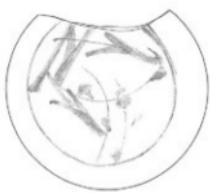
貝類 貝類にはサルボウガイ、イワガキ、テングニシ、サザエ、アワビ、アカニシ、ハナムシロガイ、ウミニナ、バイ、ツメタガイ、ヤマトシジミがある。



第9図 第8層出土磁器実測図（1／3）



第10図 第8層出土磁器実測図（1／3）



33



37



39



34



40



食 41



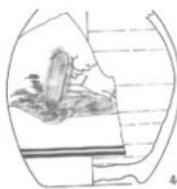
38



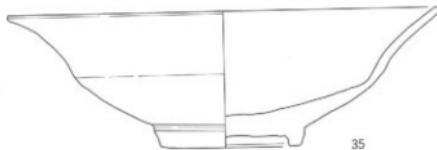
42



43



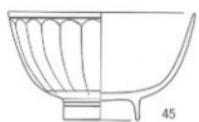
44



35



第11図 第8層出土磁器実測図（1／3）



45



46



47



48



49



50



52



53



54



55



56



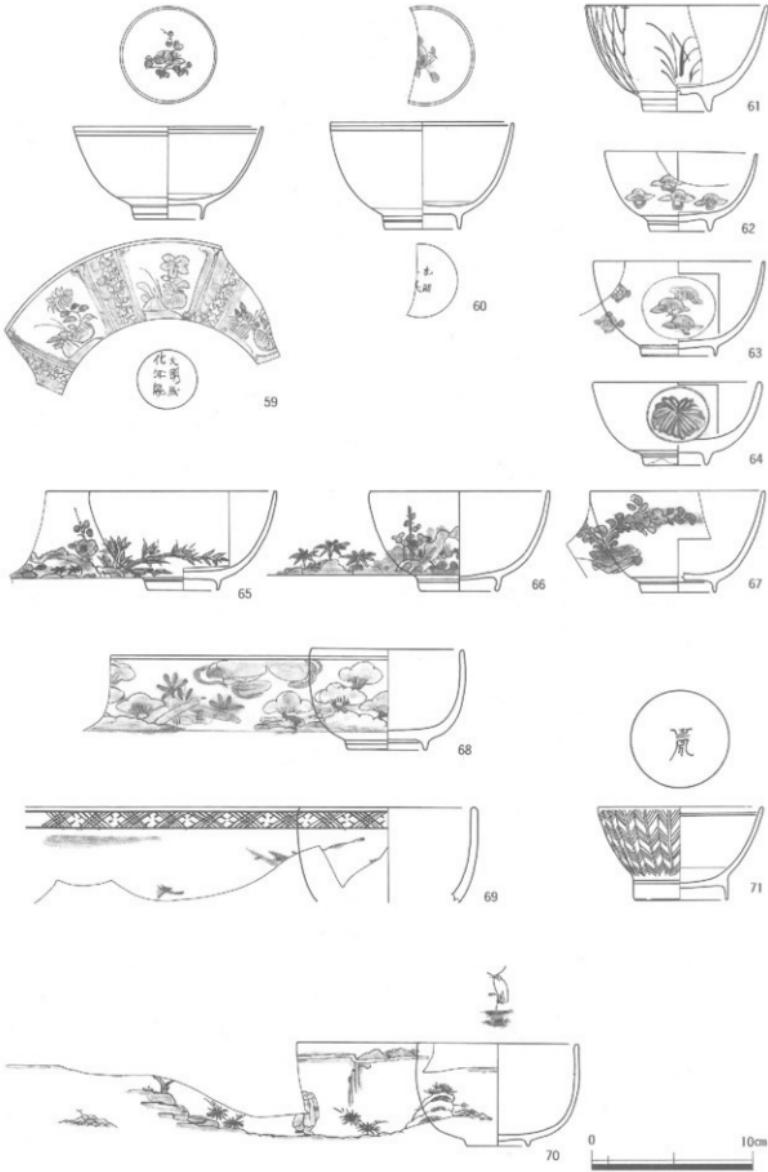
57



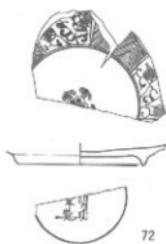
58



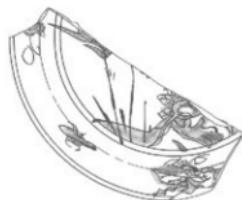
第12図 第5層出土磁器実測図（1／3）



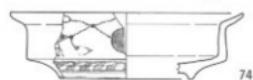
第13図 SD-04 出土磁器実測図 (1 / 3)



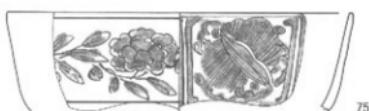
72



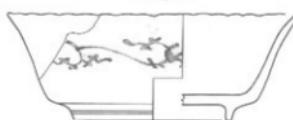
73



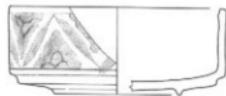
74



75



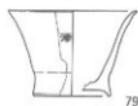
76



77



78



79



80



81



82



83



84



第14図 SD-04出土磁器実測図 (1/3)



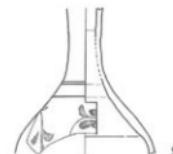
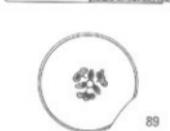
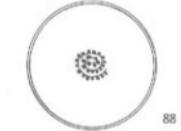
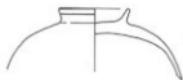
85



86



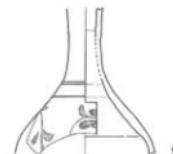
87



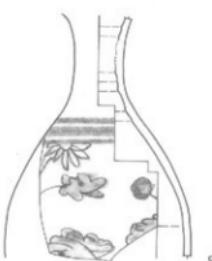
91



92



93



94

95



96

97

98

99

100

101

102

103

104

105

106

107

108

109

110

111

112

113

114

115

116

117

118

119

120

121

122

123

124

125

126

127

128

129

130

131

132

133

134

135

136

137

138

139

140

141

142

143

144

145

146

147

148

149

150

151

152

153

154

155

156

157

158

159

160

161

162

163

164

165

166

167

168

169

170

171

172

173

174

175

176

177

178

179

180

181

182

183

184

185

186

187

188

189

190

191

192

193

194

195

196

197

198

199

200

201

202

203

204

205

206

207

208

209

210

211

212

213

214

215

216

217

218

219

220

221

222

223

224

225

226

227

228

229

230

231

232

233

234

235

236

237

238

239

240

241

242

243

244

245

246

247

248

249

250

251

252

253

254

255

256

257

258

259

260

261

262

263

264

265

266

267

268

269

270

271

272

273

274

275

276

277

278

279

280

281

282

283

284

285

286

287

288

289

290

291

292

293

294

295

296

297

298

299

300

301

302

303

304

305

306

307

308

309

310

311

312

313

314

315

316

317

318

319

320

321

322

323

324

325

326

327

328

329

330

331

332

333

334

335

336

337

338

339

340

341

342

343

344

345

346

347

348

349

350

351

352

353

354

355

356

357

358

359

360

361

362

363

364

365

366

367

368

369

370

371

372

373

374

375

376

377

378

379

380

381

382

383

384

385

386

387

388

389

390

391

392

393

394

395

396

397

398

399

400

401

402

403

404

405

406

407

408

409

410

411

412

413

414

415

416

417

418

419

420

421

422

423

424

425

426

427

428

429

430

431

432

433

434

435

436

437

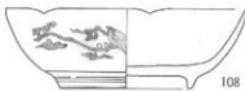
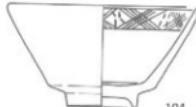
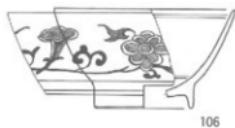
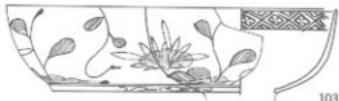
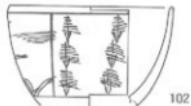
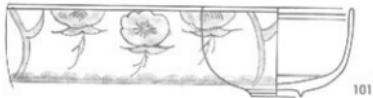
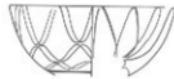
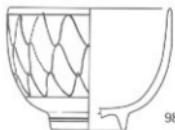
438

439

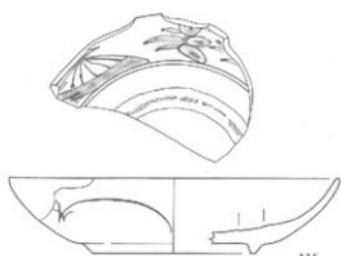
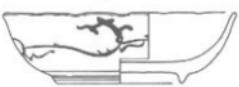
440

441

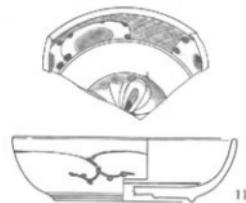
442



第16図 第4層出土磁器実測図（1／3）

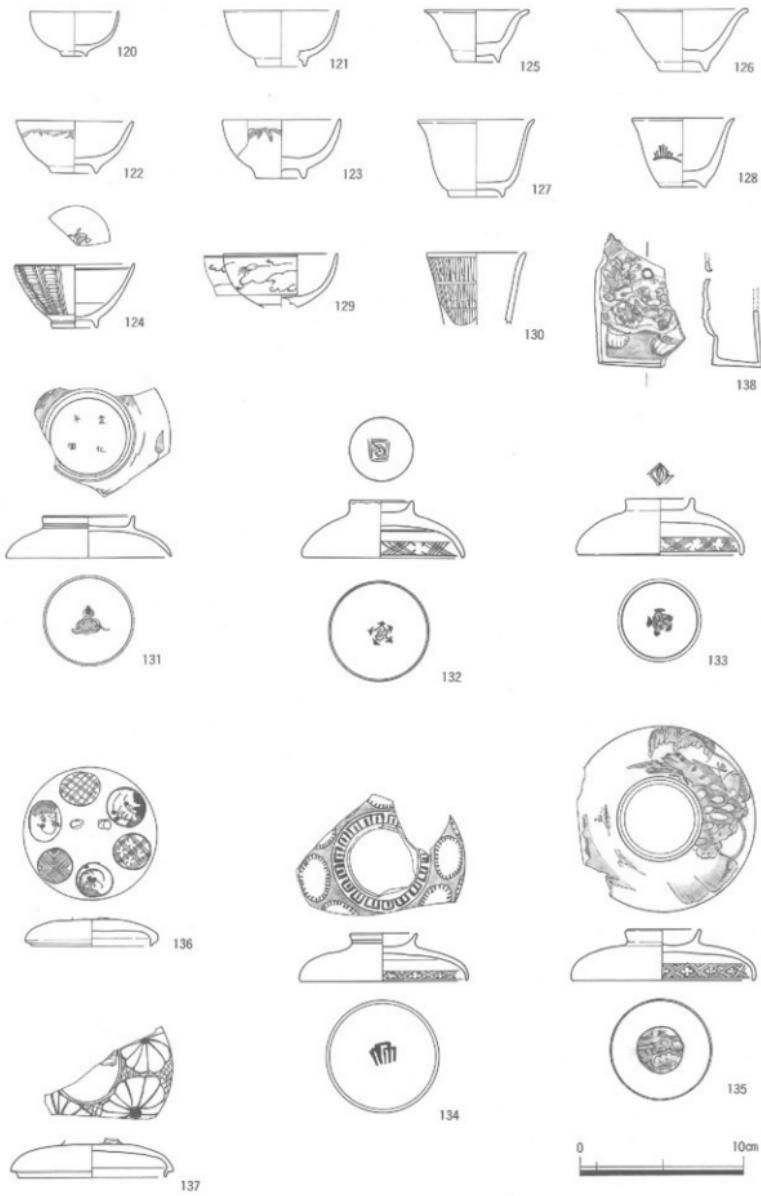


116

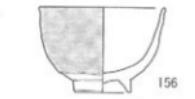
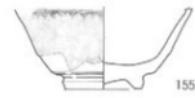
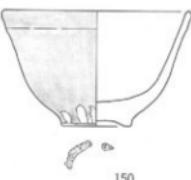
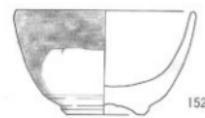
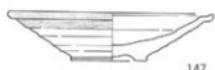
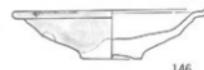
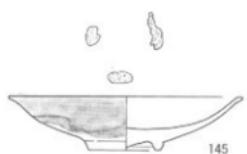
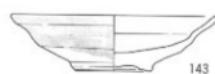
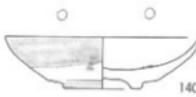
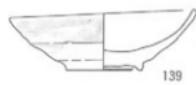


0 10cm

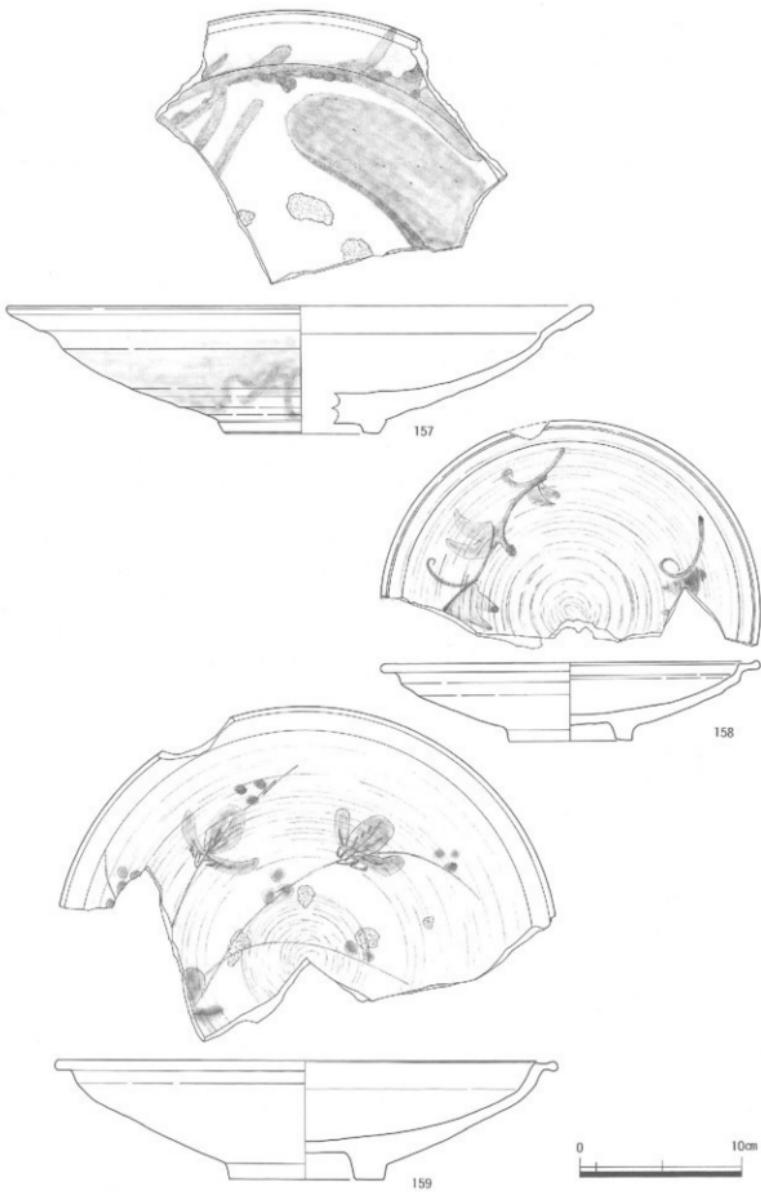
第17図 第4層出土磁器実測図（1／3）



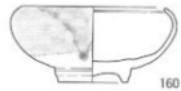
第18図 第4層出土磁器実測図（1／3）



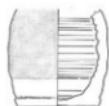
第19図 第8層出土唐津実測図（1／3）



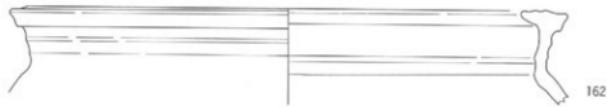
第20図 第8層出土唐津実測図（1／3）



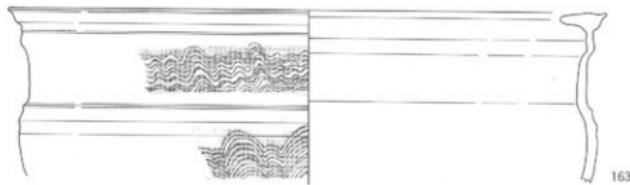
160



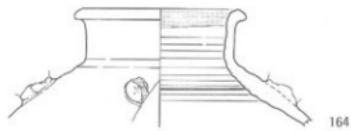
161



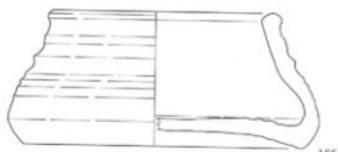
162



163



164



165



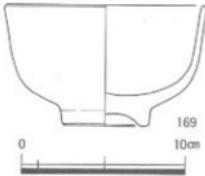
167



168



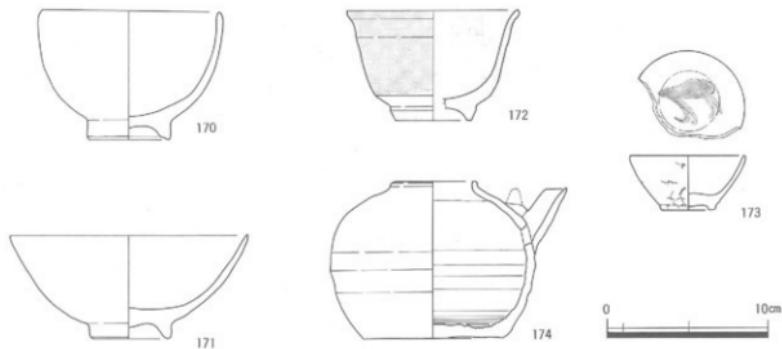
166



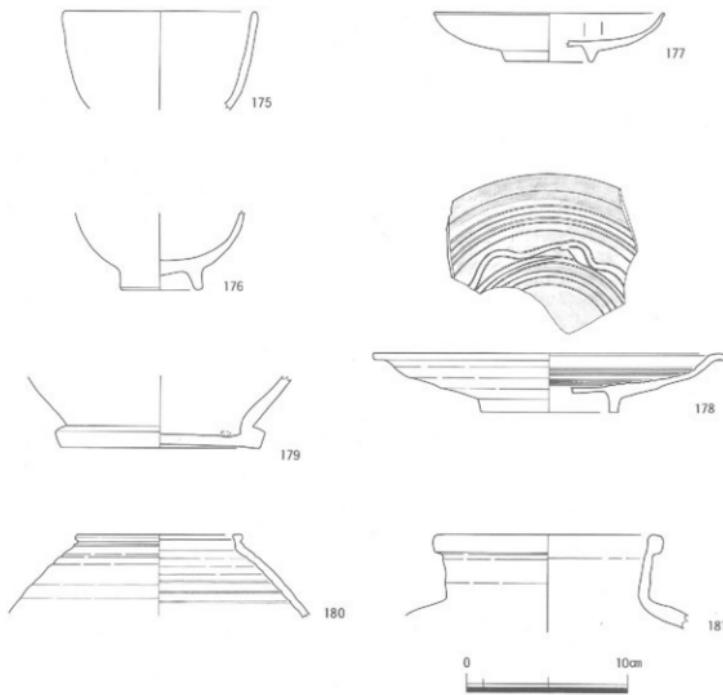
169

0
10cm

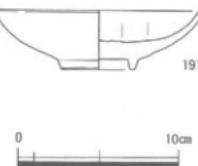
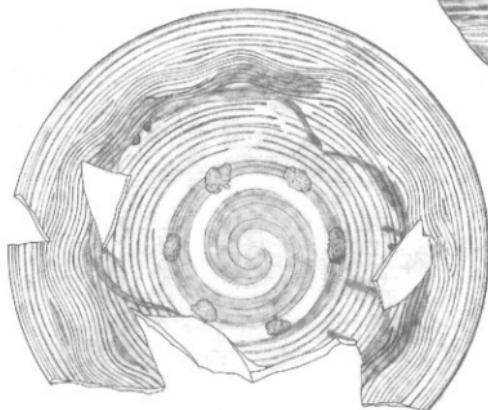
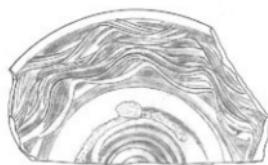
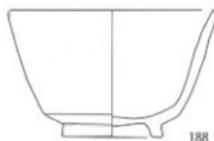
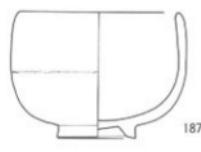
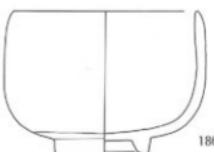
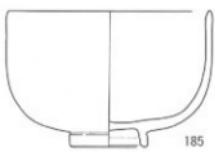
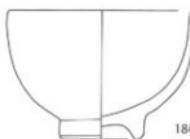
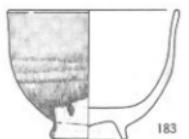
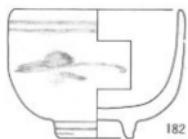
第21図 第8層出土唐津・備前・織部・志野・萩実測図（1／3）



第22図 第8層出土陶器実測図（1／3）

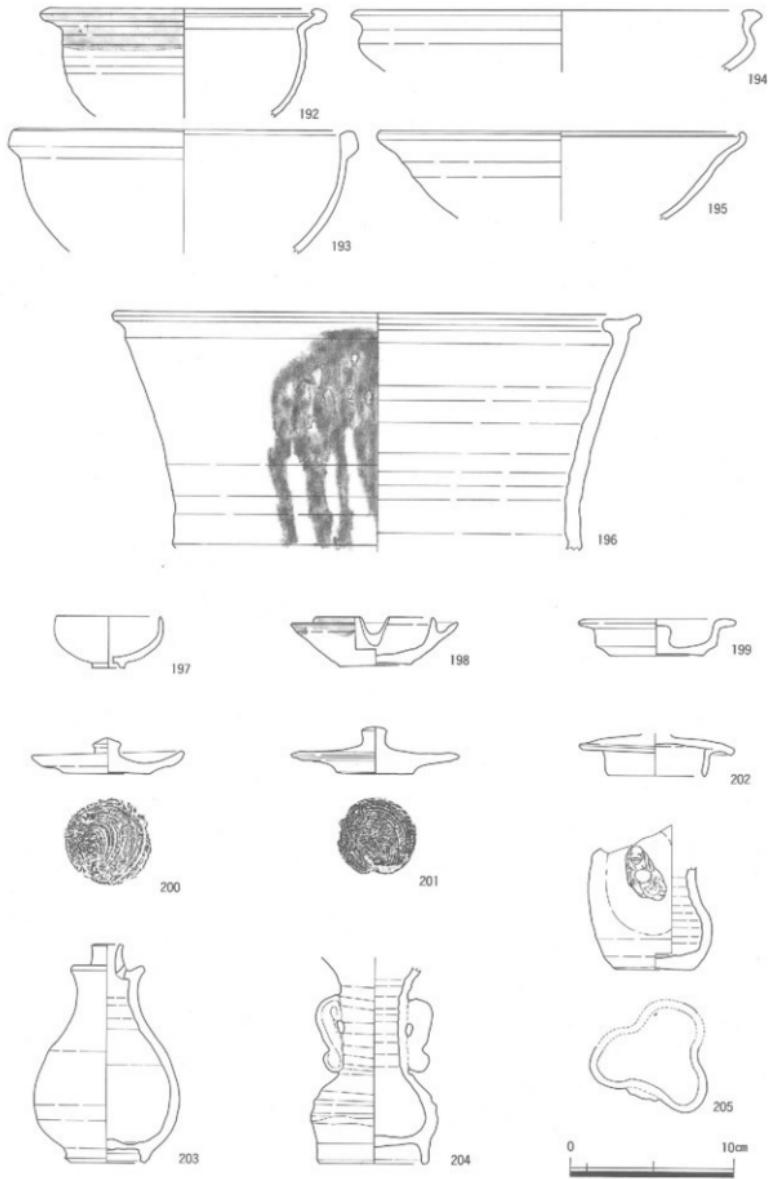


第23図 第5層出土陶器実測図（1／3）

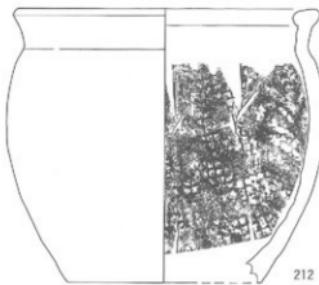
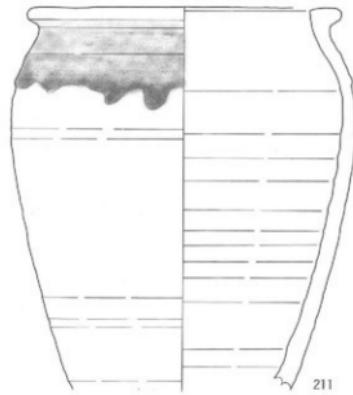
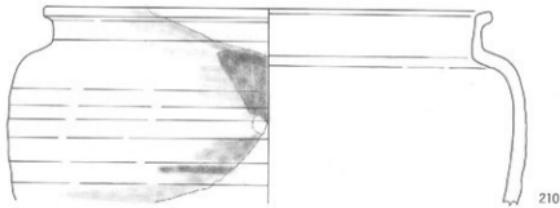
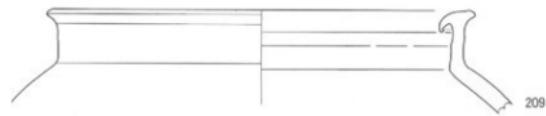
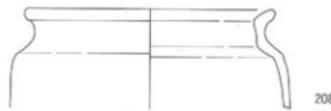
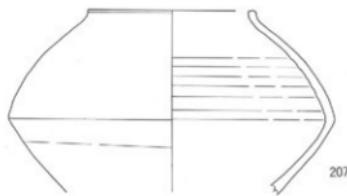
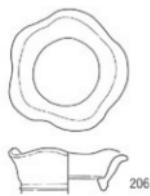


0 10cm

第24図 SD-04 出土陶器実測図 (1/3)



第25図 SD-04 出土陶器実測図 (1/3)



0 10cm

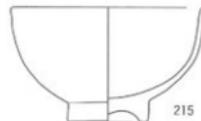
第26図 SD-04出土陶器実測図 (1/3)



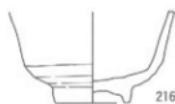
213



214



215



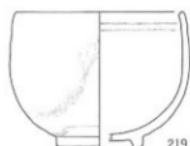
216



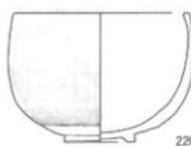
217



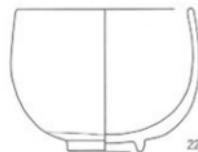
218



219



220



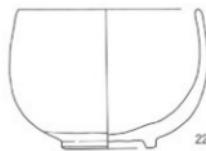
221



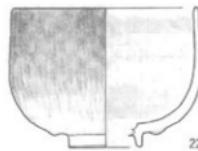
222



223



224



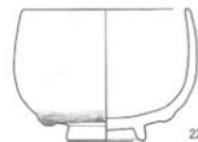
225



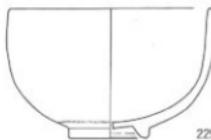
226



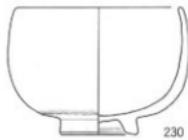
227



228



229



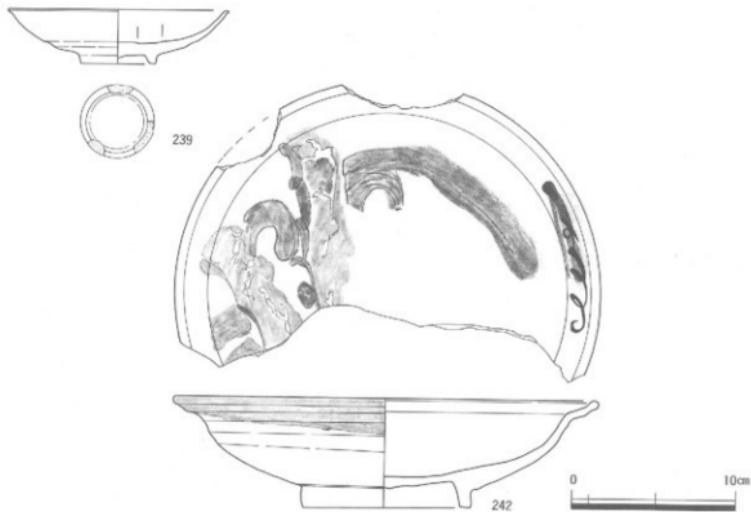
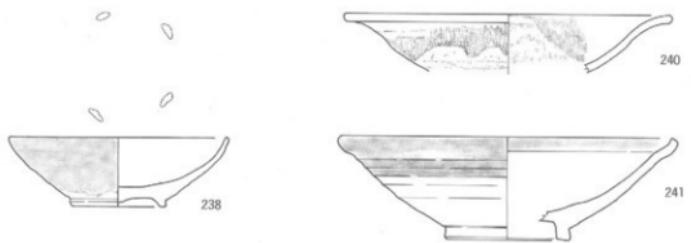
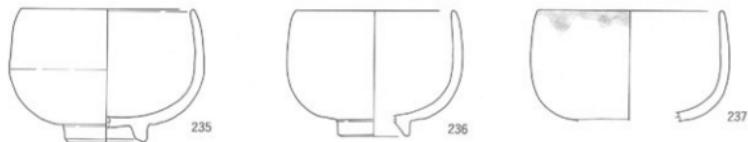
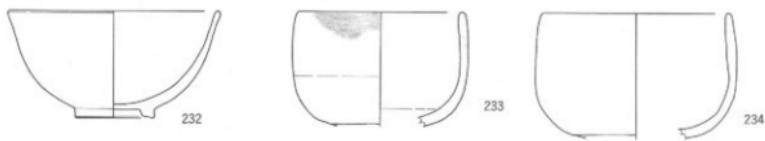
230



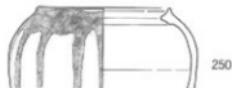
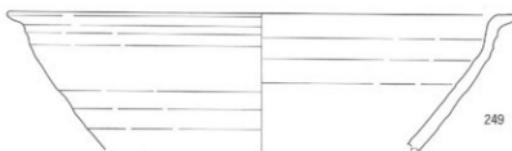
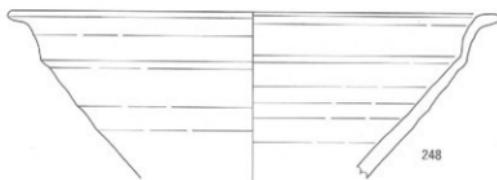
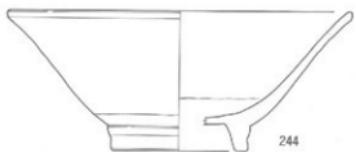
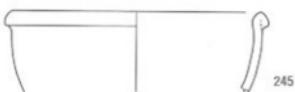
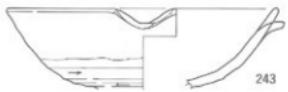
231



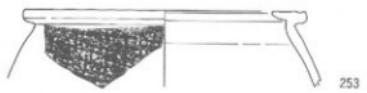
第27図 第4層出土陶器実測図（1／3）



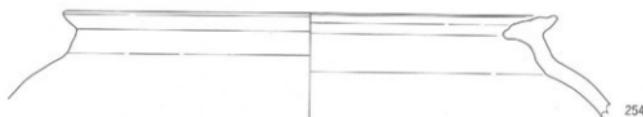
第28図 第4層出土陶器実測図（1／3）



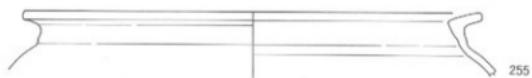
第29図 第4層出土陶器実測図（1／3）



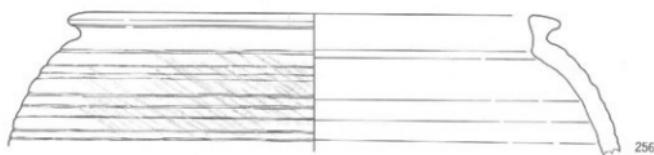
253



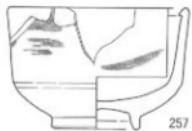
254



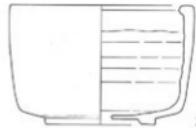
255



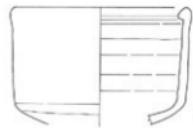
256



257



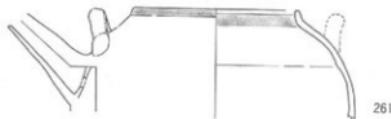
258



259



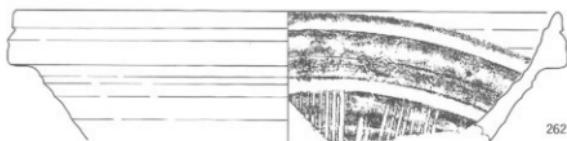
260



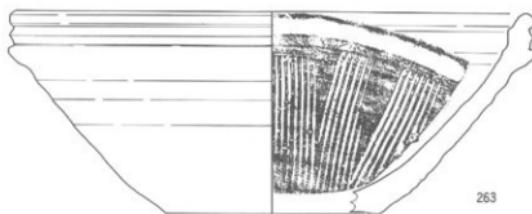
261



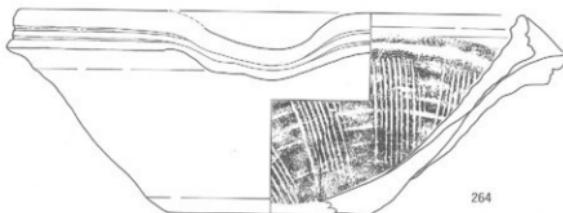
第30図 第4層出土陶器実測図（1／3）



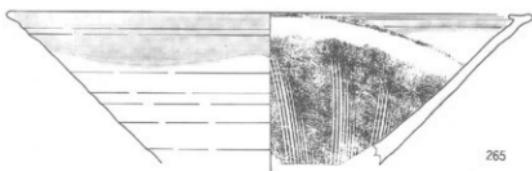
262



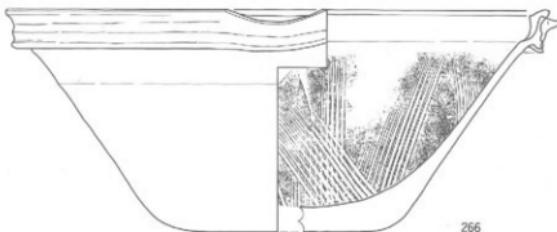
263



264



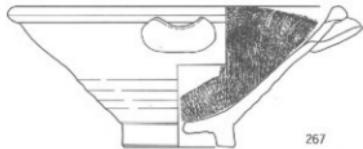
265



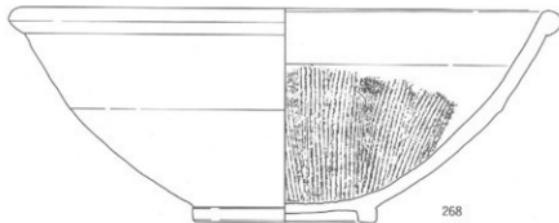
266



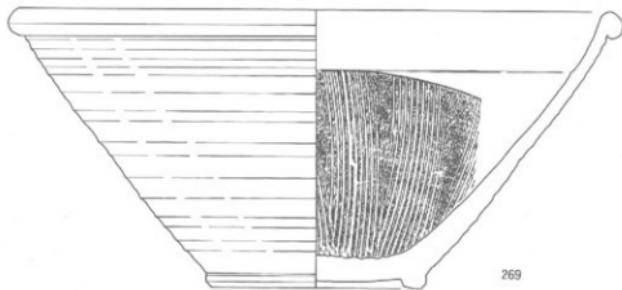
第31図 撥鉢実測図 (1 / 3)



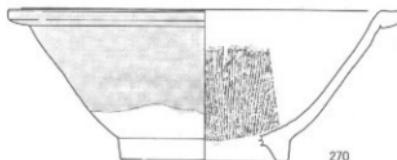
267



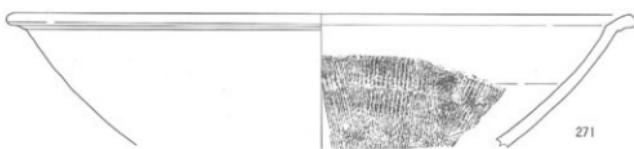
268



269



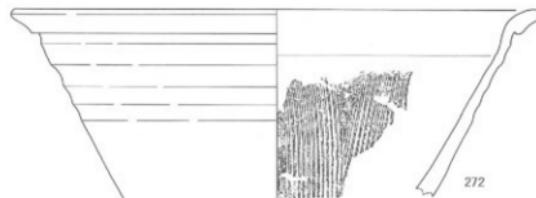
270



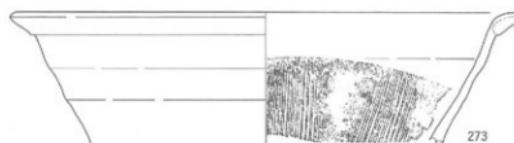
271



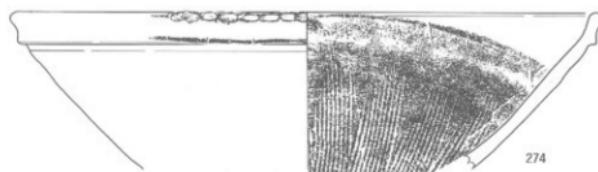
第32図 擻鉢実測図（1／3）



272



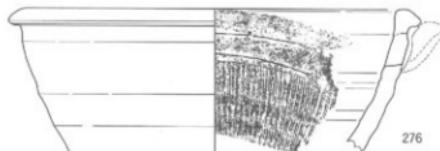
273



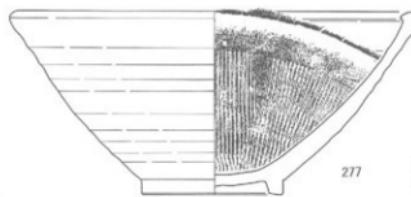
274



275



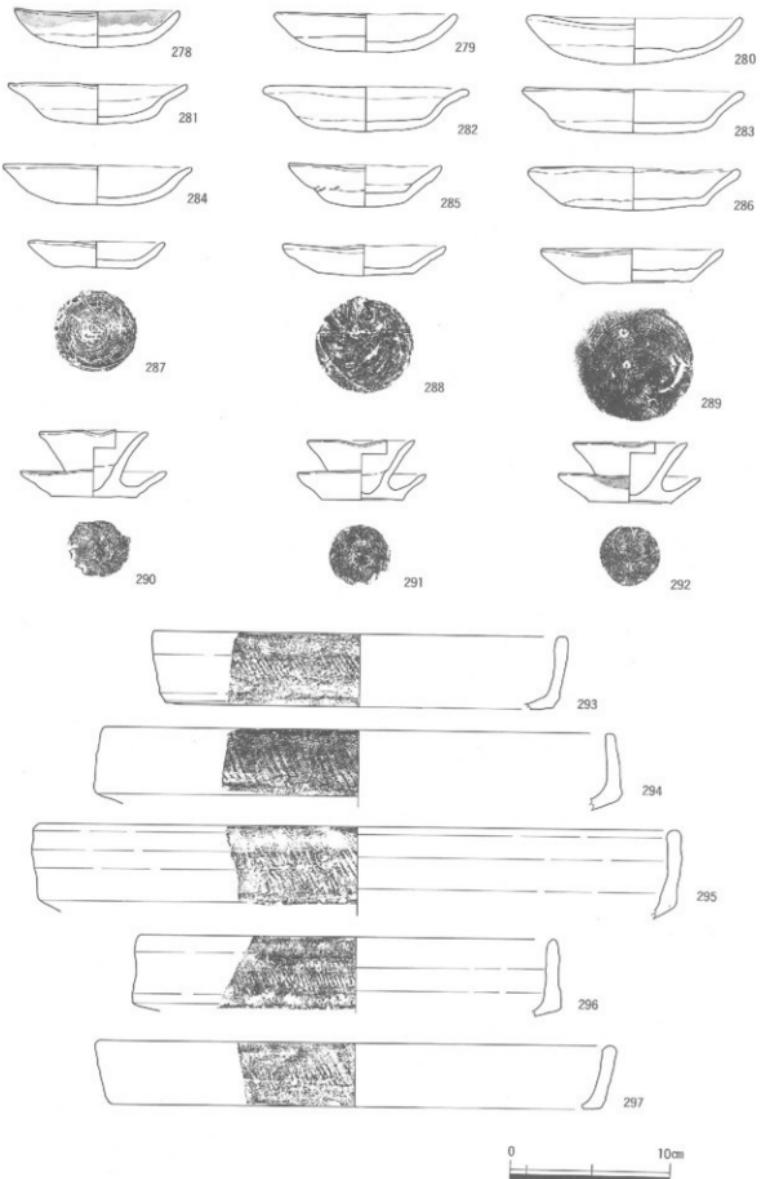
276



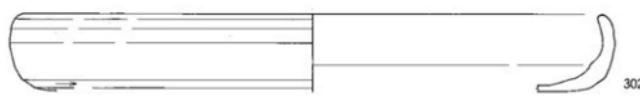
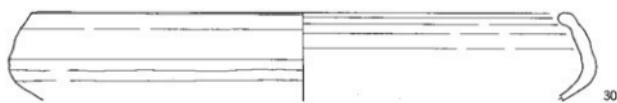
277

0 10cm

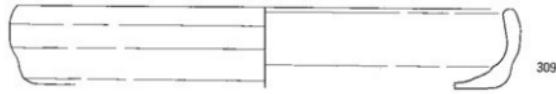
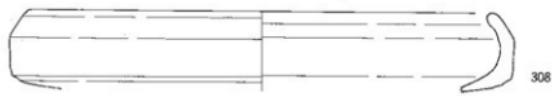
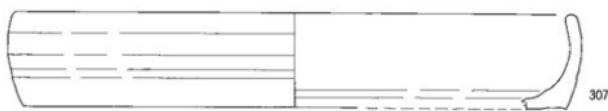
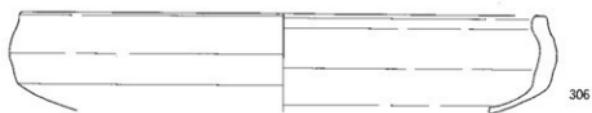
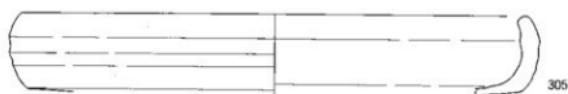
第33図 標鉢実測図 (1 / 3)



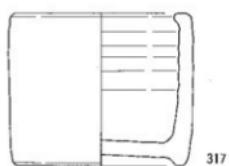
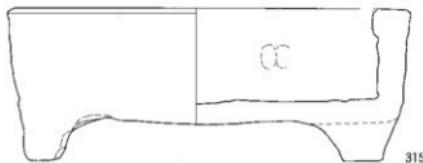
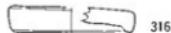
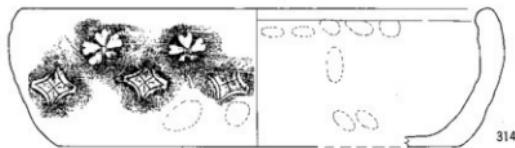
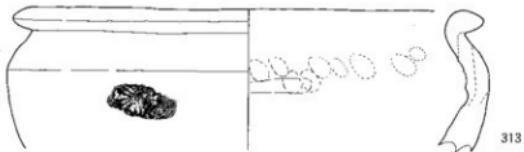
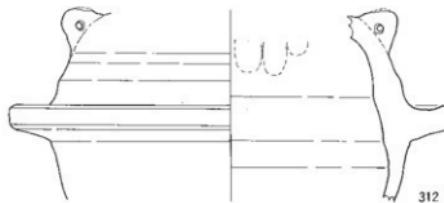
第34図 かわらけ・灯明皿・焰烙実測図 (1 / 3)



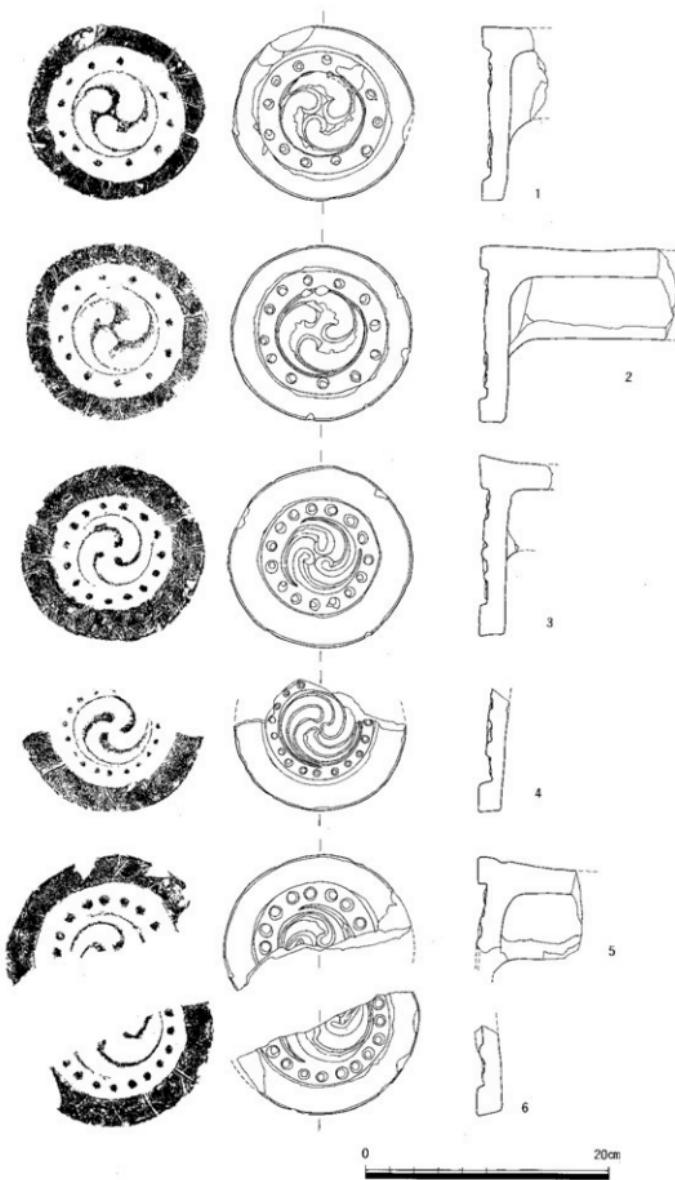
第35図 焼烙実測図 (1 / 3)



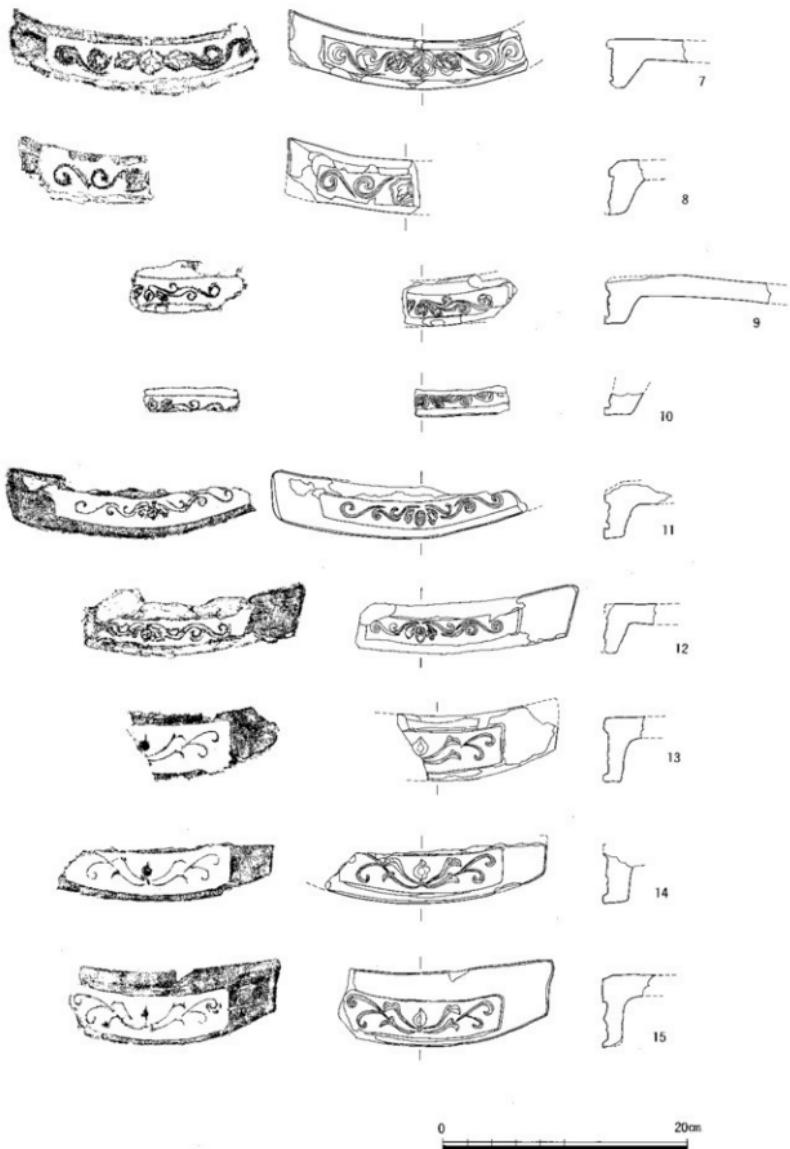
第36図 焰烙実測図 (1 / 3)



第37図 瓦質土器・その他の土器実測図（1／3）



第38図 軒丸瓦実測図 (1/4)



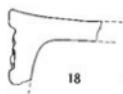
第39図 軒平瓦実測図 (1 / 4)



16



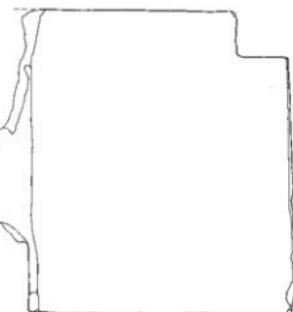
17



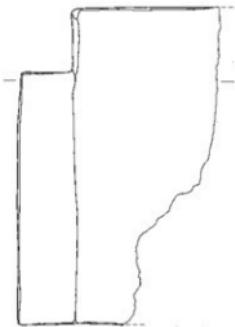
18



19



20

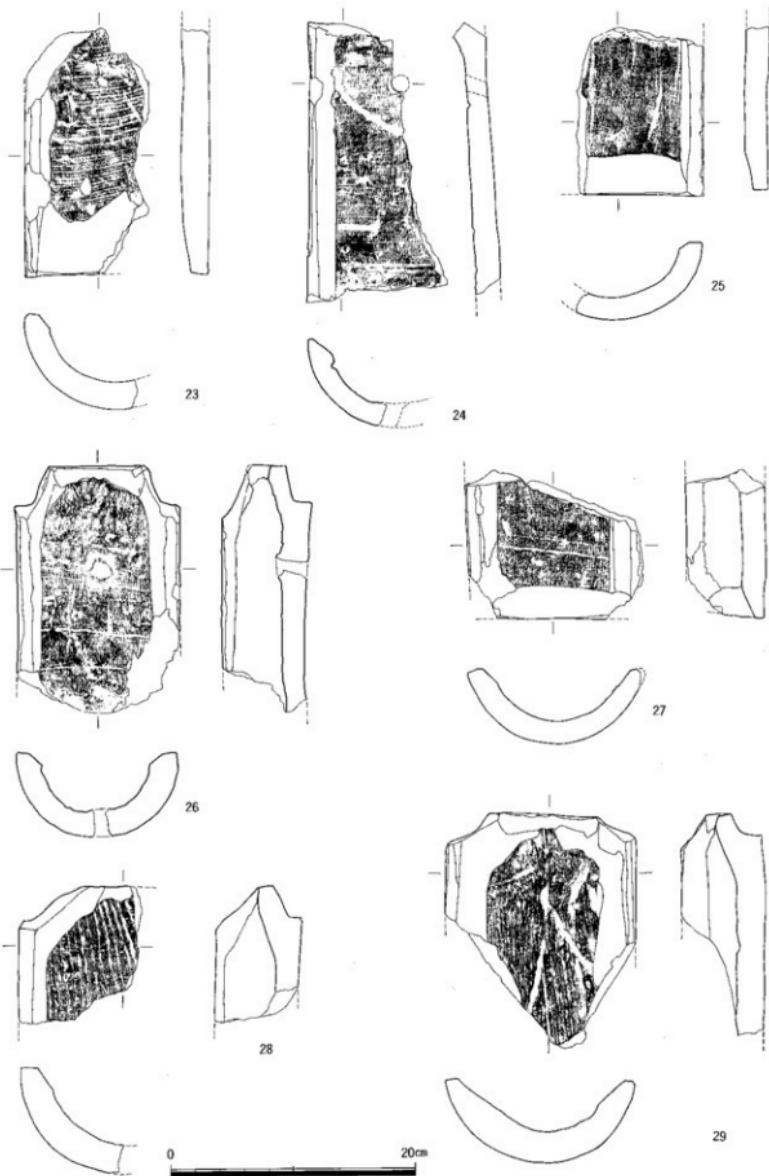


21

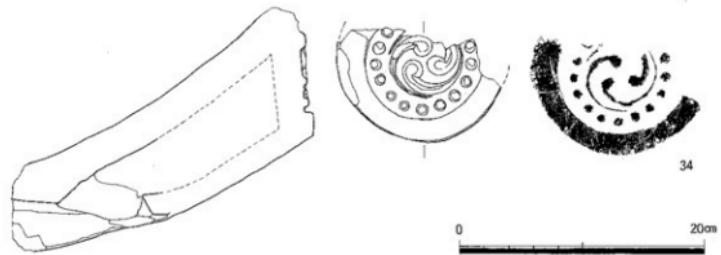
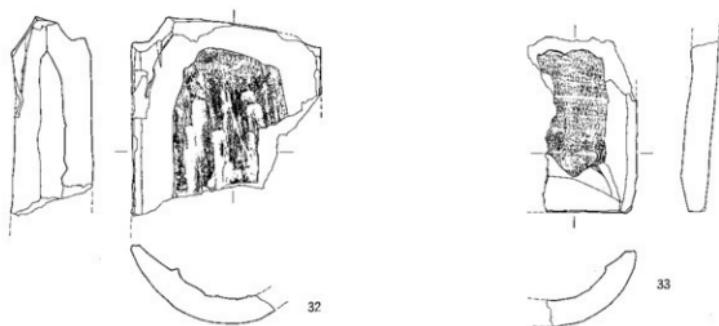
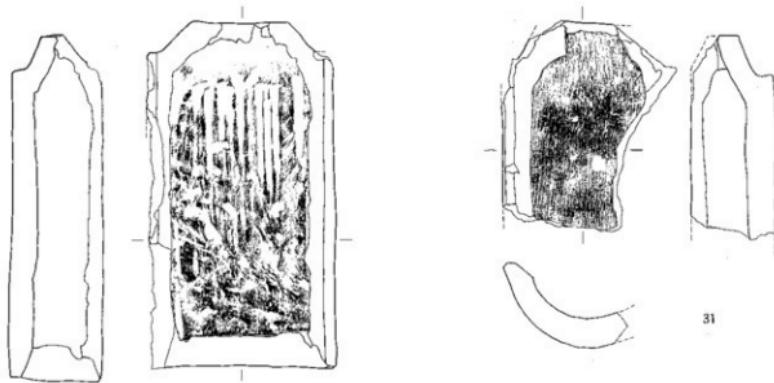


22

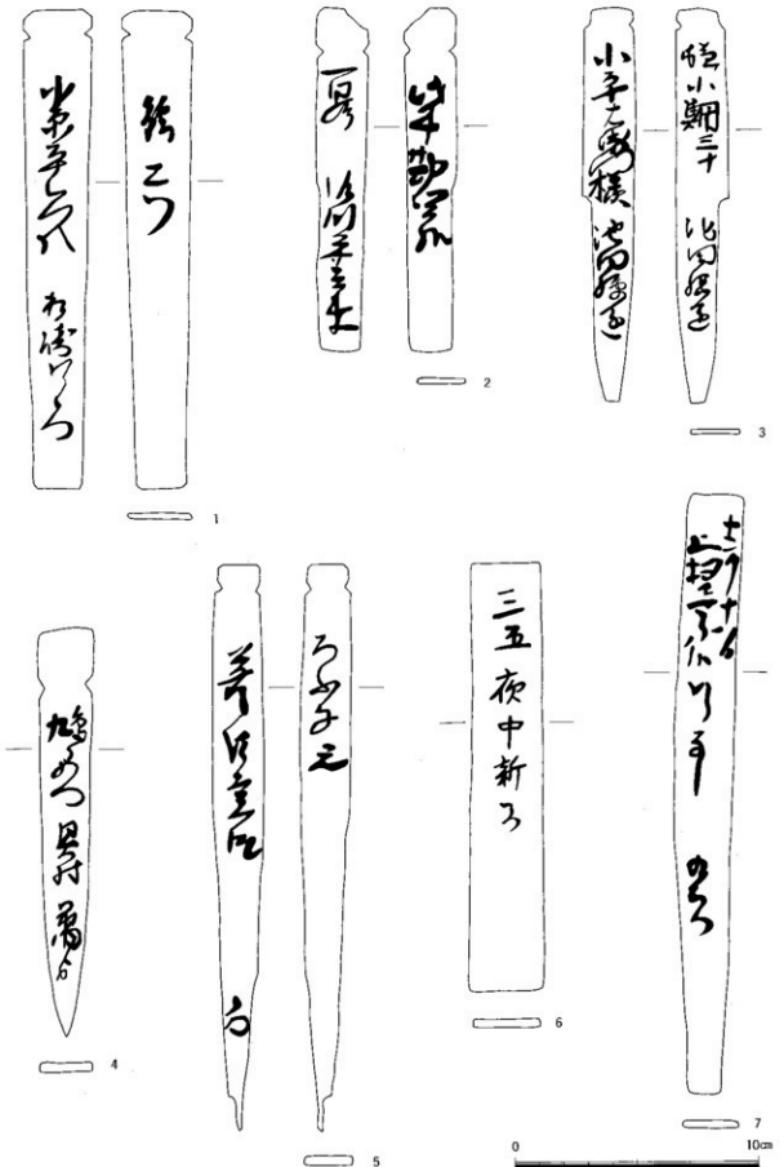
第40図 軒棧瓦・棧瓦実測図 (1/4)



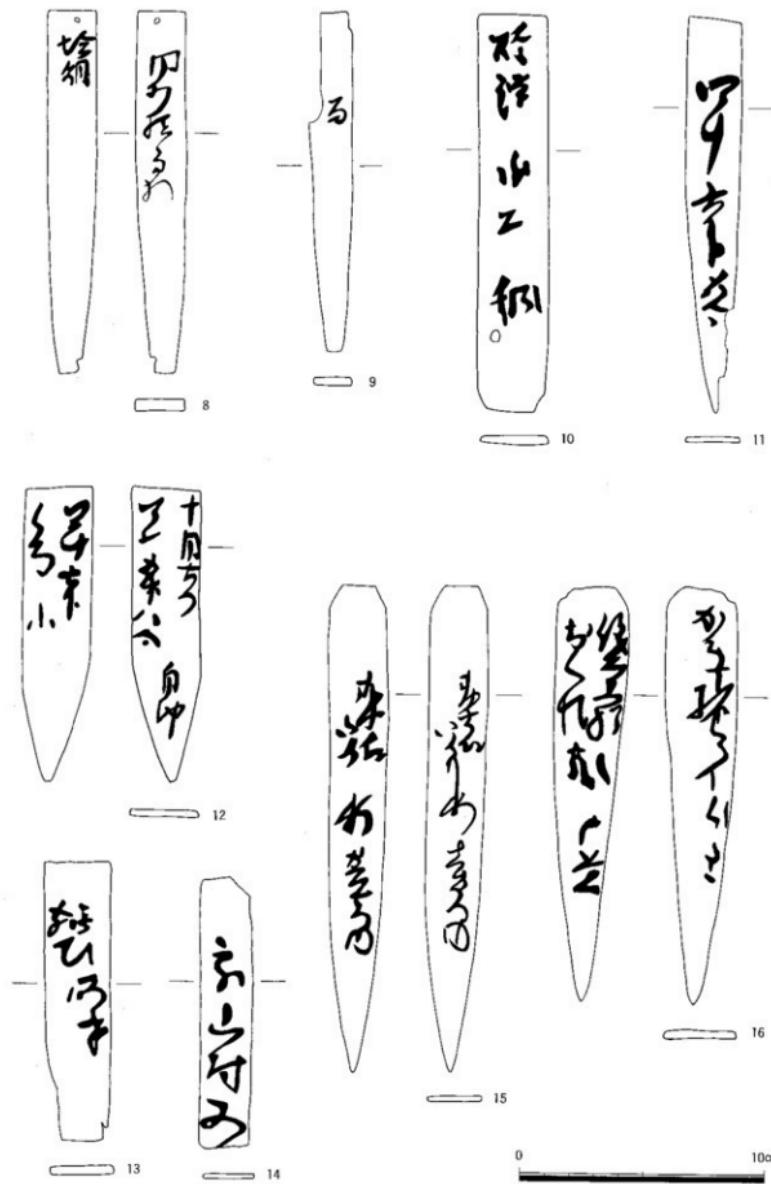
第41図 丸瓦実測図 (1/4)



第42図 丸瓦・鳥衾実測図 (1/4)



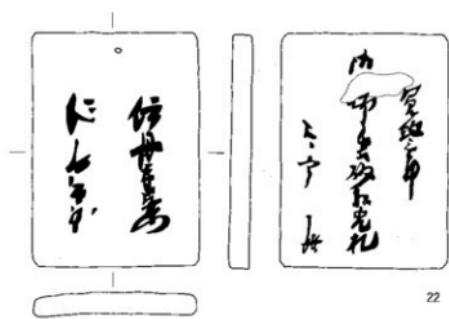
第43図 木簡実測図 (1 / 2)



第44図 木簡実測図 (1 / 2)

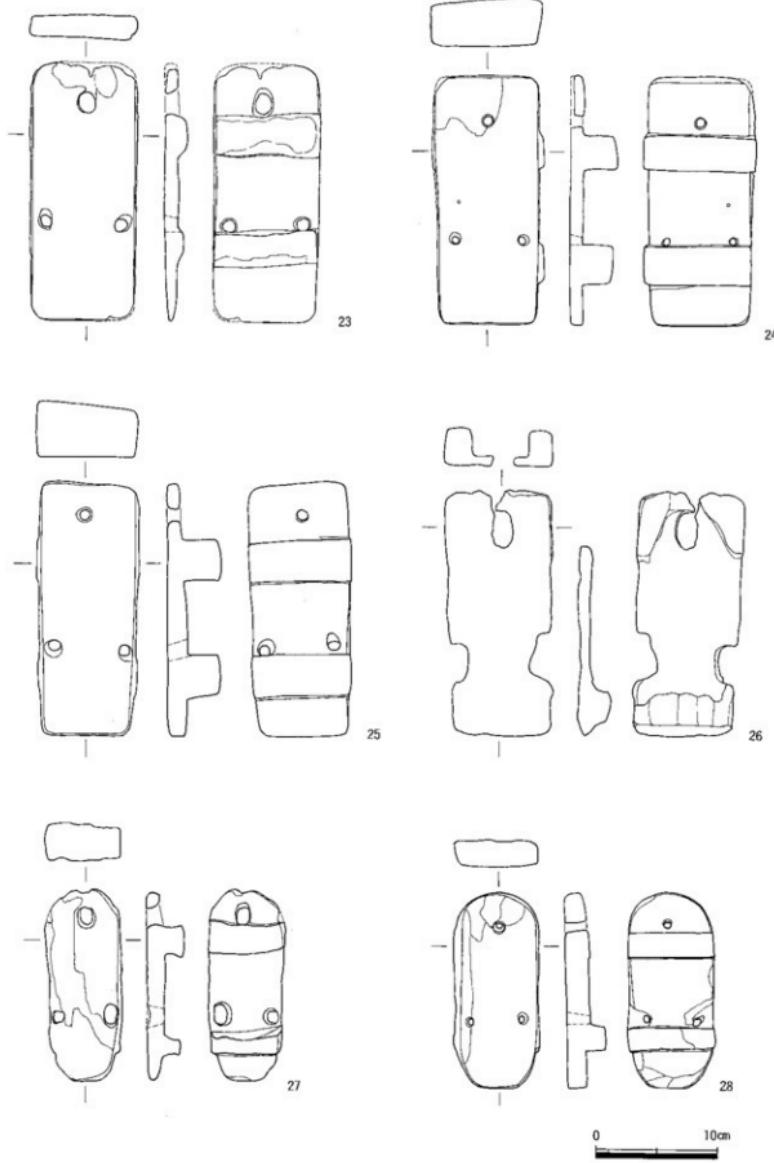


0 10cm

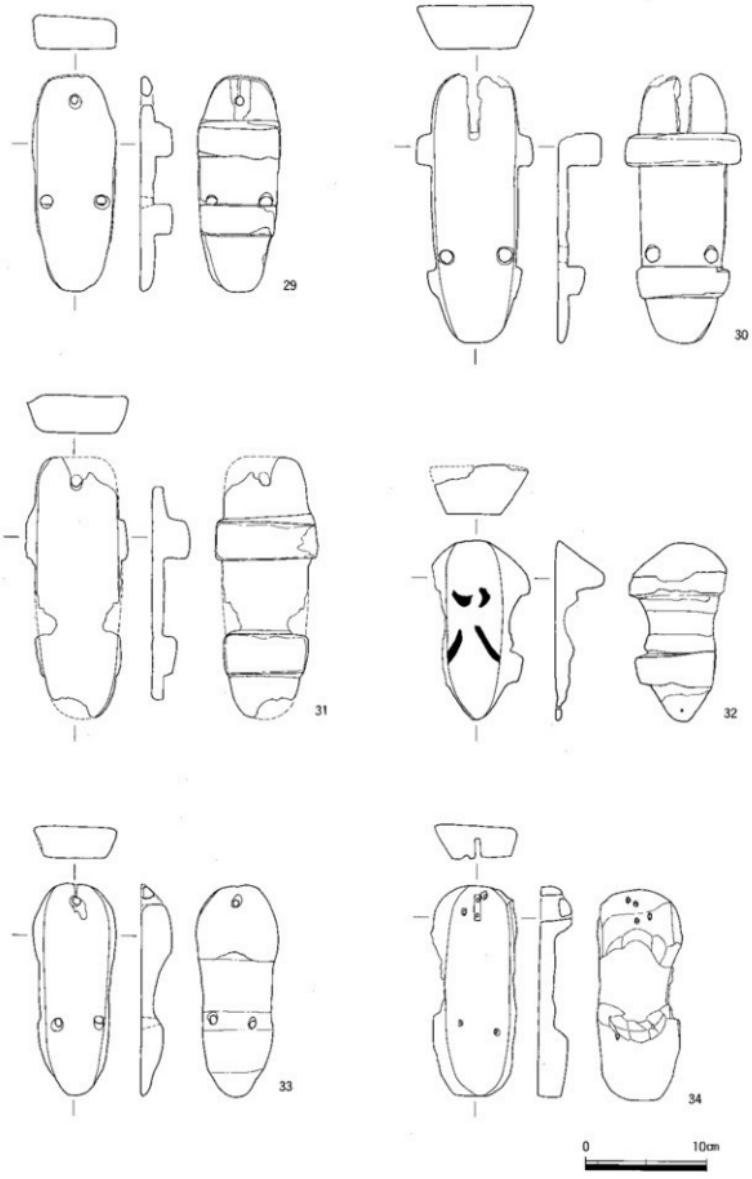


0 10cm

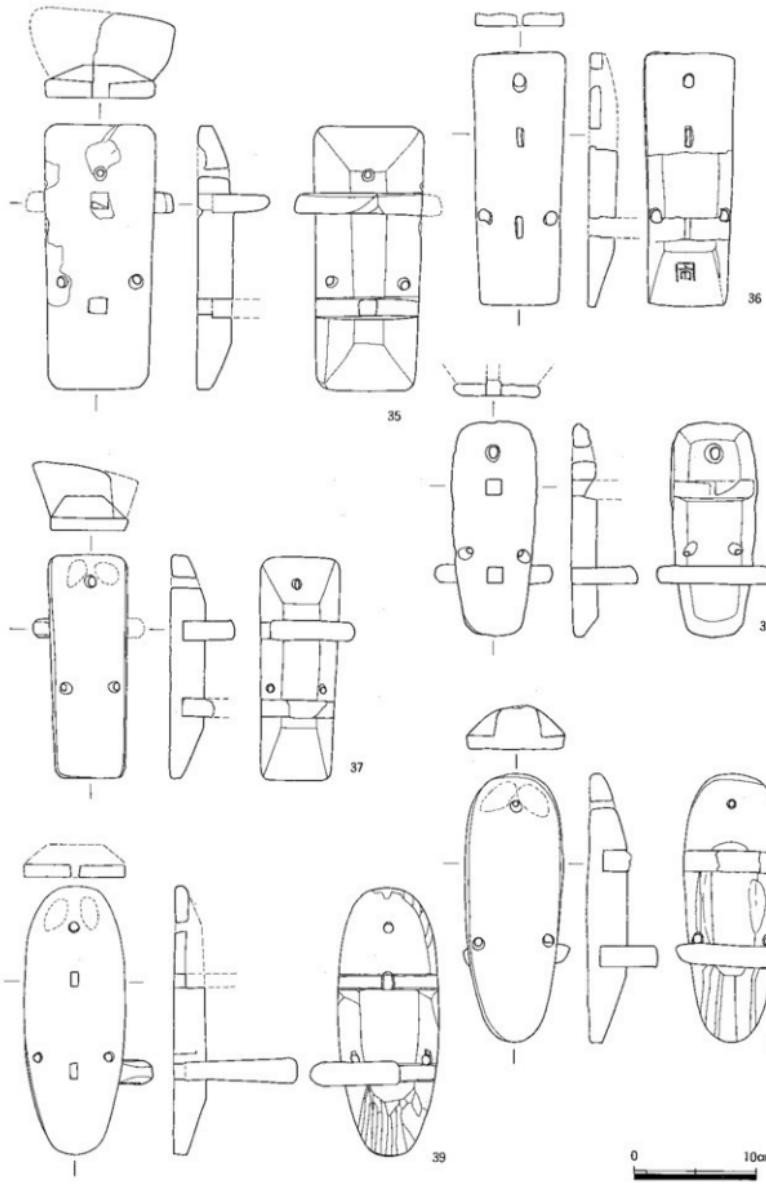
第45図 木簡・木札実測図 (1/2、1/3)



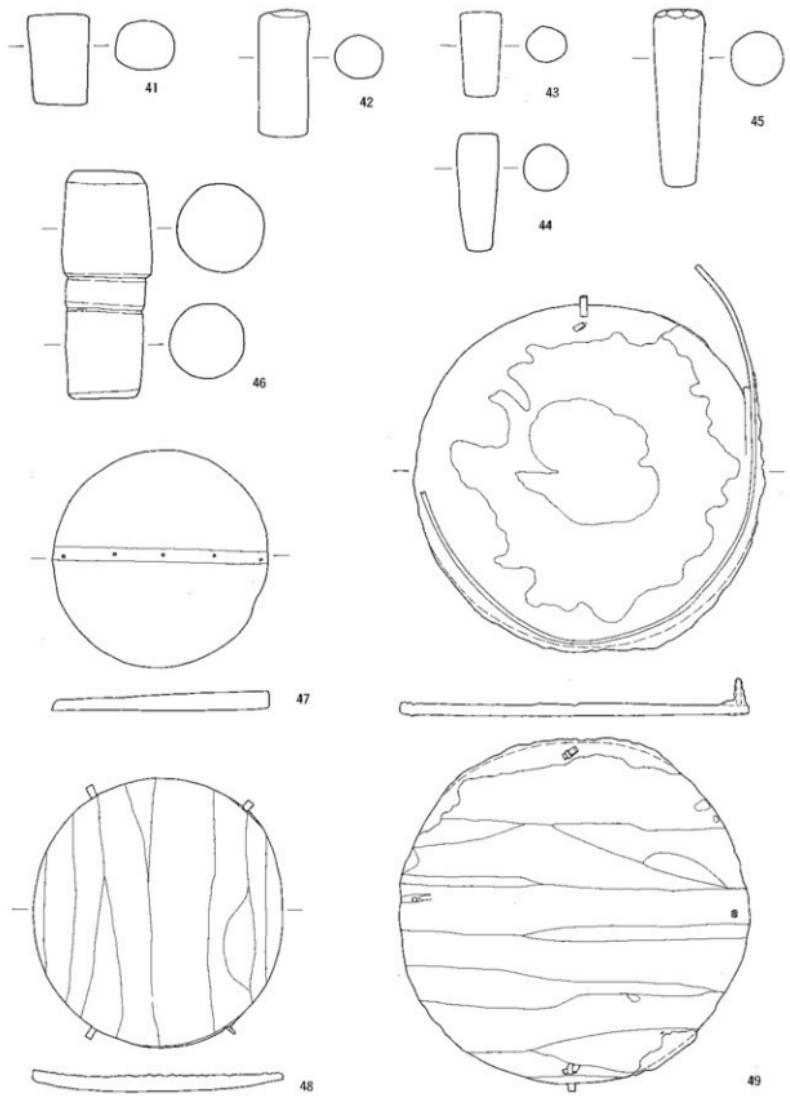
第46図 下駄実測図 (1 / 4)



第47図 下駄実測図 (1 / 4)

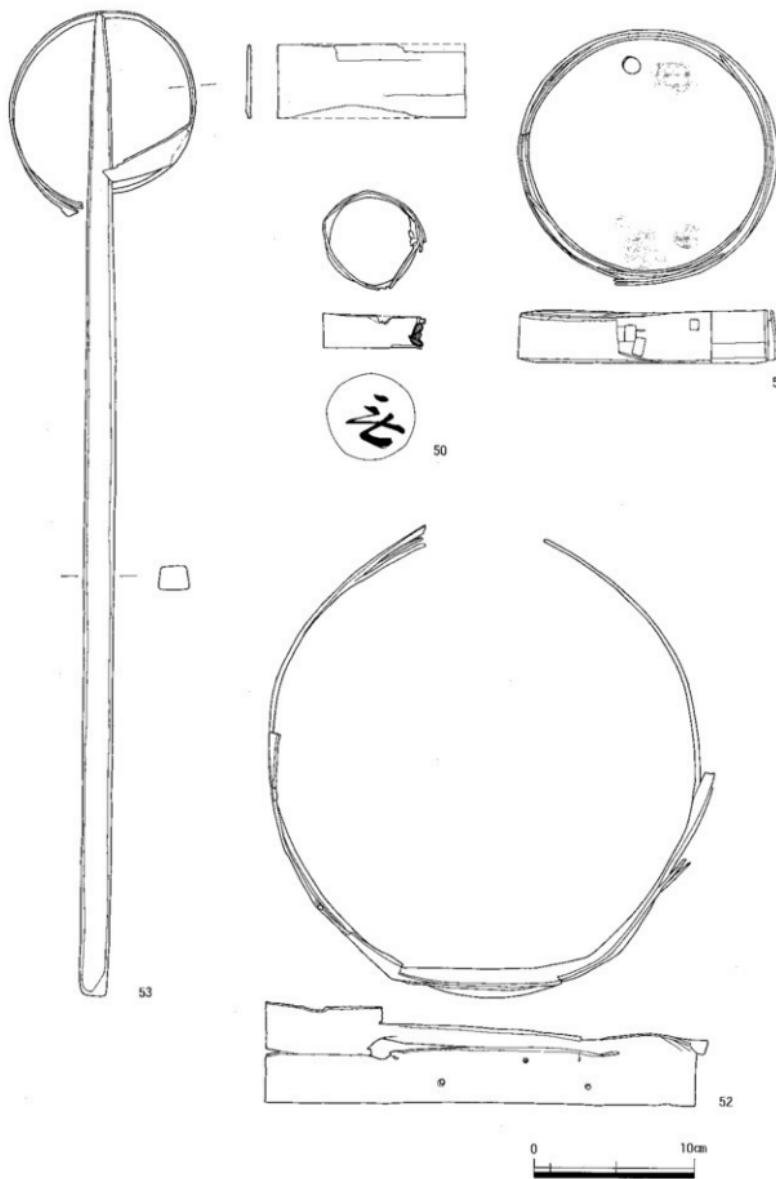


第48図 下歀実測図 (1 / 4)

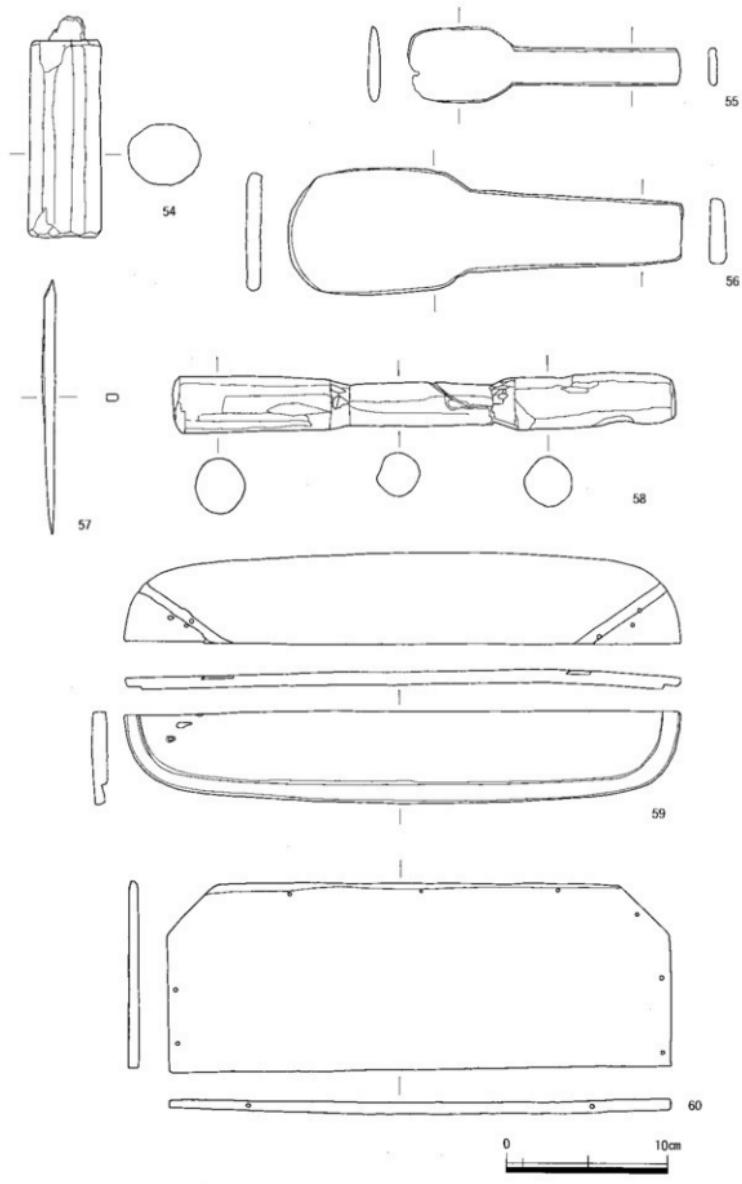


0 10cm

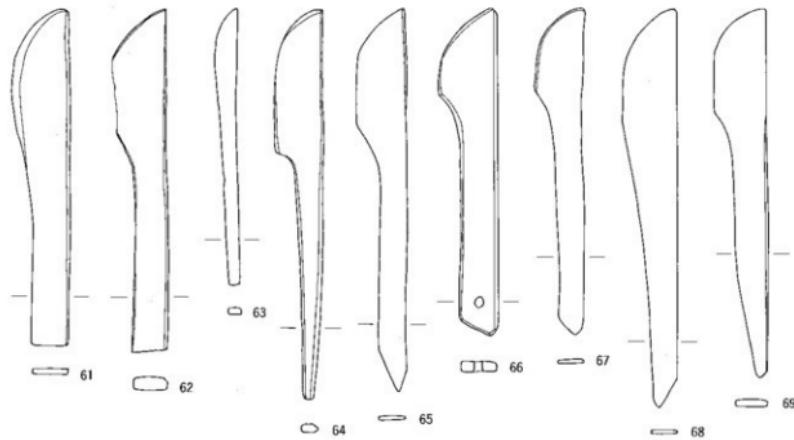
第49図 桁・鍋蓋・曲物実測図 (1 / 3)



第50図 曲物・柄杓実測図 (1 / 3)



第51図 庵丁・箒・楊枝・杵・折敷・盆実測図（1／3）

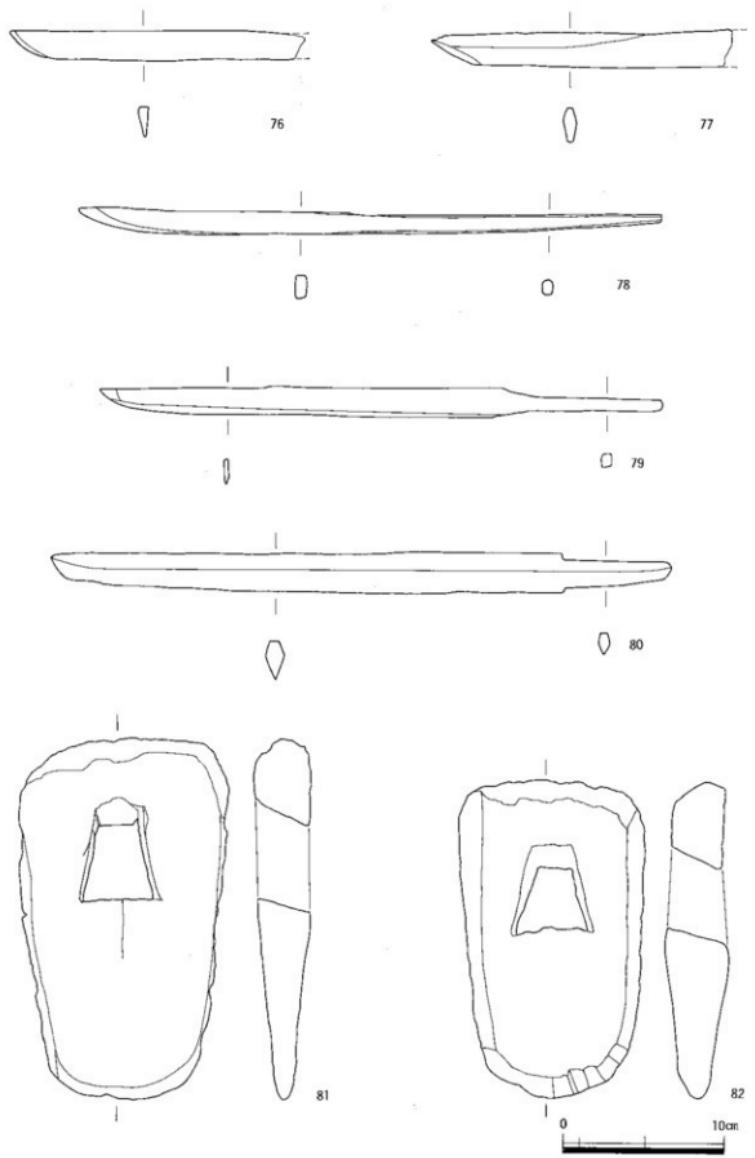


0 10cm

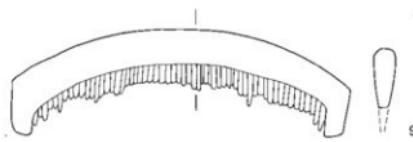
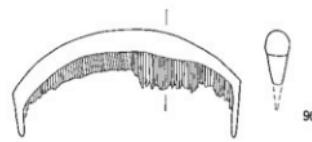
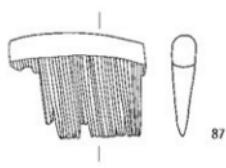
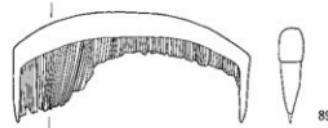
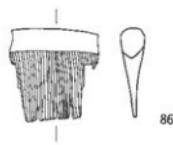
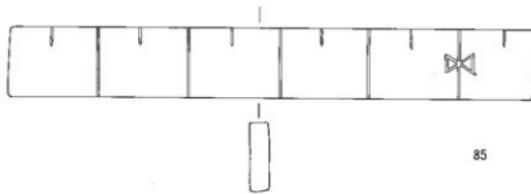
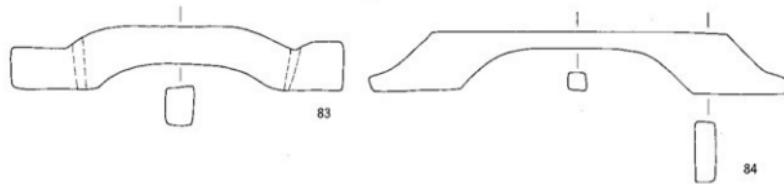


0 10cm

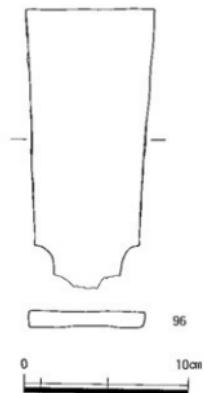
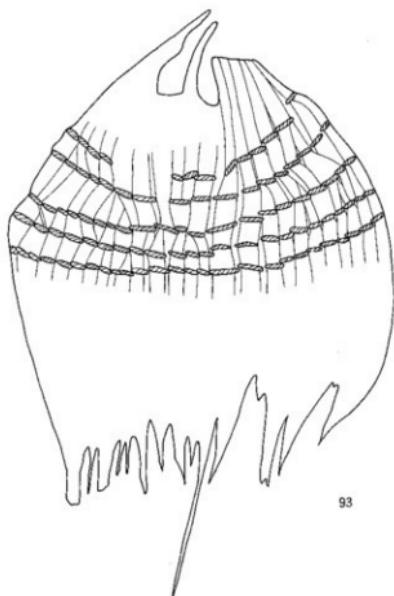
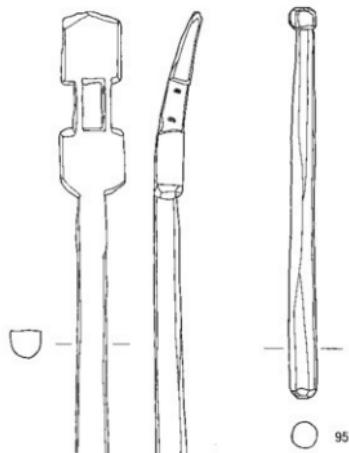
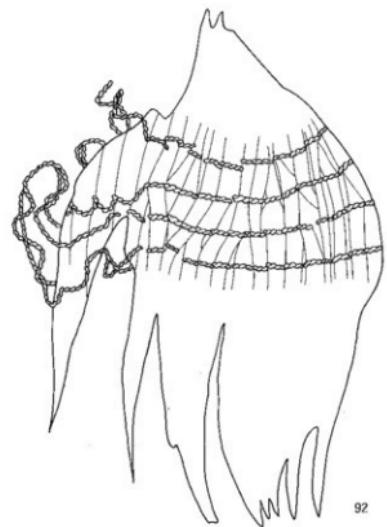
第52図 切匙・箸実測図 (1/3、1/2)



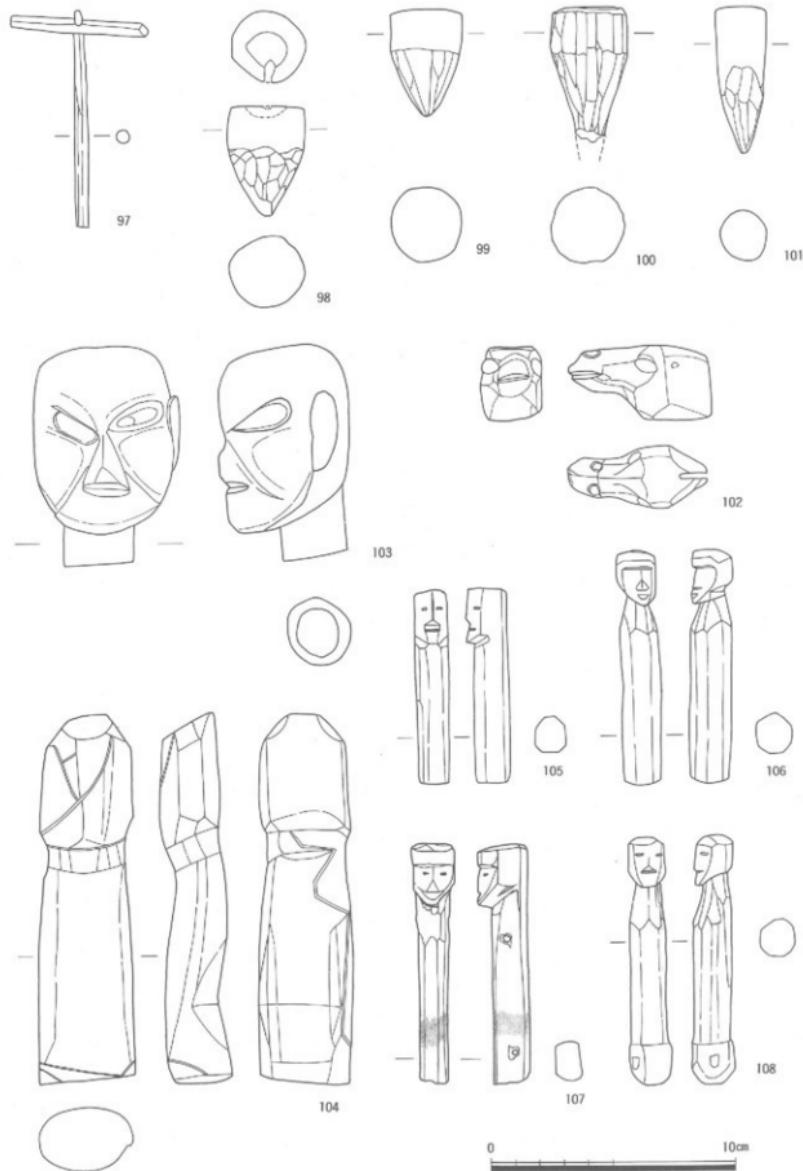
第53図 木刀・鎌実測図 (1 / 3)



第54図 把手・ものさし・櫛実測図 (1 / 2)



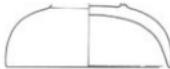
第55図 ほうき・三味線・撥・羽子板実測図 (1 / 3)



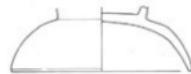
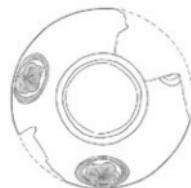
第56図 竹とんぼ・独楽・人形実測図 (1 / 2)



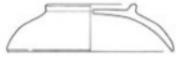
1



2



3



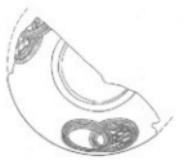
4



5



6



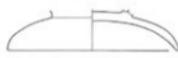
7



8



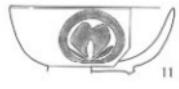
9



10



第57図 漆器実測図 (1 / 3)



11



12



13



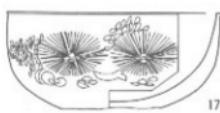
14



15



16



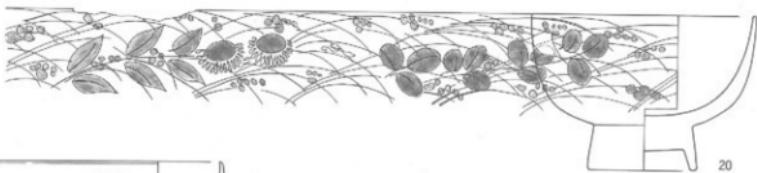
17



18



19



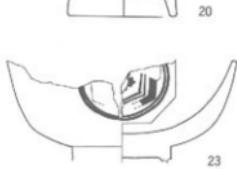
20



21



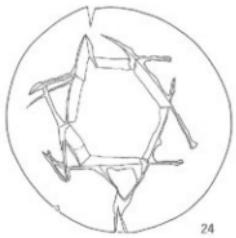
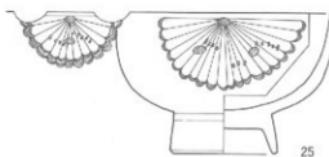
22



23



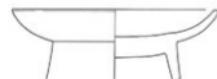
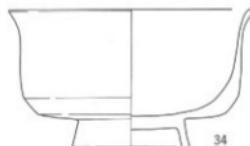
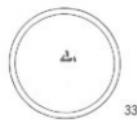
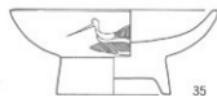
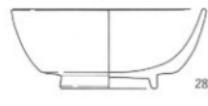
25



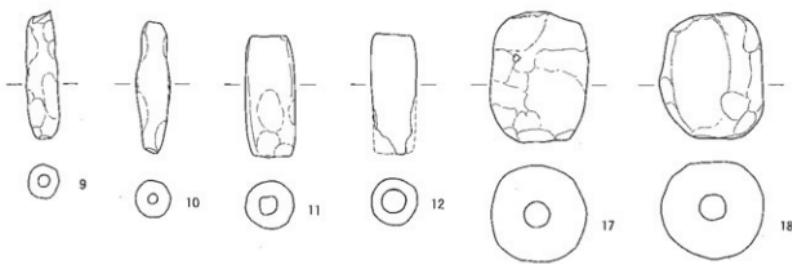
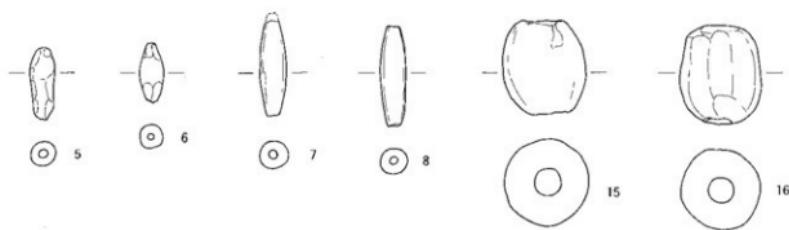
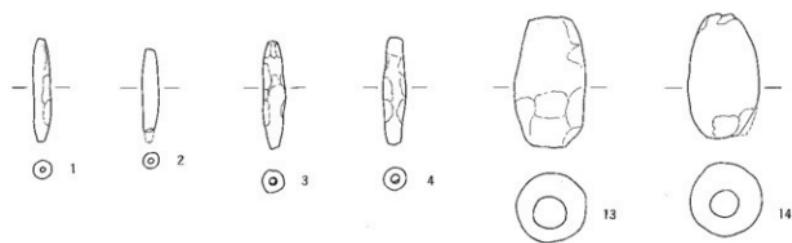
26



第58図 漆器実測図 (1 / 3)

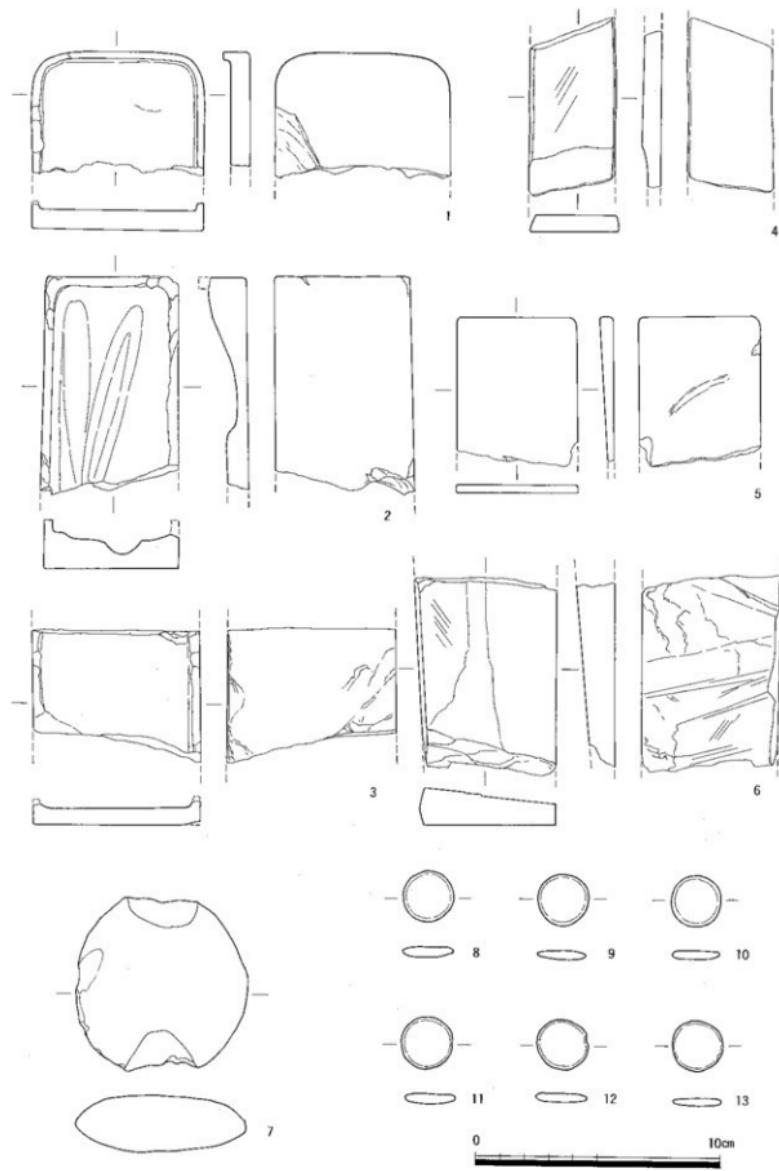


第59図 漆器実測図 (1 / 3)

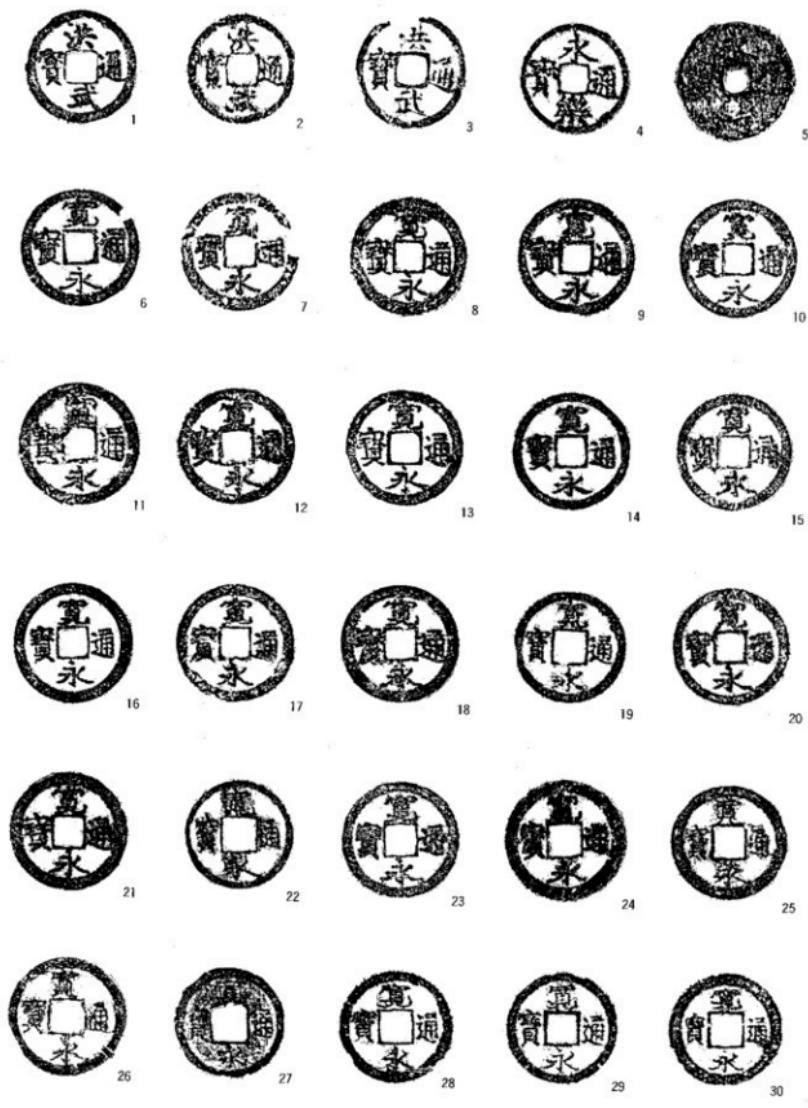


0 10cm

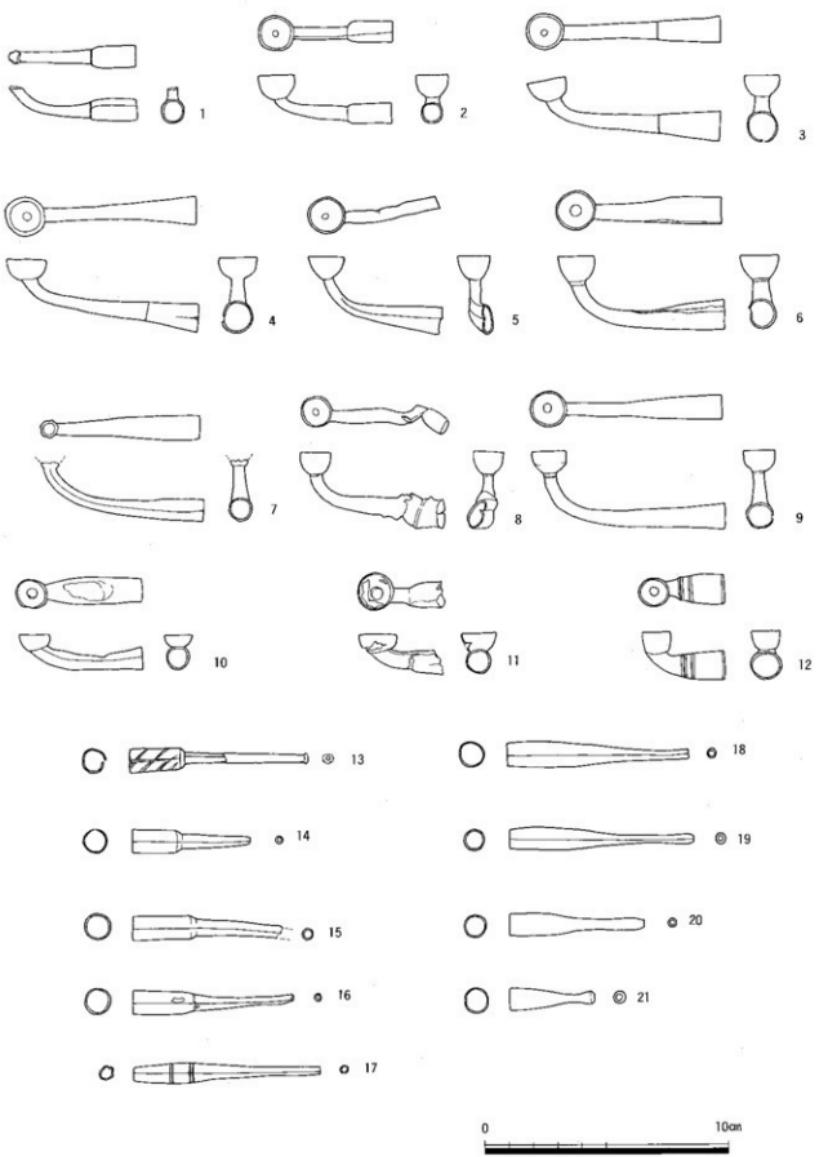
第60図 土鍤実測図 (1/2)



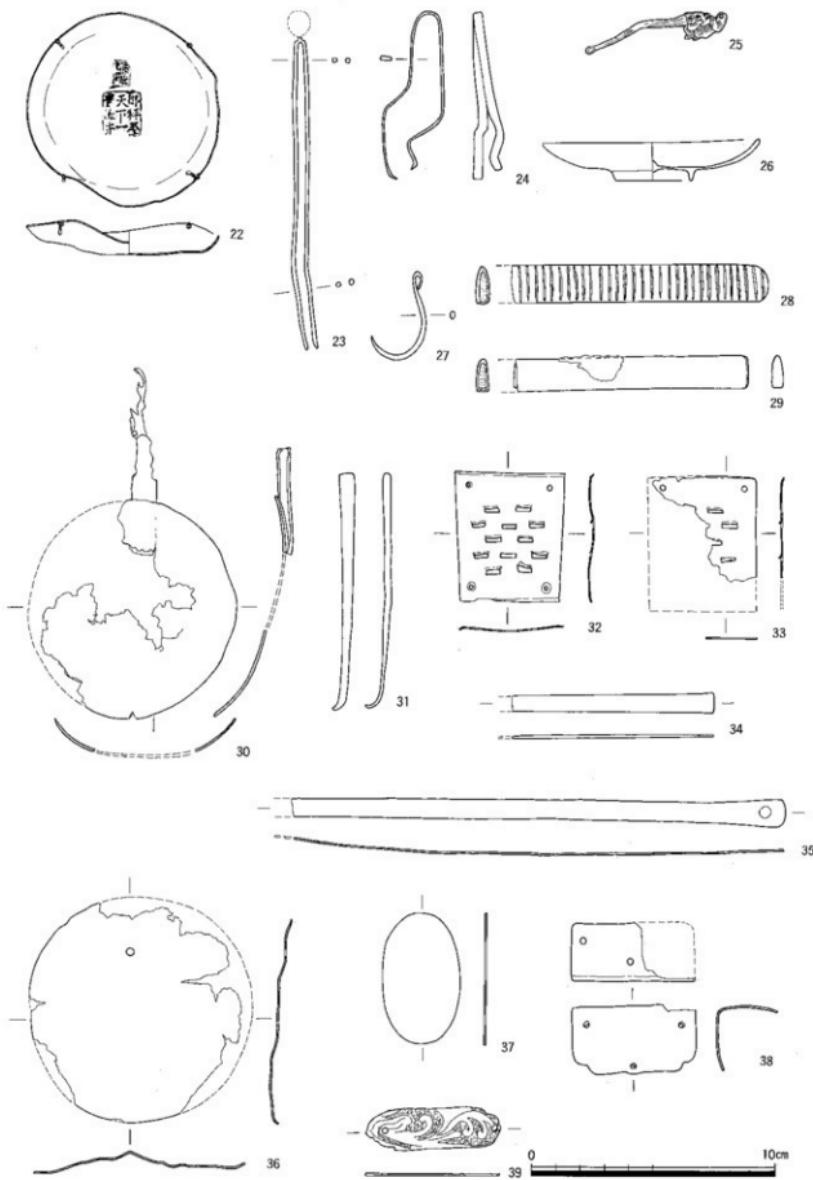
第61図 石製品実測図 (1 / 2)



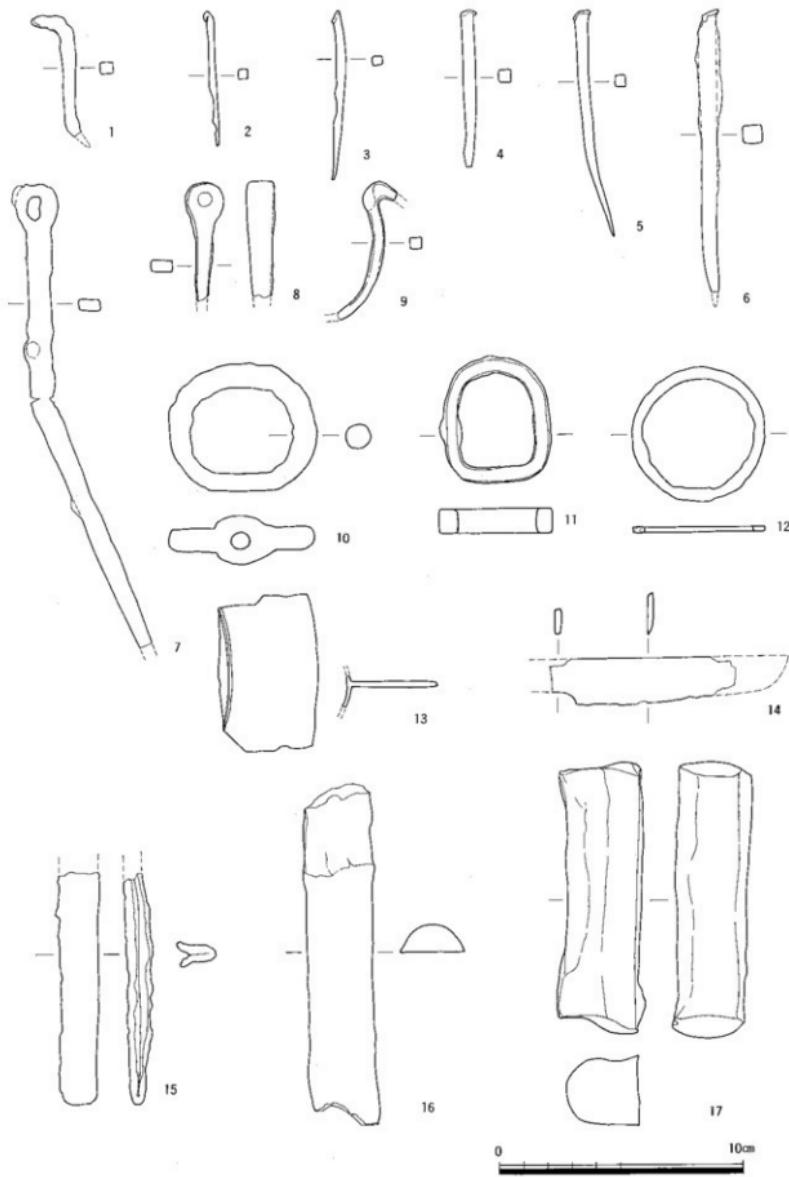
第62図 古銭拓影図（1／1）



第63図 煙管実測図 (1 / 2)



第64図 銅製品実測図 (1 / 2)



第65図 鉄製品実測図 (1 / 2)

6 まとめ

今回の調査では城下町の形成と武家屋敷の整備についての知見を得ることができた。また、多量に出土した陶磁器、木製品から当時の生活を伺い知ることができる。以下、今回の調査で明らかとなつたことを簡潔にまとめたい。

- 1 屋敷整備以前の第8層からは初期伊万里、古い段階の唐津が出土しているが、17世紀以前の陶磁器、土器はほとんど出土しておらず、前時代とのつながりが認められない。当地域周辺は江戸時代に入って新たに開発されたものと思われる。
- 2 城下町の形成については文献では寛永9年（1632年）には町割りがほぼ完成していたとあるが、これは城下町の街路が整備され、中海に近い地域の屋敷が整備されただけのもので、その他の地域は街区は形成されていたであろうが、個々の屋敷地については整備されておらず、当遺跡のように旧状を呈していた場所もあったものと思われる。
しかし、当遺跡は城の正門に近く、城下町のメインストリートに面する位置にありながら、屋敷の整備が遅れたのは疑問である。
- 3 調査地は17世紀にはほぼ全域が湿地であった。武家屋敷が整備されるのは17世紀後半～18世紀前半に整地（第5層）が行われてからであろう。しかし、当初は屋敷地全域は整地されておらず、屋敷地の裏側は整地がなされず湿地のままである。まづ、建物の部分だけを整地して屋敷の体裁を整えた後、裏側も整地したものと考えられる。
- 4 SD-04は宝永6年（1709年）と享保5年（1720年）の絵図の伊木小治郎と臼井金右エ門の屋敷の境界に位置する。このような屋敷境界を示すと思われる溝は時期は異なるが、米子城跡7遺跡、米子城跡9遺跡でも検出されており、米子城跡7遺跡では幅8.6m、米子城跡9遺跡では幅3.6～4.8mもあり、単に屋敷境界を示すだけのものであるとは考えにくく、用水路、運河の性格も兼ねそろえていた可能性がある。SD-04は両岸にしがらみが築かれ、臼井の屋敷に水を引き入れる堰も設けられており、用水路としての性格が考えられる。
- 5 SD-04は宝永6年と享保5年の絵図には描かれていない。SD-04は幅4m以上もある大きな水路であるのでよほどの理由がないかぎり削除はされないであろう。SD-04からは17世紀後半以降の遺物が出土しており、絵図が描かれる前に存在していたのは確実である。内堀沿いは他藩領人の出入りが禁止されていたので機密上描かれてなかつたのであろうか。
- 6 SD-04は幕末になると水路としての必要性がなくなったのであろうか、浚渫されることもなくなり、SD-04内に築かれた堰の上流にはヘドロ、流木がたまり、その結果、水路としての機能がなくなつたために堰の下流には多量の瓦が廃棄されている。すでにこの時点では屋敷境界としての意識は失われており、屋敷地を拡大するためにSD-04を埋め立て、この上に整地（第4層）を行い、山本の屋敷が整備される。

表1 木簡・木札訣文及び計測表

番号	出土地	訣文		法量(cm)		
		表	裏	長さ	幅	厚さ
1	第8層	小原平右衛門様 松崎八郎エ門	鰐二つ	20.1	2.8	0.3
2	第8層	佐々木勘兵衛様	□□ □川平兵衛	14.4	2.2	0.3
3	第8層	小原右衛門様 池田孫之進	塙小鶴三十 池田孫之進	16.5	2.1	0.2
4	第8層	鳩五つ 奥村萬衛門		17.2	2.4	0.4
5	第8層	荒儀太夫殿	ろふと三	23.8	2.1	0.4
6	第8層	三五夜中新月		18.0	3.1	0.4
7	第8層	十二月十八日 上□□様行事 九右衛門		25.2	2.5	0.3
8	第8層	□□	□□□□□	15.3	2.1	0.5
9	第8層	□		(14.4)	2.8	0.4
10	SD-04	□津□□□		16.5	3.0	0.4
11	第8層	四斗六升五合		16.4	2.4	0.2
12	第4層	四斗六升 くろ 小	十月□□ □上五升八合 □□	(11.7)	2.9	0.3
13	第5層	…□□□□		(11.7)	2.9	0.4
14	第8層	新山村又…		(11.4)	2.2	0.2
15	第8層			20.5	2.5	0.3
16	第8層	儀右エ門様 □くれ □□	か□□□□□	(17.4)	3.1	0.4
17	第8層	…□□□□		(11.7)	1.7	0.3
18	第8層	□		(14.6)	2.2	0.3
19	第4層	…□左衛門様 西野三右エ門		(15.8)	2.0	0.3
20	第8層	安右衛門		(11.3)	2.7	0.7
21	第8層	平右衛門様		13.5	1.9	0.8
22	第8層	寛政三年 御□堀□□土砂船免札 □□ 限	伊丹重左衛門 伊木□□	14.3	9.9	1.2

•()内の数字は現存長

•表の番号は挿図の番号に対応する。

図 版



全 景



SD-04



SD-04 しがらみ

図版 2

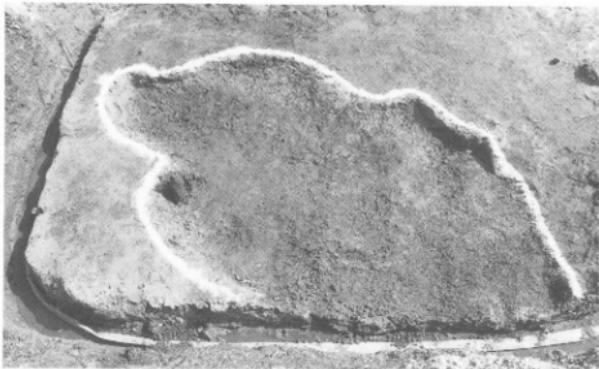




SK-01遺物出土状況



SK-02遺物出土状況

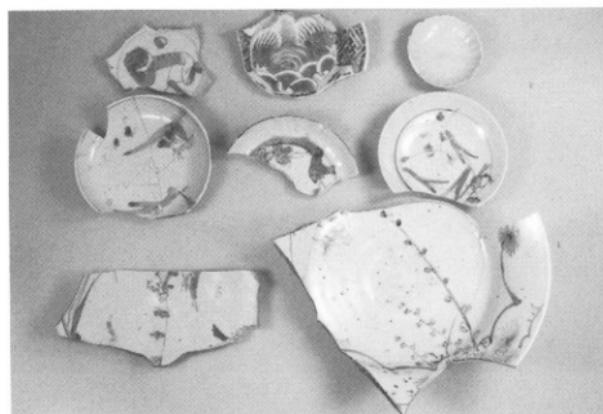


SK-02完掘

図版 4



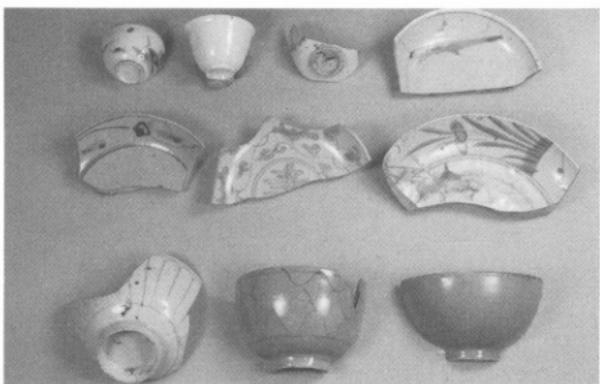
第 8 層出土
伊万里碗



第 8 層出土
伊万里皿



第 8 層出土
伊万里小杯・
紅皿・仏飯器・
瓶



第5層出土伊万里



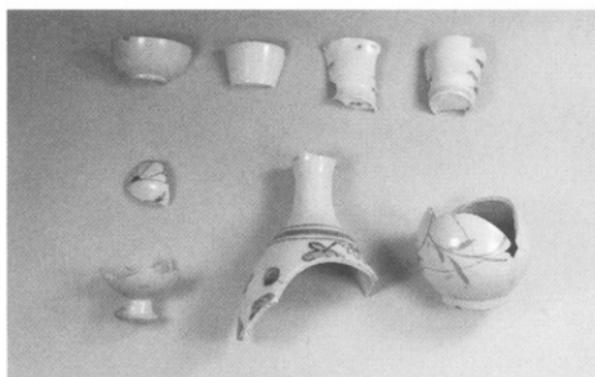
SD-04出土
伊万里碗



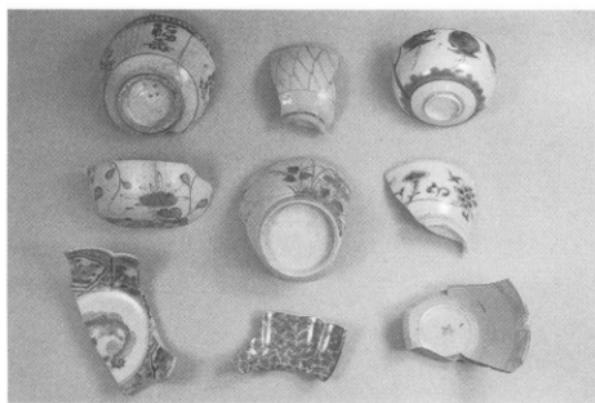
SD-04出土
伊万里蓋・鉢
段重・皿

図版 6

SD-04出土
伊万里小杯・
そば猪口・
仏舎器・瓶

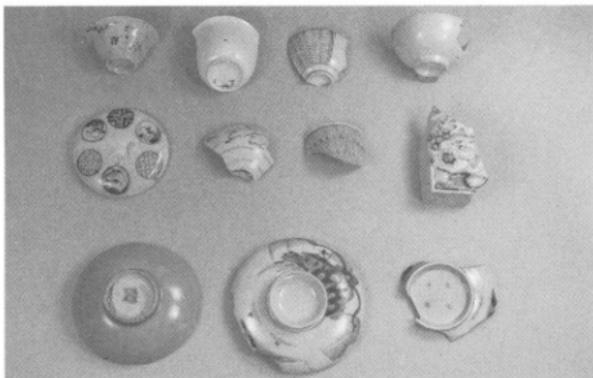


第4層出土
伊万里碗・鉢



第4層出土
伊万里皿

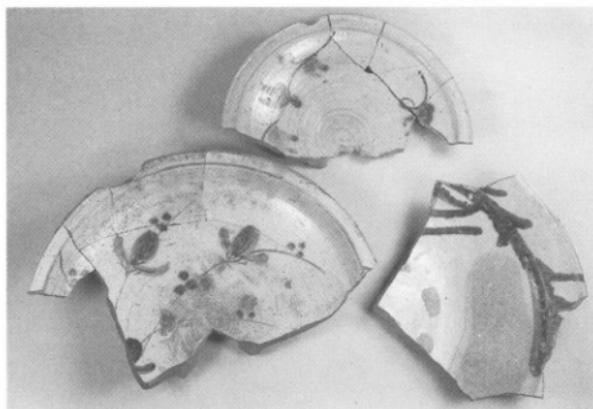




第4層出土
伊万里小碗・仏瓶器
そば猪口・水滴・蓋



第8層出土
唐津皿



第8層出土
唐津皿

図版 8



第 8 層出土
唐津碗



第 8 層出土
唐津・織部
志野・備前



第 5 層出土陶器



SD-04出土
唐津皿・陶器蓋



SD-04出土陶器
碗・油徳利・仏花瓶
徳利・壺



SD-04出土陶器
壺・壺

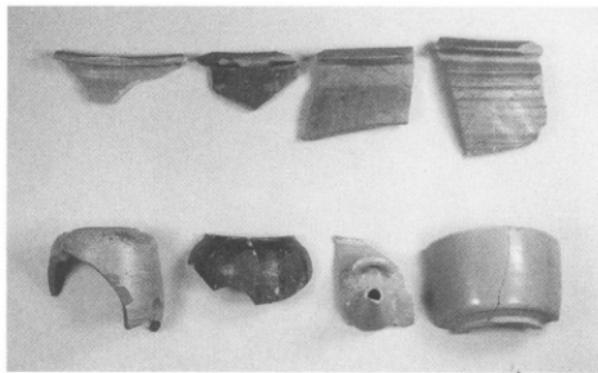
図版10



第4層出土陶器
碗



第4層出土陶器
皿・鉢



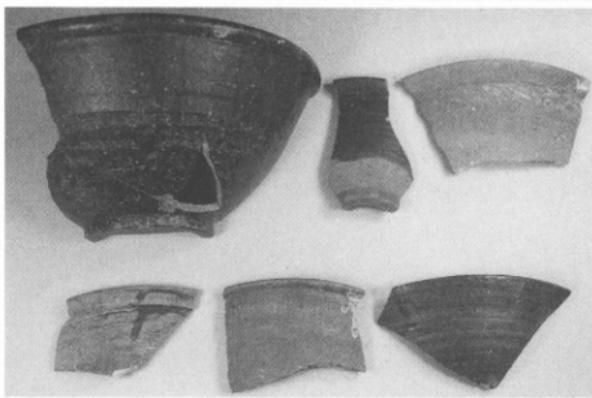
第4層出土陶器
甕・壺・土瓶・
火入



擂鉢（備前）

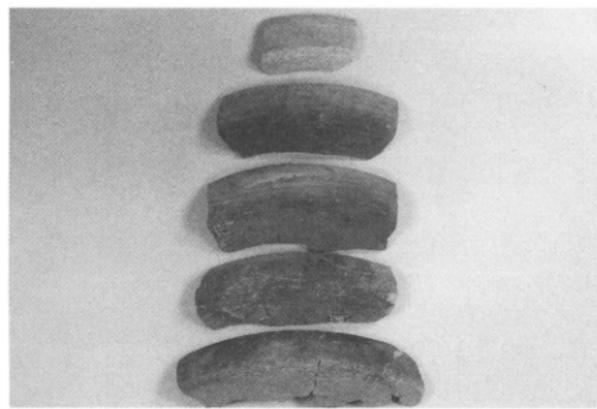
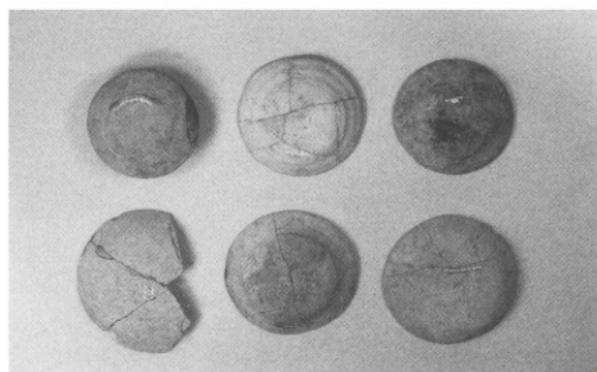
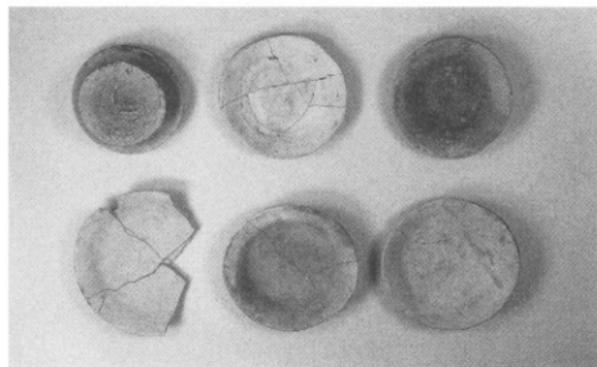


擂鉢（唐津系）



擂鉢

図版12





羽釜・火入
火鉢・焼塩壺



軒丸瓦



軒平瓦 (A類)

図版14



軒平瓦（B－1類）



軒平瓦（B－2類）



軒平瓦（C類）



軒棟瓦

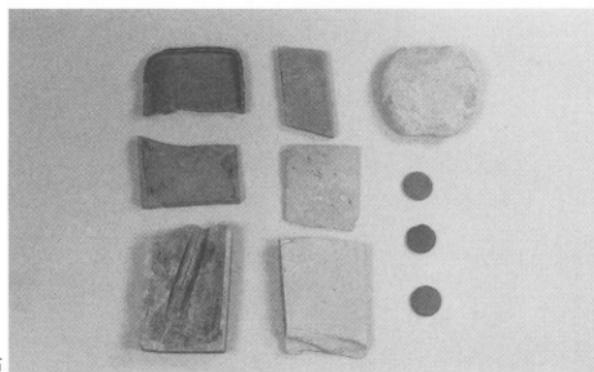


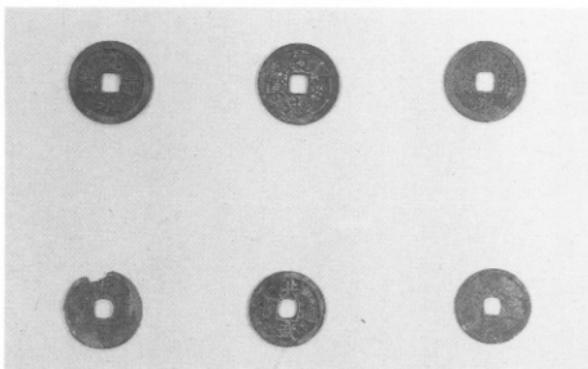
軒棟瓦



軒棟瓦

図版16

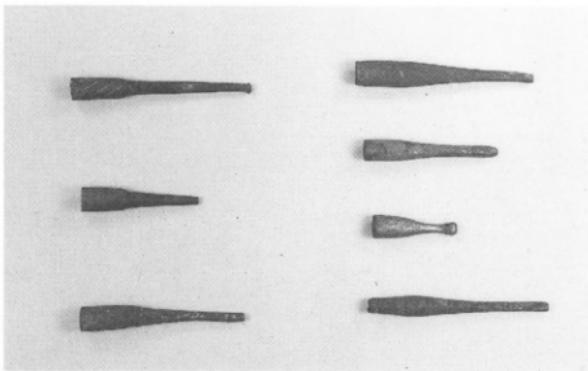




古銭

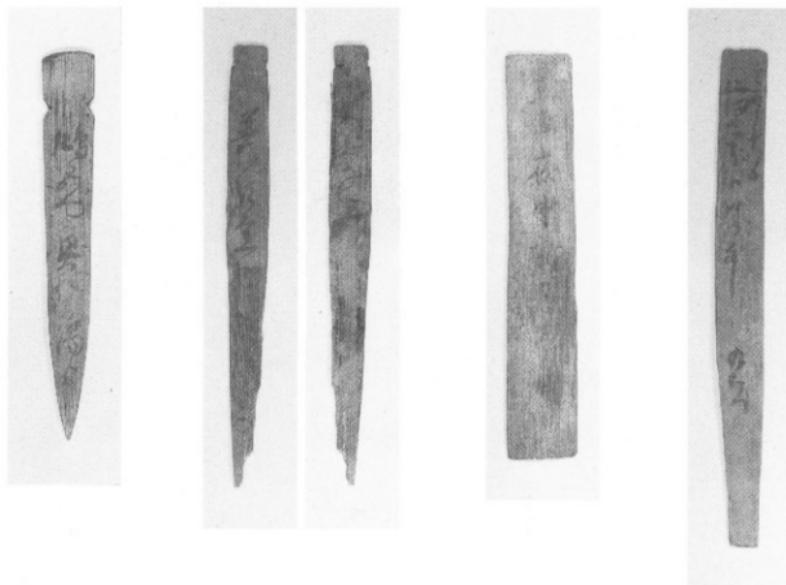
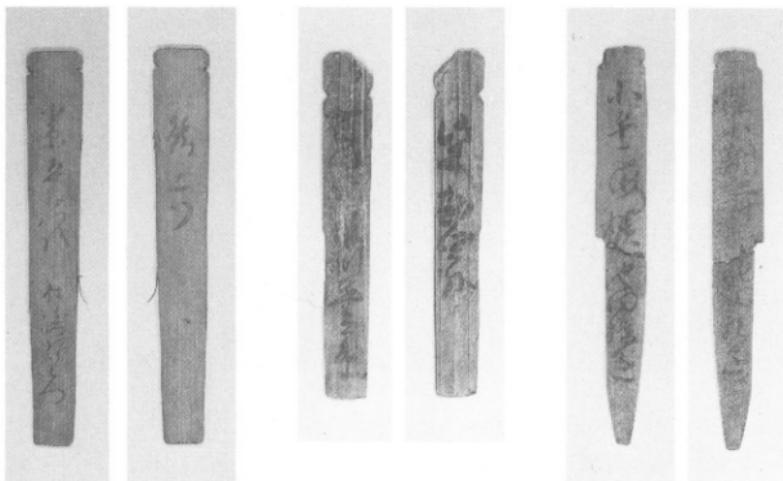


煙管（雁首）

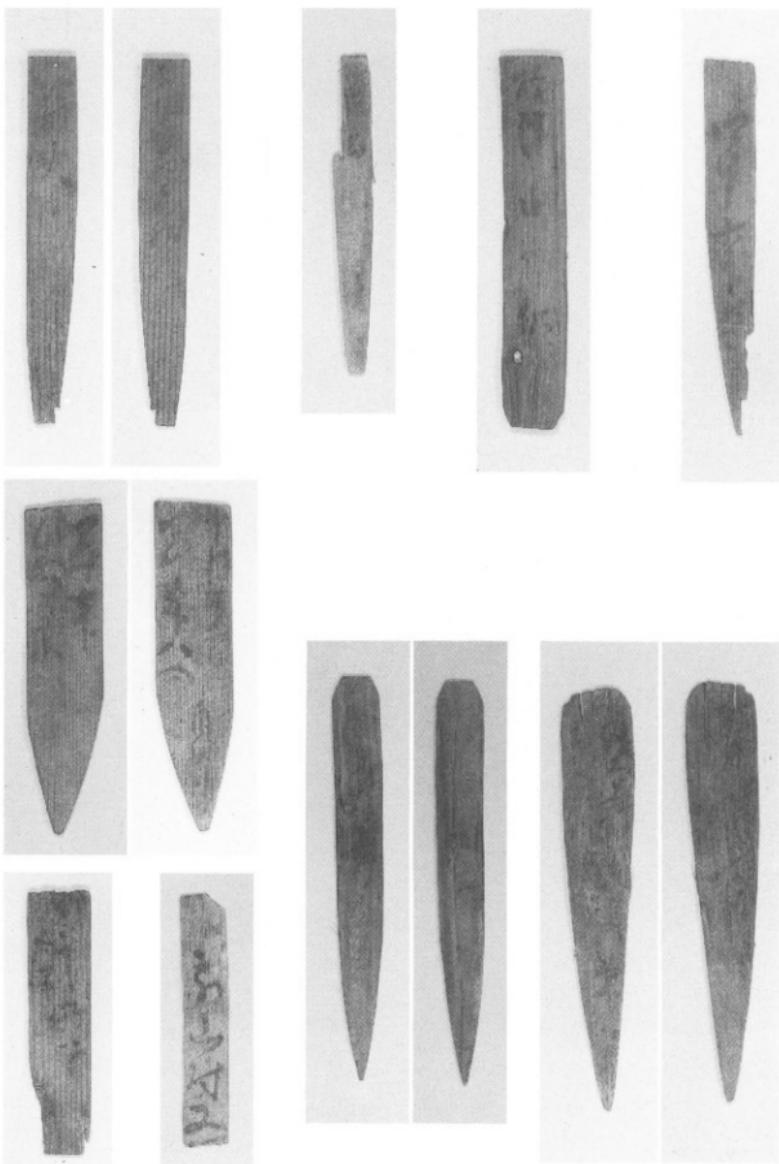


煙管（吸口）

図版18

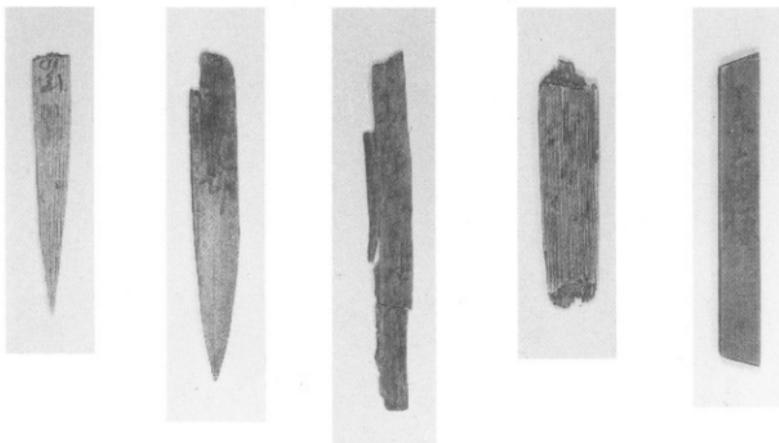


木 簡



木 簡

図版20



木簡・木札



報告書抄録

ふりがな	よなごじょうせき 8いせき							
書名	米子城跡 8遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	16							
編著者名	高橋浩樹							
編集機関	財団法人 米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室							
所在地	〒683 猪取県米子市中町20 TEL(0859)22-7209							
発行年月日	西暦 1996年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積	調査原因	
よなごじょうせき 8いせき 米子城跡 8遺跡	とっとりけんよなごし 鳥取県米子市 からちょう 加茂町	31202	719	35度 25分 27秒	133度 19分 52秒	19950105~	19950430	560m ² 区画整理 に伴う米 子商工会 議所建替 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
米子城跡 8遺跡		江戸時代	水路 堀	陶磁器(伊万里、唐津、志野、織部、備前)、木製品(下駄、曲物、木筒、人形等)、漆器、石製品(碁石、硯)、土錘、銅製品(古錢、煙管等)、鐵製品		船団にはない水路を 検出。 木筒22枚出土。 木製品が多量に出上。		

(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書 16

米子城跡 8 遺跡

1996年3月

編集・発行 財団法人米子市教育文化事業団

〒683 烏取県米子市中町20

印 刷 (有)米子プリント社